
ライン

Jan Ford

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライン

【Zマーク】

Z9576C

【作者名】

Jan Ford

【あらすじ】

とめどない欲望、理不尽な苦しみの繰り返し、他人と自分との間にある違いとは一体何なのか？横須証券株式会社の幹部6人が起こした事件を皮切りに、青島一輝たちの“日常”は先の見えない混乱の中へと突き進みはじめる。

予章（1）

3月11日

東京都新宿区

暑いくらいに暖房がきいている。

窓が全てカーテンで閉め切られているせいで、会議室の中はどこか薄暗かつた。青島真一の脳裏には、いまだについさつき田にしていた曇り空の様子がはつきりと浮かんでいた。どうしてそんなものを覚えているのか自分でも分からなかつた。

黒とシルバーに統一され、必要なもの以外は何一つない殺伐とした部屋は、7人が居座るのには少し広すぎるくらいの場所だつた。巨大な円卓テーブルを囲う7人のスーザン姿の男達の手元の資料をめくる音だけがゆっくり時を刻み、口をきこうとする者はいなかつた。資料から目を離してペットボトルを口に運んだとき、真一は自分の首筋を汗が伝つてゐるに気づいた。それが冷や汗ではなくてただの脂汗だつたらどんなにいいだろうか。青島真一は祈る思いで顔をあげた。ちょうどその時、壁にかけられた時計の長針が2時10分を知らせてカチリと震えた。

時間になつてしまつた。体中から体温が引いてゆくのが分かつた。体が動かない。それは同じ場所に居合わせた残りの男達も同様だつた。同じ時間に、彼らほど時の流れが止まつてくれればと願つた人はいなかもしれない。そして彼らほど、目の前の現実から目を背けたいと望んでいる人もいないかも知れなかつた。ただ、田中正志一人を除いたならば。

全員の視線が田中正志に向けられた。

彼は椅子から立ち上がり、そして口を開いた。

「ご覧のとおりです。この資料には私が四ヶ月かけて調べたことの

全てが載っています。われわれの会社が犯してきた、証券取引法違反やそのほか諸々の犯罪の事実は、すでに警察にばれているんです。はつきり言つて、強制捜査に踏み込まれるのも時間の問題でしょう」「それで？」横須商券の副社長である橋元義介が、口を挟んだ。「それで我々にどうしろというんだ？」

「私は・・・・・自首することが今この状況における最善の方法だと思つています」

挑戦を仕掛けてくるような、固い口調で田中は言いきつた。いや、文字通り今この男は俺たち横須証券取締役の5人に向かつて挑戦を仕掛けているのだ。横須証券の一社員として、共に責任を背負う者の立場から。同時に事件の当事者達を周りから見る外野の位置に立つて。そう、あくまで外野に立つて。

「本気で言つているのか」

小暮が低く唸るような声で言つた。敵意をむき出しに、田中のことをにらみつけていた。

「無論です。それ以外にあなたたち・・・・いや、私を含めて、今この会社にできることなど無いではありますか？」

真一は、田中正志という男のことを何度も人伝で聞いていた。体力があり、仕事も特別できるという訳ではないけれどきちんとこなし、マイペースな所はあるが人付き合いはいいらしい。たしか人事課長の宗谷が昇進させるべきかどうか悩んでいたのを聞いたのだ。『ただ、彼はマイペースなところが強くて。人に使われるのも使うのも苦手だからどうしようか迷つてるんですよ』

酒の席で聞いた時には、そんな奴がいるんだなという程度にしか思つていなかつた。

その男が今、自分達の目の前にたつて、俺たちに破産の宣告をしようとしているのだ。真一は自分が悪夢を見ているような気がしてきた。いやに現実味があつて、残酷で無慈悲な悪夢だつた。

「仮に今動かなくたつてたつて同じことです。幾日か経てばあなた達は逮捕されてしまうだろうし、今回のことに関わってきた橋組の

連中も、おやじへ捕まる」としゃつ。むやみに延命の手立てを講じていふよつも、今血首しつまつたまうがいと思いませんか?」

小暮がこきり立つて言こ返した。

「万が一警察が何の動きも見せなこよつだつたらやひかぬ。むりむりの身をよき渡すよつな」となつたひ、むやみに逮捕などされたら、出所してどつやつて生きとこりだ」

「それほい自分でお考えになる」としゃつ

小暮はきつと田を上げていった。

「たとえ君がなんと言おうと、私は会社を出て行くつもりはない」田中は答えに困って一瞬うろたえて見せた。それからおもむろに大きく息を吐いた。吐き出した息が心の中の憤りに火をつけて燃え上り、田中の口をついて出てきた。

「どうして分かつてくれないんです？」

小暮の頬に痙攣が走った。

「分かつていらないだと？！分かつていらないのは君のほうじゃないか！われわれはこのことが見つかれば破滅するんだ。財産も家庭も地位も体面も、この先の人生全てが消えてなくなるんだ！自首すればどうにかなると思っているのか？罪が軽くなればそれだけで十分だといいたいのか？君は何も分かつていない。たしかにそうかもしれない。どうせ逮捕されるなら自首したほうが言いなんてことは、私にだつて分かつていい。だが、逮捕してつかまつても、自首してつかまつても、結局は同じだ。全て破滅するんだよ！」

ばんと大きな音を立てて小暮の両手が机を叩きつけた。振動が「真一」の手元にまで伝わった。

息を切らして田をギラギラと光らせていた小暮から、とつぜん空気が抜けたように怒りが消え去り、その顔が悲しみであふれだした。まるで、声に出していいってしまったことで今まで見えていなかつた現実の全てが急に田の前に姿を現して、小暮の表情に影をおろしたかのようだった。

「どうして・・・・こんな田にあわなきやならない・・・・。どうしてわたしたちがこんな田にあわなくちゃいけないんだ」

「真一はたまらなくなつて顔を伏せた。机の上、田の前に田中の作った資料があつた。

俺が横須商券に勤めていなければこんなことにはならなかつた。

俺が横須証券株式会社の専務をやつてさえいなかつたら、目立つた職についてさえいなかつたのなら、こんなことにはならなかつたのだ。

「やめましょう・・・・・。いま嘆いたつて仕方の無いことです」
橋元が消え入るような小さな声でささやいた。不気味で、悲痛な沈黙が流れた。

「わるかつた。もう取り乱したりしないから、続けてくれ」
言葉を次ごうとする者はいなかつた。誰もが口を開けたまま、丸々1分くらいの時間が流れ去つていった。

こんな会議を開いて何の解決になるのだろう。暴力団に寄せられ、息も絶え絶えの会社に、生き残るすべなど残されているのだろうか。真一には何をどうすればいいのか分からなかつた。解決なんてものはありえない、全てが手遅れなのだと、知らない声がささやいていた。あの男の死も、伊横須証券役員6人の運命も、この会社の末路も、全てはこの茶番が始まった時から決まつていたことなのだ。いまさらどうあがいたつて、何も変わりはしない。

「…」のままではだめだ

田中の声が会議室に響いた。真一は顔をあげて田中のほうを見た。
「奴らの動きを放つておいたら、どのみちこの会社は今よりずっと悪い目を見る事になるんです。仮にあなたたちが捕まらなかつたとしても、それだけは決して変わらない。私たちには何の対抗策も残されていなないんです」

「ならば考えるのだ」小暮が答えた。

「どうせ何もしないで逮捕されるところのなら、私はできるだけのことをする。証拠なんて消してしまえばどうでもなる」小暮は突然こちらを向いた。「青島」

「はい」唐突に呼びかけられて、真一は思わず身構えた。
「橋組側とのコンタクトはどうなつてこる」

「羽鳥のことですか？」

真一は答えに迷つた。本当のことを言つてしまえば、交渉は全く進んでいない。けれどもこの場でそんなことを言つてしまつたら、5人の絶望感はさらに深まるにちがいなかつた。今まで羽鳥とのコンタクトを行つてきた者として、今の状況を作るきっかけを生んでしまつた者として、真一にはそんなことはできなかつた。

「現時点ではあまり歯ごたえがあるとはいえませんが、この資料を見せつければ、相手も多少態度を変えてくると思います。今までの出来事が全て警察に露呈されると知れば、無視はできないでしょうから」

「少しの間の時間稼ぎにはなるな」と橋元がつなづいた。

田中は役員達のやり取りを脇で聞きながら、目の前が真っ暗になるのを感じていた。この人たちは、本当に何も分かつていらない。自分たちが今どんな立場に立つているのか、それさえも理解できていないのだ。

「ばかばかしい。俺は一体何のためにここに来たんだ？ 体の周りの気圧が一気に上昇する感覚に包まれて、気付くと田中を怒鳴り声を上げていた。

「いい加減にしてください！」

全員の視線が田中のほうへ向けられた。今までに何かしゃべらつとしていた橋元も口をつぐんだ。

「あなたたちは目先の問題について考えているだけで、現実を見て

いない。警察の動きをこれだけ見せつけられておいて、いまさら証拠の隠滅や、暴力団との問題を議論して、何になるというのです！」

声は会議室中に響いた。

「もうやめましょっ・・・こんなことは。せめて最後に、奴らに一泡吹かせてから締めくくりましょうよ。それがわたしたちが堂本にできる、唯一のはなむけじやないですか・・・」

最後の言葉は震えるのを抑えきれず、田中は言つてから、じらえきれなくなつて顔をうつむけた。悲しみの波が、嘘みたいに胸の奥からあふれ出してきた。

田中の脳裏に、堂本のあの屈託ない笑顔が浮かんだ。笑顔に続いて次々といろいろな場面が頭の中に蘇つた。消そうと思えば思つほどその姿はより鮮明になり、記憶が際限なくつむぎだされた。胸にこみ上げる熱が田中に思い出のつらさを教え、忘れようと努めていた後悔の念が再びこみあげてきそうになつた。

俺はなんて馬鹿だつたんだろう。

田中は自分の身勝手さに吐き氣を感じた。

「・・・証拠を消すんだ」

小暮は頑として言い張った。

田中は小暮の目をじっと見つめていたが、何も言わなかつた。この人は決して自分の意見を曲げたりしないだろう。末端の一社員である自分でさえもそれはよく分かつていて、横須商券の二代目社長の座に着いたときから、今までずっとそうだったのだ。

「こんなことをしているようだから、いつまでたつてもこの会社は先代の頃よりも大きくなれないんじゃないですか」

「なんだと！」

小暮が立ち上がりんばかりの勢いですごんだ。

言つてしまつてから後悔したが、どうしようもなかつた。田中はすごい剣幕でにらみつける小暮の目を、なるべく毅然として見えるよう睨み返した。

「やめてください」あわてて橋元が止めに入つた。

小暮は黙つたが、じつににらみつけるのだけはやめようとした。

「

前社長が胃がんで倒れた直後に急きょ後継者へと抜擢されたのが、当時総務を務めていた小暮久則だつた。56歳という年齢にもかかわらず、社員の誰よりもエネルギーで、商売意欲ならば誰にだって引きをとらない。その反面、他人の意見を受け入れる柔軟性と寛容さに欠けているという欠点はあつた。いや、自意識過剰だつたといったほうがいいかもしだれない。実力が伴つてゐるがゆえに、その自信には鉄壁の要塞のような搖るがなさがあり、総務職についたときからすでに人と手を組んで仕事をすることを避ける傾向があつたらしく、5年前に社長の椅子についてからはその性格に拍車がかかつた。

「そうだ」突然、小暮が言い放つた。「君の言い分はよく分かつた。

では、てつとり早い話ここで多数決を取ればいいじゃないか

真一は愕然として息を吸い込んだ。もう決めてしまうというのか。
「手を上げるのは今ここにいる7人だ」

「しかし多数決とは・・・」

堀口は何か言おうとしたが、次の言葉が思い浮かばずに口をつぐんだ。

「意見がありますか、堀口代表？」

「あ・・・」

堀口はYEDともNOともつかずに口をパクパクさせたが、結局、何も言わずに口を閉ざしてしまった。

「君は構わないか、田中君」

「ええ、構いません」

「反対の人はいますか？」

不気味な沈黙が流れる。全員が体を固めたまま、口を開こうとしたが、なかつた。

どうして皆黙っているんだ？本当にこのまま全てを決めてしまつてもいいのか？これから自分の運命が決定されてしまうかもしれないというのに、どうして誰も何も言おうとしないんだ？

「では、自首することに賛成の者は、拳手」

田中が手を挙げた。

俺は一体どうしたらいいんだ？田中の言つてていることは正しい。むやみに策を弄しても、状況がよくなるわけじゃない。それは分かってる。けれども、この俺にいまさら逃げ出す資格などあるのか。全てを始めるきっかけとなつた俺が逃げ出して、巻き添えを食らつた奴らを置き去りにするなんてことが果たして許されるのだろうか。そのとき、橋元の手が上がつた。

辺りの空気が凍りついた。小暮が、私たちの味方じやなかつたのかという表情で堀口の方を見た。

数秒後、浅井の手がゆっくりと上げられた。

小暮の顔からわずかに赤みが引いていった。3人の手が拳がつて

いる。

どうしたらいい。上げてもいいのか、いけないのか？自首するのか、それとも全てを隠しとおすのか？しかし、答えは誰からも返つてこなかつた。真一は自分が孤独なのを感じた。

1時間も2時間も時間の経つたような気がした。あらゆる物が止まつていた。鼓膜の下に、心臓の規則正しい鼓動が伝わつていた。体を動かすことができない。真一は不意に、電話口で青い封筒を片手に立ち尽くす自分の姿を思い出した。何もかも、あの時と同じだ。あれだけの後悔の後で、自分は何一つ変わつてない。警告もできなければ、ただ手を上げるということさえできないのだ。

やがて小暮がゆっくりと口を開いた。

「3人だ」

力がすっかり抜け落ちたみたいに、田中はパタリと腕を垂らした。橋元の手が、静かに下げられた。

「経営の継続に賛成の者は挙手」

4人の手がいっせいに上がつた。

「経営を継続する。これで決定だ」

小暮は厳粛に言い切つて、田中のほうを見上げた。全てが決まつた。俺と、ここにいる6人と、横須証券の運命はいま決定された。

田中は表情をなくして遠く向うを見つめていた。真一はその瞳の中に妖しげな光を見たような気がした。

「これで解散とする」

いつもの硬い表情で、小暮は立ち上がつた。堀口が、谷屋が、そして浅井と高橋もうつむきながら立ち上がり、真一はそれに続いた。一人、また一人と重役たちは部屋を後にし、最後に1人立ちすくむ田中に一瞥をくれてから真一も部屋を出て行つた。

背中の後ろで、会議室のドアが音を立てて閉まつた。

5月13日

電灯が一つ浮かんでいる。

青島一輝は夜の道を一人家へと向かつて行った。人影はなく、音を立てる物もない。

まるで体に重りが乗つかつていて歩くのがつらかつた。疲れがたまつて、いつもの道のりを長く感じる時はない。早く帰つてゲームでもしたかった。そうじやないんだつたらさつと眠つてしまいたい。

山村先生の声が、突如、頭に浮かび上がつた。今日の午後の部活のことだ。一輝たち1年生の部員は全員、剣道場の前に立たされていた。

「次のテストで順位を10位上げられなかつたやつはペナルティだからな」

何で部活の顧問にまでそんなことを言わねなければならないのか、意味が分からぬ。一輝の隣に立つて吉沢はこちらに視線をあわせて、口には出さずにそう言つていた。一輝は危ないから前を向いてろと視線を返した。

「剣道部の今年の一年生は、どうも成績が悪いとの話をきいた。部活をがんばつたつても、勉強を怠けてるんじや話にならないからな」

村山先生はそういうつて部員に睨みをきかせた。常に起こりっぱなしの顔に、さらに威圧感が増す。

結局、勉強の話も含めて一輝たちは延々15分間も鬼顧問の話を聞かされるはめになつた。部活が終わつて、それこそ意識が飛びん

じやないかと思うほどきつい練習を終えた後に先輩が言つたことに
は、このお説教は毎年恒例の儀式のようなものらしい。

成績が悪いっていうのもたぶんでっちあげだよ、とも聞いた。吉沢はそれを聞いて、帰る間中ずっと愚痴をはいていた。ただ、一輝やその先輩は、吉沢本人の成績に関して言うならば鬼顧問の話はながちでたらめとは言い切れないな、とひそかに思つていた。

なんにしても今日は期末テストの一週間前だ。いやでも帰つたら勉強しなければならない。十分きつい練習なのに、その上ペナルティを食らうなんてごめんだつた。

桜園公園に差し掛かつたところでふと見ると、備え付けの柱時計が11時の少し前を指していた。塾から帰るのはいつもこれくらいの時間なのだ。それから帰つてから学校の勉強もしろといつのが、そもそも間違つているのだと一輝は思った

マンションに着いた。パスワードを入れて中に入り、青島家の部屋がある12階までエレベーターを使う。

ただいま、と言いながら玄関を上がって、手洗いうがいを済まし、そのままの格好で居間に入つて、用意してあつた夕食をさつと平らげた。

部屋に下がるつすると、母さんが一輝のことを引き止めた。

「明日から期末テストの一週間前でしょ?」問いかめるように聞いてきた。

「ただだけど

「じゃあ、部活はないのね」

母さんはそういうと、安心したように台所へ引き下がつた。どうやら一輝に期末テストのことを思いださせよつとしたらしい。一輝は、ついさつき一生忘れられないほどに念を押されてきたばかりなんだから、わざわざ確認することないだろうとうんざりした。

自分の部屋に入つて、ベットにカバンを放り出す。机の前につき卓上ライトのスイッチを入れた。カバンからノートを一冊取り出して英語の予習を始めようとしたときだつた。

突然どこからか男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「もつとよく見せろ！」

声はどうやら廊下のほうから響いていたらしかった。同じ階か、それとも別の階だろうか。反響していく、それもドア越しにくぐもつて聞こえているのでよく分からなかつた。ロイヤルマンション坂田に引っ越してからもう5年になるけれど、喧嘩や暴動のような騒ぎをお目にかかつたことは今まで一度もない。一輝は気になつて耳を傾けた。いつたい誰がさけんでいるのだろう？

耳を澄ますと、小走りで外の廊下を踏み鳴らす音が聞こえてきた。ずいぶんと乱暴な印象を受ける。

足音が消えて何の音も聞こえてこなくなつた。

おそらく、「もつとよく見せろ！」と怒鳴った声の主が、今までに「よく見せ」てもらつているところなのだろう。

しばらくの間沈黙が続いた。一輝はさつと耳を澄ませていたが、外からは物音一つ聞こえてこない。予習を片付けなければならぬことを思い出し、粘るのを諦めて机に向かおうとした、次の瞬間、さつきと同じ男の声が廊下いっぱいに響いた。

「こんなことをしたつて無駄だぞ！」

再び沈黙が流れる。

「あの人は今日来れない！」

誰と話しているのだろう。一方の男の声ばかりが大きくて、相手の声が聞き取れない。だけど、会話をしているのは確かだつた。

クソッという悪態に続いて男の駆け足の音が響いた。足音から男のあせりや不安が伝わってくるかのようだ、あわてた、せわしない靴音が廊下を叩き、それがだんだんと小さくなつてついに聞こえなくなつた。どこかに行つてしまつたようだ。

廊下から聞こえてくるのは、後に残されたもう一人の人物の足音だけだつた。その人物がどこに行くのか多少気になつたけれど、勉

強を放り出してまでする必要があることは思わなかつた。一輝は机の前に居直つて、ノートに手をつけた。

突然、玄関のドアが開いた。

「ただいま」

父さんの声だ。一輝は弾かれたように玄関の方向を向き、ぼうぜんと壁のむこうを見た。廊下から足音は聞こえてこない。0だ。1-0=1。1は父さんだつたのだ。

どうしたのさつきの、と問い合わせ母さんの声が聞こえた。なんでもない、と返した返事はひどく疲れているようだつた。

一輝の父、青島真一は、横須証券という証券会社の社員を勤めていた。よくは知らされていないが、重役を勤めていて、このマンションに引っ越そうと言い出したのもほんならぬ父さんだつた。どうせ引っ越しのなら東京のほうがいい、という母さんの反対も押しのけて決められたらしい。今に至つても、一輝は千葉県の一角に住居を構えた理由を聞いていないし、何度も聞いても一人はそのことについて話してくれなかつた。

常に落ち着いて、それでいて冷たい雰囲気を持つ父親だつた。少なくとも一輝はそうだと思つていた。一緒に公園や旅行に言つた記憶はほとんどない。もっとも、父さんと近くにいる機会が少なかつたのは仕事が忙しかつたせいでもある。

それにしてもさつきの男は何だつたんだろうか。しゃべり方からしても、あの足音の雰囲気からしてもあの男が素行の良い一人前の男とは言つたがたかった。それだけではない。父さんもまたそのような男を黙らせ、取り乱させ、あわてて退散させるだけの何かをしていた。金銭関係か、仕事の関係か、単なる因縁か、それとも女性関係だろうか？最後の一つは無いな、と思い、すぐに懸案項目から外したが、どれにしたつて、男のあのあわてきつた態度を説明することができなかつた。

一輝が一人想像を膨らましている間に、真一は自分の部屋に引き下がつてしまつていた。

部屋の扉がバタンと音を立てて閉まった。

一輝は、前にも似たようなことがあったのを思い出した。あれは10年近く前のことだ。当時は埼玉にある母側の祖父母の家に住んでいて、一輝はその頃小学校の入りたてだった。学校ではようやく数人の話し相手ができる、帰り道に一緒に話しながら帰ったのを覚えている。同時に、6年間通つた通学路が頭の中によみがえつてきただ。

家に帰ろうとすると、玄関の前に一人組みのスース姿が立ちふさがっていた。今でさえ駅の中によく見かける普通のサラリーマンの風体が、あのときはひどくおつかないものに見えたのだ。一輝は近寄ることができなくて、結局近くの通りに止まって、近くの建物のかげに隠れることにしたけれど、男たちは一向に立ち去る様子が無かつた。それも時々、インター ホンに向かって何かいっているのが見えた。とても、温かな雰囲気とは言がたかつた。一輝はその間ずっと、泣きそうになるのを耐えていると、やがて日も暮れて辺りが暗くなってきた頃に家の中から祖父が出てきた。

眉を寄せて、男達に向かってたしなめるように何かを言つと、男たちもそんな祖父に向かって何やら言い返した。しばらくして、祖父は男たちの間を通りぬけるように道路に出てきて、陰に隠れている一輝のところへと駆け寄つてきた。

こんなところにいたのか。さ、おじいちゃんと帰る。祖父はそれだけ言つて、一輝の腕を引いて家に入った。玄関を通る時に、一輝はじつとこちらをにらみつけていた2人の男のを見上げた。それは、生まれてはじめて目にした。疲れと絶望とで打ちのめされた人の表情だった。その時の一輝にはその表情の意味が分からなかつた。男達が父の勤める横須証券の系列会社の社員で、後に契約を打ち切られたということを知つたのは、それから4年ほど経つてからだった。

時間が無い。さつさと宿題を片付けなけりや。一輝は田を覚ましたみたいに慌ててシャーペンをつかんで机に直った。父さんのことはとりあえず後でまた考え方よう。いちいち構っていたりきりが無い。隣の部屋からは、ひつそりと静まって何の物音も聞こえてこなかつた。

晴天。

雲ひとつ無い空に太陽がさんさんと照つている。それなのに、東京の街中は凍りつくような寒さで道行く人々を包み込んでいた。

「あいつほんとにありえないんだって」

車の滑走音にかき消されないように香川が大声を張り上げた。

「俺もう、五千円は貸してるぜ」

「何に使つてるんだよ」

「…………とかじゃない？」横を通り過ぎていったトラックが香川の言葉を引き裂いた。

「俺だけじゃないぜ。相沢とか西原は一万くらい貸してるって言つてた。全部で五万くらい借りてるって西原は言つてたな。このままじゃ絶対返つてこないだろな」

「お年玉は？」

「あつても使つちゃうだろ」

「それじゃどうしようもないな」

一輝と吉沢は笑つた。

駅から市川中学高等学校までは8分くらいの距離だった。一輝と吉沢と香川の3人は、通学路のビルの間を歩いていた。通りを折れてしばらく行くと、学校が姿を現した。ビルの面する大通りからはだいぶ離れた、都会の喧騒から見放されたような場所だ。少し距離を置けば、地元の人たちでもここに学校があることを知らない人のほうが多いのだそうだ。日々の忙しさに追われているこの都市では、自分に関係の深いこと以外はあまり重要でないらしい。生徒にしてみれば、自動車の音も無く静かでけつこうだつた。

市川中学高等学校は、創設から10年もたつていらない新しい私立学校であった。東京都の東端に位置し、地価が高いせいか面積は窮屈なくらいに狭くてグラウンドも何とか申し訳が立つという程度の

広さで、そのくせ建物だけはやたら高く作られていて7階まであった。おかげで音楽室や理科室などの移動教室のとき生徒にとつては一苦労だった。進学実績は他の私立に比べると中間より少し下くらいでお世辞にも流行つてゐる学校とはいえたが、一輝が中学受験でここを受けたのも第4志望としてで、理由は自分のうちから比較的近かつたというだけのことだ。しかし結局第1志望から第3志望までを落ちてしまい、ここに来ることとなつたわけだつた。もつとも、それらの落ちた学校というのは母さんが半分高望みで受けさせた学校で、一輝はもともと受かるなんて思つていなかつたし、第5志望の学校は市川よりも偏差値は高かつたがとても通えるような場所じやなく、はじめから中学で受験をするんだつたらここに来ることが決まつてゐたようなものだつた。

3人はしゃべりながら学校に入つた。教室にはまだあまり人がいなく、一輝たちは話をしながらS H R ショートホールームが始まるのを待つた。

やがて教室に人が増えて、そこらかしこが盛り上がり上がつて来る頃になつて、ようやく1年4組担任の藤村先生が教卓の前に立つた。40代前半の男の先生だ。規則や礼儀にうるさくその上怒ると怖いので、誰も口にはださないものの、あまり生徒からの印象は良くない。

「席について」

教室中のしゃべり声が潮の引いたみたいに小さくなり、皆は席に着いた。

藤村先生は欠席者をチェックして連絡を言つのに、ものの1分もかけなかつた。叱り散らすのにかける時間は10分や20分だつてかけるくせに、こついう事務的なことにはひどくせつかちなのだ。

一輝はだからまさか、S H R の後に先生が教室に残り、自分のところに歩み寄つてくるものとは思つてもいなかつた。

1時間目の準備をしようつと、下に置いたカバンを開いた時だつた。

「青島」

いきなり頭の真上から声をかけられて、思わず反射的に「はい！」と言つてゐた。顔を上げると藤村先生がすぐ目の前に立つてゐた。

いかつい強面の眉間にしわを寄せ、こちらを見下ろしている。心臓が不整脈を起こして縮み上がった。

「ちょっと来い」

頭が真っ白になる。一体何のことで怒っているんだ？ 部活・・・勉強・・・それとも生活態度か？ どれにも心当たりは無かった。でも何かあるのだ。

言われるままについてゆくしかなかつた。教室中、ほとんどの人がこつちを見て、興味ありげにささやいたり、苦笑いや、笑いを浮かべたりしていた。恥ずかしいのと不安とで顔が熱くなるやら青ざめるやら、変な感じだつた。一輝は諦めて藤村先生の後に続いた。

藤村先生は教室の外に向かつて歩き出した。一輝もそれについていく。先生が怒る場所と言うのは、6割以上が教室の前、3割が通学路などの校舎の外、そして残りが職員室だと決まつていて。一番危険な場所が、職員室だ。しかし、廊下に出た藤村はそこで立ち止まらずにさらに進んでいった。無論、校庭に出てから用を済ませよう、ということではあるまい。職員室に行くのだ。一輝は啞然とした。怒られるようなことをした覚えは無いのに。移動教室の途中の人たちからの注目を集めながら、一輝は放心状態で歩き続けた。

「呼んできました」

職員室の扉を開けてすぐに、藤村先生が言った。

「ありがとうございます」

答えながら立ち上がつたのは、部屋の奥のほうにいる、見たことの無い若い男の先生だった。深刻な表情を浮かべて一輝のことを見ている。

職員室は授業用の教室3つ分くらいの広さで、それでもたくさんの大型机や資料の棚などで埋め尽くされていてとてもごみごみしていた。机は上がプリントやファイルなどで埋もれているものなど少なくなく、そこに座つて次の授業のない先生がパソコンに向き合つてなにやらじっと画面をにらんだりしている。

藤村先生につれて来られているというだけで、職員室にいる先生

が皆「なにをして怒られるんだ?」という非難の目で一輝を見ている
ような気がして、一輝は、廊下を歩いてきた時に味わった恥ずかし
さよりはましかもしれないけれど、やはり不安が頭の中を渦巻くの
を感じた。

「青島君。ちょっとこっちに来てくれる?」

一輝は言つとおりに、その先生のところへ向かつた。不安感で押
しつぶされそうになるのを必死に耐えようとする。頭の中ではまだ、
どうしてこんなことになつたんだ、という疑問が行つたり来たりし
ていた。

ふと、その先生の机の上で何かが動いているのに気が付いた。横
からなのでよく見えないけれどあれば、パソコンの画面だ。画面に
何かが映つている。近づくにつれて、それは何なのか少しづつ見え
てきた。

一輝は机の前まで来て、立ち止まつた。いまや画面の中の映像が
正面から見えた。

「見ての通りなんだ。今、大変なことになつている」

一輝は、さつきまでのショックが物の数に入らないことを悟つた。
画面に移る父親の顔を見て、一輝の思考は完全に停止してしまつて
いた。その映像が今まさに、走り去つていく警察の車輛を捉えてい
る。

”横須証券 経営者6人が逮捕”のテロップが、”生中継”的文
字の横でチカチカと点滅していた。

2

5月13日

「社長！何か言ってください！」

「橋元さん、今回の事件について・・・」

「今回の事件の責任についてどうお考えですか！」
「いづらは本当に人に向かって質問をする気があるのか、と前田は
疑問に思つた。こう矢継ぎ早にまくし立てられちゃ、言いたいこと
もいえないだろ？　言つたとしても聞き取れやしない。

「前田！何やつてんだ！」同僚の宮元が叫んだ。「お前も撮れよ！」
撮ろうと思つても撮れないのだ。人だかりの先は、相変わらず目
を開けていられないくらいのフラッシュでふれていた。それは6
人の容疑者の移動とともに、少しづつパートカーの待つ道路へ向かっ
て動いていった。

さがつてさがつて、という警官の声も聞こえた。今日の逮捕劇の
予定がどうしてマスコミに知れ渡つているのか、あの警官はきっと
訳が分からずにいるに違いない。それはまた前田にとつても同感だ
った。つい2時間前までは、自分がこんなところで横須賀証券の役員
の逮捕の場面を取材するはめになるなんて、予想だにしてなかつた
のだ。

「今すぐ××駅に行つてくれ」

前田はパンツ一丁、ほとんど裸の格好で受話器を取つていた。つ
いさつきまでシャワーを浴びていたのに、電話の呼び出し音があま
りにもしつこいので仕方なく出たのだ。受話器の向つで待つていた
のは、なんと加持^{かじ}だつた。
「どうしたんです」

羽間出版、編集長の返事はほとんど間を置かずに返ってきた。

「スクープだ。横須証券の取締役がこれから逮捕される」

「え」

あの横須証券が。そいつは間違いなく大スクープだ。

「本当ですか」

「いや、本当かはどうかよく分からない」

「どういうことです?」

「匿名で電話がかかってきたんだ。横須証券の社員だと名乗っていた。それ以外は何も言つてい

「信憑性に欠けますね。ただの悪戯じゃないんですか?」

「悪戯だったらもつと大手の出版社にかけるさ」加持は意氣を高揚させて言つた。

「大手だったら相手にもされないでしょう。ネタに困つてて、全く信用できないような悪戯でも喜んで信じてしまうような小さな出版社だから、電話をかけてみたんじゃないんですか?」

加持編集長はこの手の冗談が通じる人だったが、それでも士気をそがれたらしくウームと唸つた。

「あたつてなんぼだ。とりあえず行つてみる。富元の奴にも言つておいたから7:30には××駅についてるはずだ」

7:30。あと1時間もなかつた。こうなつたら行くしかないだろう。

「すぐに向かいます」

それから急いで服を着て、家を出た。コートを羽織るのも忘れて出てきたので、電車を降りてから後悔した。

富元と合流してから、のんびり歩いたのがいけなかつた。会社の前には既に大きな人だかりができていた。

「一言お願ひします!」

聞いていて、まるで断末魔の叫びのように思えた。

小暮社長がパートナーに乗り込もうとしていた。無駄な抵抗のよくな気がしたが、前田はできる限り前の記者に体を押し付けて、頭の

上に掲げたカメラのシャッターを切った。2枚、3枚と、社長の頭にフラッシュを浴びせる。洪水のようにシャッターの音が鳴り響き、どれが自分のものなのかも分からなかつた。

「社長！」

最後の喚声を合図に、小暮社長を乗せたパトカーが発進した。パトカーは始め緩やかに、だんだんと速くなつて遠ざかつていった。とどめの一枚を撮り終わると、シャッターの大合唱は次の獲物の所へと移つてゆく。

6人の重役は警察につれられ、次々とパトカーに乗り込んでゆく。最後の一台が会社の前を離れていつてから、辺りはようやく静かになってきた。

野次馬に来ていた観客たちの数は徐々に少なくなっていくが、入れ替わりに通りを歩く新たな野次馬たちが、記者に向かつて事情を尋ねたり、立ち止まって何事だろうかと横須証券のビルを眺めていた。

「撮つたか？」

宮元が息を整えながら近づいてきた。スーツは乱れに乱れ、まだ軽く息を切らしている。嵐の中から出てきたような格好だ。

「ざんねんながら

「もう少し早く来ればな」宮元が悔しそうに笑つた。「まさかこんなにいるとは」

「そつちは撮れたのか？」

宮元は肩にかけたカメラを手に持つて、「何枚撮ったのか覚えてないくらいだ」と答えた。

護衛をしていた数人の警察官たちの乗るパトカーが、2人のすぐ横を通り過ぎていった。ぐつたりと座席に寄りかかっている制服姿の男の姿が、ドア越しにちらりとうかがえた。たつたの4人でこれだけの報道陣を相手に奮闘し、「ぐるうなこと」だった。

「どうして知れ渡つてたんだろう？俺たちの知らないところで情報が出てたのか」

羽間出版は、業界でも全くの名の知られていない小さな出版社だから、そういうことも大いにありえた。

「うちに電話をかけたのと同じ奴が触れ回つたんじゃないかな？」宮元は襟を整えながら言った。

「その自称“横須証券社員”って奴がか？」

「そいつはきっと強烈な自己顯示欲の持ち主か、よっぽど暇をもてあました愉快犯だな。自分の会社のトップが逮捕されるのを報道するなんて、普通じゃ考えられない」富元はまるで分かつたように口を開いた。

「他の会社の人間が情報を握つて言いふらしたのかもよ」

前田の言つたことは無視して、富元は、どうする?このまま戻るか?と尋ねてきた。

「すぐ帰つてもしようがないから、そちらの喫茶店で休んでこようぜ。たしか駅前によさそうな所があつたと思つ」

急いで戻る必要は無かつた。羽間出版では時事的なニュースをとりあつかった雑誌や新聞は一つもだしていないので。

来た時に持つていた地図を前田がもみ合つている間に落としてしまい、しかたなく同じく駅に向かう報道陣の後をつけて2人は駅にたどり着いた。

喫茶店“ブルボン”はアンティークな装飾を施したおしゃれな店だった。昼前だったので中は空いていたが、いつもはもっと多くの人でにぎわっているのだろう。

「今回の事件にどれくらいページを割くかな」富元は飲んでいたコーヒーを手元に置いた。

「加持さんは乗り気みたいだつたけど、今回のことにはつりの出してるどんの雑誌のコンセプトにも合つてないからなあ」

羽間出版の出す雑誌の中でもつとも印刷数の多い『モダン・ヒストリー』で扱うのは、一昔前の社会問題や、世間に忘れ去られた事件の裏舞台、そこで織り成されてきた知られざるストーリー等だ。誰も手をつけなくなつたところを見計らい、独自の調査や取材を行い、そこにあるものを詳細に描いてゆく。けれども時事的なニュースは載せないし、物好きしか買わないから出版部数はなかなか増えない。

「だらうな」富元は残つていたコーヒーを飲み干す。「こんなに頑張つて撮つただけど

「でも電話かけてきた時は、加持さんかなり興奮してたぞ」
「そりゃあ自分の出版社の独占スクープとなれば、誰だつて多少張り切るや」

「それにしても、何か意図でもあったのかな。俺だったら自分の会社の悪いニュースを流そつなんて思わない」前田はつぶやいた。

「ということは、あれは横須証券の社員じやなかつた、つてことか？」

「普通に考えたらそうだ。でも、部外者がどこでそんな情報を得るんだ？」

「警察だつたら簡単に分かる」富元が提案した。

「警察官が、たとえ面白そだからつてこんなことするか。だいいち警察にしてみたら、マスコミに知られるのは逆に迷惑だろ」コーヒーを飲もうと手を伸ばしてから、前田は空になつたカップを不満げにみつめた。「事件に絡んだ人物が密告したとか？」

言つてから、ありえないことだと気づいた。放つておいても世間のさらし者になつた事件を、何で前もつてアピールをする必要があるのだろうか。そもそも、事前に情報を得ることができ、且つこんな真似をするだけの目的を持つ人間がいるだろうか。

「まあ今後の展開しだいでわかるさ」富元はポケットから携帯を取り出した。「もうニュースが流れてる頃だろ」

見せてくれと言つて画面を覗き込んだ。ボタンを数回操作すると、横須証券本社ビル前の映像が画面に映し出された。リアルタイムではなく、逮捕劇の様子をプレイバックして流したもので、画面はひどく横揺れしていた（富元はどこにも映つていなかつた）。逮捕された6人の顔のアップが次々と映され、記者達の絶叫に近い質問の声と、役員5人の無言とがテロップとなつて表示されている。5人の顔は、土氣色といつていいほどに青ざめていて、ひつきりなしに浴びせられるフラッシュの光のせいで余計に白く見えた。

音楽とともに映像が切り替わつて、正面に女性キャスターが現れた。

『今日午前7時50分ごろ、本庁は株式会社横須証券の役員5人を、証券取引法違反の容疑者として逮捕しました。突然の逮捕に、これから日本の株式市場に大きな影響が出ることが予想されており、また、横須証券が進めていた山本ファンンドの買収についても、今後変化があるものと思われます。今回横須証券が行つたとされている不正取引とは、先月6日に・・・』

証券取引法違反なんて、ちょっとと遅れてる。いちど世間で騒がれた事件ていうのは、汚職事件を除けば、当分の間は起きないものだと思っていたのに、とすると、横須証券はなかなか懲りない会社だつた。

そのとき、前田は不意にあることを思いついた。

「なあ、この事件を『モダン・タイムズ』に載せられないかな。トップ記事としてさ」

「そりや無理じゃないか?『モダン・タイムズ』じゃ昔の事件しか扱わないし・・・」

「違うんだ。今回の事件と前にあつた事件と一緒に書くんだよ。昔流行した証券取引法違反の犯罪を題材にして、今回の事件はその照らし合わせの材料にするんだ」

「なるほど、いいんじゃないか。加持さんに相談すれば載せてくれるかもしれない。旬のニュースと関連づけて発行部数もアップつてわけか?」

「そうじゃない」前田は身を乗り出して言つた。「このままじゃいけないと思わないか?」

「何がね」

「このままじゃ、羽間出版はずつと保守的で流行おくれな出版社だ。ほとんどの人たちには見向きもされないような雑誌を書き続けて終わっちゃう。そろそろ新しい物にも目を向けていかなきゃだめだろ」

富元は突然口元に笑みを浮かべて言つた。

「じゃあ、どうして羽間出版なんかに入つたんだよ」

「入つた時はこんなこと思つてなかつたんだ」

富元は「一ヒーを一気に飲み干してから反論した。

「分相応つてものがあるだろ。最新のニュースを追いかけるノウハウも何も無い俺達にできることなんて、高が知ってる」

それを言われたら、元も子もない。

「とりあえず、やれるだけやつてみるか」

「応援はできないぞ」

「まあ精一杯がんばるよ」

なんかあつたら、途中経過だけでも教えてくれ、と頃つて富元は笑つた。

そう、とにかくやつてみないことは何も始まらない。まずは役員の経歴を詳しく調べてみるとから始めよう、と心の中でつぶやいて、残り「一ヒーを勢いよく飲み干した。

7月5日

この日千葉県は今年の最高気温35℃を記録し、うだるような熱天下にあった。

渋滞の真っ只中の国道1号では、車の排気と日光とでことさらに熱気がたちこめ、座席に座つていてるだけで汗が止まらない有様だった。動かない車の列にいる人たちは、目的や、どれだけ急いでいるかは違えど、皆同じようなストレスを胸にして自分の前方の車をにらみつけていた。久々の家族サービスで海に向かおうとしていた父親は、休日をこんな風に費やすなければならないことに苛立ちをつらせていて。4分の1をそんな家族連れの車が占めて、のこりは、定刻に遅れそうであせつっている運搬屋のトラックや、恋人とデートの場所へ向かうカップル、友人の家へ向かう途中の者など様々だつた。どの車もクーラーの生ぬるい空気が充満していて、レジャーをしに行く人たちは、まだ何もしていないのに疲労感でいっぱいになっていた。それでも、彼らが「帰ろう」と言い出すことは無かつた。

羽鳥という男だけは違っていた。彼は苛立ちもあせりも、わずかながらの疲労感すら感じていなかつた。彼は考え方をしていた。彼の頭はそのことでいっぱい、ともするとどこへ向かうために自分が車に乗り、渋滞に巻き込まれているのか、それすら忘れてしまいかねないような様子だつた。彼はタバコを手に持つていたが、一度吸つたきりでもう半分が灰になつていた。明らかに、彼だけはここに居合わせる他の誰とも違っていた。

羽鳥は一時期前に売られていた軽自動車に乗り、安物の黒いス

ツを羽織り、髪は自然体で短髪だった。助手席には使い古した黒い通勤力バンが置かれている。はたから見れば、何の変哲も無い通勤中の会社員だった。そこにはわずかながらの違和感も無く、また、そうであるようにと彼はいつも気を配っていた。

突然、どこからか音楽が鳴りだした。ロック調で、30年近く前の流行歌であり、彼の携帯電話の着信音でもあった。彼ははたと夢想の世界から我に返つてカバンから携帯電話を取り出した。

「羽鳥か」

電話口に出たのは、聞きなれた甲高い男の声だった。ヒステリックな調子が混ざっているが、それはいつものことだった。

「はい」

言わなくとも分かるのに、相手は「俺だ、陣内だ」と名乗った。

「どうしました」

「集まるのは中止だ。連中の話はでまかせだった」
やはり今回のこととは嘘だった。はじめから、あんまりにもスムーズに進むので違和感はあった。渋滞に巻き込まれて正解だったかもしれない。

「分かりました。それで後始末は誰が・・・」

「もう頼んである。とにかく今日のことは無しだ。じゃあな」

一方的に電話が切れた。羽鳥は軽く舌打ちをしてまた携帯をしまつた。あの人と仕事をすると、いつもろくなことが無い。どうしてあんなのが自分よりも上に立つているのか不思議でならなかつた。けれども用事がなくなつたのは好都合だった。羽鳥はほとんど吸つていらないタバコをそのまま灰皿につつこんで、100メートルむこうに立つ道路標識に目を凝らした。問題ない。ここから青島真二の家までそう遠くないはずだった。

あの事件が発覚してから、既に2ヶ月あまりがたった。その2ヶ月の間は、青島家の周りに警察がつめている可能性もあつたので青島家の様子を見に行くのは避けていたが、これだけの時間が経つていながら、いまだに周辺の監視が続けられているとは考えにくかった。もういいだろう。親友であり、また、俺が人生を破滅させた男の家族がどうしているのか、多少なりとも興味があつた。

前の車が少しづつ動き出した。羽鳥も軽くアクセルを踏む。

思えばここは、青島に会いに行く時にいつも通っていた場所だつた。たいていが、夜帰宅時を待ち伏せに来ていた。羽鳥と顔を合わせるたびに青ざめる青島を見るのは、一種の快感でもあり、哀れで心苦しくもあつた。

最初に再開した時のあいつの驚き様を、まだはつきりと覚えている。あれは去年の夏・・・いや、春先のことだつたかもしれない。土砂降りの雨の中だつた。真夜中に自宅へ向かう途中の青島に後ろから声をかけたら、あいつは黙つて固まつてしまつた。いきなり名前を呼ばれてどう反応したらよいのか分からなかつたんだろう。

「誰ですか」

青島の声は雨の音でかき消されてほとんど聞き取れなかつた。羽鳥が何も言わなかつたから、あいつはもう一度「誰ですか？」と聞いてきた。

全てを話してやると、あいつは再び固まつてしまつた。今度は文字通りからだの芯から凍り付いてしまい、そしてからなきついてきた。地獄の中に光がさしたと思ったのだ。たすけてくれ、と震える声で青島は言つた。聞こえたのはそれだけだつた。消え入るように細い懇願は、雨の激しさに打ち消されて全く聞こえなかつたのだ。だが、聞こえていなくて良かつたかもしれない。もし聞いていたら、昔の親友を裏切り、人生を破滅させるまでにもつと苦しまなければ

ならなつただろうから。

「俺は仕事をしに来たんだ」

そう、仕事なのだ。仕事の中に旧友との仲などがあつていいはずが無い。人類は裏切りと略奪を繰り返して、現代まで生き延びてきたのだ。俺がしたのもそれと同じことだつた。

「羽鳥、お前は俺のことを見殺しにするのか？」

その通りだ、青島。

車の列が再び前に動き出した。羽鳥は道路の左に折れて車を回した。

ロイヤルマンション坂田は、この辺りではそうそう見られないような高級マンションだつた。田舎の土地に1本だけそり立つ26階建ての建物はだいぶ離れた場所からでも容易に見つけることができる。建設当初は近隣地域からの苦情で、一時期は建設を見合わせなければならぬような事態にまで陥つたこともあつた。結局、建設予定者である胡桃物産から3度にわたる説明会が行われ、それでも解決案は見つからず、最後まで双方に妥協の姿勢が見られないままに建設は決行された。はじめのうちこそ大きな抗議運動に出ていた住民側も、施工が進むにつれて徐々に勢いをなくしてゆき、そうしている間にロイヤルマンション坂田は完成した。都心に近く、交通の便もそれなりに整つていて、何よりまわりを田んぼやそれほど高くなない建物など平坦な景色が覆つているということで購入者は胡桃物産の予想を上回つた。働き盛りの世代よりも、定年退職後の年齢層からの購入が多く、他業者もここから近い場所に同じような高層マンションを建てようと田をつけはじめた。

ロイヤルマンション坂田までは5分もかからなかった。近くに車を止め、念のために辺りに張り込みの車がないかと確認してからマンションの入り口に向かった。本来こここのパスワードは住居者しか知らないはずなのだが、青島が逃げ込んだ時に追いかけるため、羽鳥は前にもパスワードを調べてことがあり、昨日も今月分のパスワードを手に入れておいたので問題なく中に入ることができた。今の時代、この程度の情報だったら誰だって造作なく手に入れることができる。

マンション内に警官が張り込んでいるという可能性もあった。2ヶ月前とは髪型や服装を変えてきたとはいえ、見つかればアウトだ。腹を括つていくしかない。

現実的な不安以外にも、羽鳥は胸の中になかなか収まらない胸騒ぎを感じていた。まるでこのマンションのどこかに青島真一の亡靈が潜んでいて、羽鳥が来ないかじつと待ち構えているかのような微かな恐怖を感じずにはいられなかつた。エレベーターの閉塞感がよけいに恐怖を煽つた。

やはり、ここに来てはいけなかつたのかもしれない。

エレベーターが26階で止まり、扉が開いた。

青島の部屋は、ここから左にいって突き当たりのところにある。部屋に近づいてゆくにつれて、不安感は大きくなつていった。いやな予感がした。何か違和感があつた。

そして、不安と違和感の根源が羽鳥の目の前に姿を現した。青島真一の部屋の扉に、堂々と貼り付けられている青い封筒。封筒の真ん中でワープロで文字が打たれている。

羽鳥は自分の目を疑つた。突然のめまいが津波のように押し寄せた。夢を見るのだ。ここがあまりにも青島のことを思い出させるから、青島への罪悪感をあらわにみせつけてくるから、だからこんな夢を見ているのだ。そうにちがいなかった。

青い封筒は、やはり田の前にあつた。全身から体温が引いてゆくのが分かつた。青島真一もまたこの封筒を見て、今の自分と同じこの恐ろしい悪寒を感じていたのだろうか？いや、そんなはずはない。青島はそのときまだ、この手紙が何を意味しているか露とも知らなかつたのだ。けれど俺は知つている。この手紙が俺にもたらすものは・・・・・復讐だ。

「どうかしました？」

羽鳥は文字どおり弾かれたように後ろを振り返つた。全ての汗腺から汗が吹き出た。

そこにいたのは60歳くらいの男だつた。ちょうどエレベーターから出てきたところらしく、羽鳥のいるところへと歩み寄つてくる。小柄で、羽鳥よりも一回り背が低かつた。薄くなつた髪から地肌が見える。

「ちょっと、友達を訪ねにきたんですけど」

言つてから、とんでもないことをしてしまつたことに気づいた。

青島の友達と名乗る人間がここに来たのだと警察に知られたらおしまいだ。

「きてみたらまだ帰つていなくて、それでこんな封筒が貼られてる部屋を見つけたんです」

それですか、と男は言つた。男は羽鳥の隣に立つと苦笑いしながら手紙を取り外した。

「取っちゃうんですか」

羽鳥は驚いて男の顔を見た。

「いいんですよ、いつものことだから」

「いつも・・・・？」

「私はここマンションの管理人なんですねけどね、実はこの手紙、

よくおんなじものがこの扉に貼られているんですよ」

「ここに住んでる人が貼ってるんじゃないんですか?」

管理人だという男は、怪訝そうに羽鳥の顔を覗き込んだ。

「この部屋にはだれも住んでいませんよ。それに、住んでる人が自分でやつてるんだつたら私だつてこんなことはしません」男は困った顔をして指先で手紙をもてあそんだ。「1ヶ月くらい前ですかね。この部屋に住む人が引っ越してからみかけるようになつたんです」

青島家はもうここを出て行ってしまったのか！信じられなかつた。残された家族がどんな生活をしているかなんて全く聞いていなかつたし、人を使って調べさせようともしなかつた。

「実はこの部屋に前住んでいたつていうのは、ほら、ついちょっと前に逮捕された横須証券の役員の家族だつたんですよ。それとこの手紙が何か関係知るのかも知れないとも思つたんですけど、本人たちはもういないから確かめようが無くつて。そもそも、『羽鳥』つていう名前がここに住んでいた人のものじゃないんです」

「そんなこと私にいつちやつて大丈夫なんですか」と言いそうになるのをこらえた。今は話の焦点をそらしてはいけない。

「この手紙つて、誰が貼つてるのか分かつてるんですか」「それが分からんんですよ。このマンションの住人の誰かだとは思うんだけど」

住人の誰か。そのうちの一人が俺に復讐しようとしているのか？羽鳥は背筋に寒気を感じた。ここに来てから感じていた不安感も、得体の知れない誰かから向けられていた憎しみによるものなのかもしない。一度思つと、よけいに本当のことのような気がしてならなかつた。

けれどロイヤルマンション坂田には、羽鳥と、橋組がしてきたことを知つてゐる人間などいるはずがなかつた。どうして俺が住人から恨まれなければいけないのだろう。もしかしたら、青島は誰かに全てを話していたのかもしれない。だとしたら青島と親密な関係にあつたその人物が、俺への復讐を企んでいるのだろうか。しかし社員にも話せないような事情を打ち分ける氣になる人物が近隣住民の中にいたと考えるのは、あまりにも不自然だつた。

そもそも、事件の全貌を知る横須証券の6人の役員は既に逮捕され、そして残りの2人は・・・・・2人はもうこの世にいないのだ。

羽鳥への復讐をたくらむ人間などいるはずがないのに。

「じゃあそういうことで」

管理人の男はそう言つて立ち去つとした。

「あ、あの

「何ですか？」

「その手紙、もらえませんかね」

おかしなことを言う奴だ、という風に男は笑つた。手紙がなれば何も始まらない。相手が誰なのか、何をしようとしているのか確かめなければならない。

「ミステリーっぽくて面白い。事件とかをファイリングするのが趣味なんですよ」

「こいつからも事件の匂いがしますか」

「ふんふんしますね」

男はもう一度笑つてから手紙を見た。ビツしたものかと考え込んでいる。

羽鳥には、この手紙をもういたえしなければ何も始まらないと考えることはできなかつた。目の前の危険よりも眞実を知りうるという欲求を優先し、自らの行動に遠慮を持ち込むことはない、それは彼の今までの人生においても一貫されてきた考え方だつた。

「でも、こちおう人에게られた物ですし、あげるのはちょっと…」

「じゃあ中に何が書いてあるのか教えてくれませんか？」

「えつ、と男は口を詰まらせた。それから、やられたなど言つて小さく笑みを浮かべた。

「もしかして、あなたはもうその手紙の中身を見るんじゃ」

「まあ。あんまりにもたくさんあるので、どうせいたずらなら構わないだろ」と思つて、2通だけね

「内容はみんな違うんですか？」

「いや、おんなじだよ。少なくとも私が見たその2通はね」

同じ物を出していったということは、手紙の送り主は俺が来るのを

待ち続け、なんどもなんども管理人が取り外すたびに手紙を貼り付けに来ていたのだ。俺が再び青島家にやつてくることを確信して。なんとしても俺にその手紙を渡そうとして。

「わかりました。じゃあ、『羽鳥勇介様』が現われても私が見たつてことを言わないと約束してくれるなら」

「いいんですか」

「ええ」

羽鳥は手紙を受け取った。

「なんて書いてあるんですか？」

「ええつとたしか・・・『10日後にここに来い』だつたかな」

マンションを出てから、羽鳥は大きく息を吐き出した。夏の昼下がりの外の空気は蒸し暑くてじめじめとしていたが、羽鳥には新鮮でおいしいものに思えた。

今日はもう帰るしかない。結局、青島真一の家族には会えなかつたし、彼らがどこに引っ越したのかまでは教えてもらえなかつた。そしてこの手紙だ。青島真一はとことん俺のことを恨んでいるらしい。たとえ刑務所の中に入つても、こんなに遠くにいる俺に復讐をしてみせるほどに。

車に乗り込んで、エンジンをぶかした。そのとき初めて気が付いた。

手紙の送り主は、一体どうやって羽鳥が手紙を受け取ったのを知るんだ？

7月8日

8時35分。ようやく全てのテストが終わつた。一輝は気がぬけて大きなため息をついた。窓の外を見ると、外はもうネオンサインでいっぱいになつていた。

昨日、学校の近くで通り魔が現われたらしい。今朝のホームルームで藤村先生がそんなことを言つていた。

「場所は 駅から少し離れた所の裏道だ。被害に遭つたのは3年生の生徒で、その生徒は自転車通学で家に帰る途中のことだつたそつだ。電車を使って通学している人はそつにいくことはないとおもうが、一応全校生徒に注意を促す必要があるということで、その通り魔の特徴と保護者への説明を書いた手紙を配る」

渡されたプリントには通り魔の格好と、顔の特徴がのつていた。顔は正面ではなく、後ろから見た大体の髪型だつた。その通り魔が後ろから襲つてきたので、被害者の生徒は後ろから見た格好しかわからなかつたそうだ。

「同じような事件が先月からも何回か起きている。電車通学の人は近くに行かないから、といつたが、いつぞこでまた通り魔が出るかわからないのでみんな十分に注意すること」

偶然だが、事件の起きた現場は一輝が学校から塾に行く途中にいつも通つている場所だつた。もちろん昨日の朝の時点では一輝にはそんな事知る由もなかつたのだけ、心当たりのある場所があつたので実際に行つて確かめてみたら、そこに通り魔事件があつたことを告げる看板が立つていたのだ。今日塾に来る途中のことだつた。

場所はビルと飲食店の間の、幅が2メートルぐらいしかない長さ50メートルほどの暗い裏道だ。普段の人通りはほとんどなく、もつぱりこの道に面する飲食店「水樹亭」が後で捨てる「みや空き瓶」などを置いておくスペースに使われていたのだけれど、最近になつて市川中学高等学校の生徒が夕方になると頻繁に通るようになった。といつのも、やはり最近 駅から1kmの所に昭栄学院という塾の支部ができる、市川中学高等学校の生徒がそこに通うようになり、彼らがここを近道として使うようになったからだつた。

昨日吉沢たちは同じところを通りて駅に帰つたはずだ。あいつらはいつも塾帰りに近くで遊んでいくのでいつも帰りが遅いし、確かに一輝と最後に別れたときもゲーセンの方向に向かつていた。吉沢たちが事件後の現場を見ていないんだから（SHRの後に聞いてみたら見ていないといつていた）、通り魔が現われたのと襲われた生徒があそこを通つたのは、吉沢たちが帰つた時刻よりもっと遅かつたということになる。おそらくは10時前ごろだ。

「帰ろうぜ青島」

はつとして後ろを振り向くと、岸田が肩にカバンを提げて立つていた。

「どうだつたテストは」「聞いてくれるな」

岸田はあいおいと言つて笑つた。

「引越しとかいろいろあって塾の宿題に手つけてなかつたのが響いた」ここ1ヶ月は本当にいろいろなことがあつたのだ。「お前はどうだつたんだよ?」

「まあまあかな。思つてたより難しかつたからちよつとでこぼつたけど」

岸田がこつこつ反応を見せるとこことは、かなり良くなつたといつ証拠だ。3年間同じ塾にいて身につけた観察眼からすると間違ひなかつた。

「原西のやつ、だいぶへこんでるぜ」

荷物をまとめて立ち上がりうとすると、岸田が言った。西原は教室で入り口のすぐそば、一輝のいるのと反対の場所の机に原西が両腕で顔をうずめて座っていた。

一輝と岸田は西原をなだめながら塾を出た。毎の猛暑はどこにいったのやら、外には肌寒い空気が流れて、おまけに空では低い稻妻の音がゴロゴロと轟いていた。今朝のニュースでは台風が来るのは明日の朝だと言っていたが、どうやらそれは外れたみたいだ。

岸田たちは途中の交差点まで別れた。一輝だけが自転車で、二人はそのまま徒歩で駅まで向かつ。

千葉のロイヤルマンション坂田を出て、一輝と母さんは東京都内のアパートに引っ越した。マンションでの悪戯や、たびたびかかる悪質な電話が絶えずだんだんとエスカレートしてきたので、仕方なしに引っ越したのだ。電話はどれもこれも、横須賀証券とその役員に向けた、怒りと偏見に満ち、高臨みな位置ちから投げかけられた罵声だった。彼らはみな一様に言った。青島真一は社会のクズだと。強欲な経営者だと。そして、彼らは一輝が反論することを決して許さなかつた。

経済的にも問題があつた。一家の大黒柱の収入がなくなつた以上、青島家にはこれ以上ロイヤルマンション坂田のような億ションに住まうだけの余裕はなかつた。4人の祖父母も援助を申し出てきたが、母さんはそれを断つてしまつた。母さん側の家族には実際に一人を養つていくだけの余裕がなく、父さん側の家族とはもともと仲が悪くてずっと疎遠だったので、いまさら援助を受けるようなことはできぬという訳だ。結局、2人は東京に安く住まえるアパートを見つけてもらい、そこに引っ越すこととなつた。

本当に、事件からたつた1ヶ月の間に本当にいろいろなことが起きた。信じられないようなことばかりが。一輝には全てが不思議でならなかつた。どうして父さんはあんな事件を起こしたのか、何故それが自分の父親に起きたのか、そして、1ヶ月でひと人の生活がこうも暗転するものなのかと。けれど何より不思議だったのは、

いま自分が、その変化に慣れてしまつてはいることだった。
雷の音が心なしか近づいてきているような気がする。 — 輝は自転
車をじぐ足に力を込めた。

7月8日

雨が壁を叩きつける音で前田は目を覚ました。風がビルに裂かれて悲鳴を上げていた。

手元の時計はもう9時半を指している。どうやら30分以上寝てしまつたようだ。前田は頭を上げて編集室の中を見回してから、体を起こして背伸びした。

「すごい風ですね」

向かいのデスクの安原だつた。寝不足のせいか、パソコンの画面からずつと離れていないせいなのか、メガネの下から大きなくまがのぞいていた。

「ああ・・・台風か」

天気予報だと台風が来るのは明日の朝だと言つてたけれど、この様子だとまた編集部に缶詰になりそうだつた。今日は汗をかいたらさつさと帰つてシャワーを浴びようと思っていたのに。

上半期の映画特集の企画を1-2時までに提出しなければならないのだが、まるでやる気が出てこなかつた。なんとか気力を出そううと思つて仮眠をとつたが逆に頭が働かなくなつてしまつた。だるさの理由はわかつていた。寝不足や、今やつている仕事への興味の無さ以上に、2ヶ月以上かけて続けていた取材が行きづまつてしまつたことが今でも尾を引いているのだつた。

前田はまず横須証券の役員6人の近辺に情報を集める事からはじめた。一人一人の生い立ちや人間関係、生活面から彼らの人間性を分析し、そこから今回の事件へ関連づけてゆくつもりだつたのだが、そこで第一の関門が前田の前に立ちふさがつた。近年の日本で代表

的な証券会社の役員と言えど、こういった取材の経験が少なく、他の出版社とのつながりが薄い羽間出版に勤める前田には、6人の情報简单に入手する術が無かつたのだ。手探りで横須証券について調べ始めてから、ようやく役員の一人、青島真一の住所を特定するまでには2ヶ月もかかつてしまつた。それがちょうど一昨日のことだ。前田はやつとのことで青島真一の自宅に赴いた。幸い同じ千葉県の、自宅からあまり遠くない場所だったので行くのに時間はかからなかつた。管理人に聞いてみると、彼らは一ヶ月近く前に東京のどこかに引っ越ししたそうだつたが、もともと取材ができると期待していたわけではないので問題は無かつた。むしろ扉の前の写真が堂々と取れて都合が良いくらいだつた。

管理人の話によると、青島真一の住んでいた部屋の扉にはいつもおかしな封筒がいつも貼つてあるそうだつた。宛名に『羽鳥勇介様』と書かれ、中には一文『10日後にここに来い』とだけ書いてある、おそらくは悪質な悪戯の一種だつう。管理人はつい先日にその手紙を知らない男にあげたと言つていた。前田は一通りマンションを写真に收め、そこを後にした。

そしてそれつきりだつた。前にも進まなければ、左右を見渡すこともできない。行き止まりだ。そんな無念の思いが、今でも前田の中でくすぶつっているのだつた。

「よお、例の記事はどうなつてんだ」

富元が書類の束を抱えて横に立つていた。

「昨日言つたる。もう無理っぽいって

「なんだ本当にやめるのか?せつかくここまでがんばつたつてのに、もつたといないじゃんか

「俺だつて続けたいけどな、もつじうにも手が出ないんだよ

思わずため息が出た。前田はいまさらになつて疲れている自分に気がついた。

「まだ諦めるのは早いぜ」

富元はそう言つて口元に笑みを浮かべた。

「なにがあるのか?」

期待で胸が膨らんだ。宮元は抱えていた書類の一一番上の紙を引き抜いて手渡してきた。紙面には6人分の顔写真と住所、それに1人の出身地や卒業した学校の名前が載っていた。

「俺の友達の亀山からちょうど昨日もらったんだ。首都圏出版の編集部で働いていて、前に自分達が参考にした資料なんだけど、お前のこと話をしたら、取材はもう終わってるし羽間出版ならあげちゃつても大丈夫そうだからってくれたんだ。まあ、言っちゃえればうちなんか競争相手じゃないってことだな」

「本当にいいのか？」

「ああ。でもよそに流すようなことはするなよ。亀山に迷惑がかかるし、俺も困る」

「わかつてゐる。ありがとな。亀山さんにもお礼言つといてくれよ」
これでまた取材が続けられるのだ。2ヶ月かけて一人の住所を調べるので精一杯だったのが、ほんの10秒足らずで全員の情報が手に入るなんてまるで夢のようだった。既に手をつけられているという事も全く気にならなかつた。

「それともう一つ別のところで面白いことを聞いた。役員の一人の青島真一^{たちばな}って人はどうやら橋組^{たちばな}の組員と昔からコンタクトがあつたらしい」

「橋組？何でそんな・・・」

橋組といえば一昨年の銃撃事件で話題になつた指定暴力団だ。暴力団と証券会社の社員がつながつていたなんておかしな話だつた。
「確かな情報じゃないしただの噂かもしれないけど、本気で調べるつもりだつたら組に乗り込んでみるよ」

笑いながらそういうて、宮元は「コピー機のもとへ去つていつた。
面白いかもしない。横須証券の専務と橋組組員。それも、複数の役員ではなく青島真一にだけ繋がりがあつたといからには、2人

に何か特別な接点があつたのだ。

前田はもう一度富元からもらつた紙に目を通した。

『青島真一・・・経歴：北芝小学校 吉正寺中学校 早稲田高校
早稲田大学』

将来の暴力団組員に早稲田で知り合つたとは考えにくい。とする
と青島真一が問題の人物と知り合つた可能性が考えられるのは、北
芝小学校か、吉正寺中学校のどちらかだつた。この暴力団員とい
うのが青島真一や残りの役員の手を引いて今回の事件を起こさせたと
考えることもできる。噂とは言えど、調べてみる価値はありそうだ。
そのとき、前田は誰かのデスクの前で人だかりができるのに
気がついた。山口の所だ。6・7人が集まつて、デスクの上の何か
を全員でみつめている。突然、その中の一人がそこから抜けだして、
編集長の加持の所へと駆けていった。何が起こつているのだろう。
前田は立ち上がって山口のデスクにまで向かつた。

台風の突風と雨粒の嵐が激しい音を立てて建物をたたきつけ、体
がびくりと窓のほうを振り向いた。窓の外は滝のよつに落ちてくる
雨でほとんど視界のきかない状態だつた。

山口のデスクで皆が見ていたもの、それはパソコンの画面だつた。
一瞬いかがわしい物でも見ているのだろうかと想像したが、そこか
ら聞こえてくるのは想像とかけ離れた、硬く張り詰め、緊張した男
性リポーターの声だつた。前に立つている奴の背中から覗き込むよ
うにしてみると、リポーターは吹き荒れる風と豪雨の中をマイクを
片手にどこかの建物の前に立つていた。すさまじい風の音とパソコ
ンの音質の悪さが災いして声は少し聞き取りにくかつたが、それで
も何をいつているのかは理解できた。画面の下にテロップが出てい
る。

『横須賀証券役員 殺人事件に關与』

「殺人？」

思わず声を上げてしまった。前田は信じられない思いでまばたき
をし、もう一度テロップを見た。しかしそこに書いてあることは見

間違えでもなんでもなかつた。確かにあの横須証券の役員が殺人に関わつたと書いてある。これはどこの番組だ。でたらめなことを言つてるんじゃないのか。けれど、嵐の中、マイクを握つて中継を伝えるリポーターの声から冗談のような物は感じられなかつた。

「はい。私は今横須証券本社ビルの前に立つています。5月13日、ちょうどこの場所で、横須証券の役員6人は逮捕、連行されました。そしてつい先ほど警視庁出記者会見が行われ、その役員6人が殺人事件に関与していたということがわかつたのです」

画面か切り替わり、記者団のカメラとフラッシュを前に会見文書を読み上げる警察官の姿が映つた。

「本日、横須証券元役員で現在証券取引法違反の罪に問われている小暮、堀口、浅井、橋本、谷屋、青島の6人を殺人容疑で再逮捕しました」

間違いではなかつた。あの6人が。今まさに、俺が調べている6人が殺人を犯していた。では一体、誰を殺したんだ？

再び画面が切り替わつた。司会に女性キャスターがその答えを教えてくれた。

「今回新たに発覚した殺人事件で被害者とされているのは、東京都在住、事件当時38歳の田中正志さんです。田中さんは生前、今回再逮捕された6人が経営していた横須証券に勤務しており、職場間でのいざこざから事件が起こるに至つたものと思われます」

「本当に信じられないような事件ですね」もう一人の男性キャスターが口を開いた。「証券取引法の違反のみならず、自分の会社の社員を殺害するなんて前代未聞の話です」

全くその通りだつた。テレビの前の多くの人が同じことを思ったに違ひなかつた。

番組は2ヶ月前に横須証券が起こした証券取引法違反の事件と、事件直後の日本経済への影響をイメージ映像を使って説明しだした。説明が終わると、キャスターの2人があの時社会全体に走つた衝撃はすごい物でしたね、とか、株主の企業経営に対する不安も増大しました、とか言つて話を引つ張つた。

前田は殺人に関する情報を聞こうとじつと画面を睨んで待つた。自分が取材していた6人だからというのではなく、純粹に、6人がどうして殺人を犯したのか、その動機が知りたかった。彼らが何を望み、何に駆り立てられたのか、その“何か”的正体をこの目で確かめてみたかった。普通の犯罪者にはない、”何か”を。

しかし、キャスター達は事件の詳細については何も語らずに次の

「コースに移った。

「すごいことになつたな」

富元だった。いつの間にか前田の後ろに立つてパソコンの画面を眺めていた。

「やつぱりこの事件を追いかけてて正解だつた」

富元がとがめた。

「いひじう派手さは、お前の晝ひつとしてたのとは違つんじやないか？」

「そういう意味じやない。俺達が思つていた以上に、この事件には奥があるんだ」

不謹慎にも、前田は胸の躍るのを感じていた。企業として起こした犯罪、そして殺人。本来別物であるはずの2つの事件が交わった先に、まさに自分が明かりを当てようとしている先に、誰も見たことのないような真実が眠つていて。そんな気がしてならなかつた。

吹き荒れる雨風が再び壁を叩きつけて轟いた。

7月11日

横須証券の役員6人が殺人容疑で再逮捕されてから3日がたつた。各出版者やテレビ局は皆一様にこの話題を取り上げてはトップページやワイドショーを割いて解説を行った。ただ、解説といつても単に出演者が事件の動機やいきさつについて、それぞれの考えを述べて意見の交換を行うだけという趣旨のものがほとんどで、後は被害者の田中正志という人物の素行や会社での評価を調査したり、犯罪の専門家に話を伺うというのがちらほら見られるくらいで、事件の詳細は世間に人々にほとんど明かされていなかつた。こうした状況について、事件に関心を持つている人たちは少なからず違和感を感じていた。殺人事件が起きてその犯人たちは既に捕まつているというのに、詳しいことは少しも報道されていない。明らかに今まで起きた事件とは何かが違うというところを感じていた。そして、いくらかの人たちはそこに警察の意図が働いていることに気がついた。この事件にはまだ続きがある。だから警察は何もしゃべれないでいるのだと想像した。

その考えは実際当たつていた。しかし、彼らが最終的に事件の真実について『全て』を知るのはそれからしばらくの月日がたつてのことになる。

台風は過ぎ、夏の猛暑が再び姿を現した。前田はちょうど駅のホームから出てきたところだつた。焼きつくよつた日光の明るさに目を細めながら、ビジネスバックを開いて一枚の地図を取り出した。目的の場所はここから20分ほどの場所にある。時間ならば問題な

かつた。わざわざ余裕を持つて30分前につくように家を出たのだ。厄介なのはこの暑さだけだった。こんな日差しの中を1時間近くうろつこうものなら、まず確実に脱水症状にかかってしまう。早めに行つて屋内で待つてはいるが、近くのコンビニで時間をつぶすしかなかつた。

埼玉県中部に位置する市は、見たところとても田舎な場所だつた。都会の様子から比べると駅前の通りは何もないも同然で、人々から見捨てられたように静まり返つてはいる様子に、前田は自分がつまはじきにされているような寂しさを感じた。土曜だからとはいえ駅から出でくる人は全然いないし、四方を見回しても高い建物はほとんど見当たらなかつた。

ここに、青島真一が通つていた吉祥寺中学校がある。前田は通りを一人歩きだした。

資料を受け取つてから、前田は次の日さっそく吉祥寺中学校で青島の担任をしていたという教師にアポイントをとつた。そして、そのうちの一人の笹山という人にOKを出してもらい、今日学校で会つてくれるよう約束を取り交わしたのだった。もつとも青島の担任をしたあとの2人は定年で辞めてしまつていて、笹山が残つていたのはラッキーだった。笹山も既に高齢で、30年近く前のことなどを程度覚えているかという不安はあつたが、そこは本人が覚えてるというのだから信じるしかなかつた。

吉祥寺中学校に着いたときには前田はこれ以上は無理というくらいに汗をかきつづけて熱中症寸前の状態になつてはいた。コンビニで休もうというもくろみは失敗だった。入るうにも、どこを探したつて店の一つも見つからなかつたのだ。

青島真一はこんな田舎の町で暮らし、少年時代をすごしてきたのだ。当時は今よりもつと建物も少なくて、住宅地のあつたところには自然があふれていたかもしれない。そんな環境の中で育つてきた男が東京に出て証券会社に勤めた時に何を思ったのだろうか。

吉祥寺中学校の校舎は想像していたよりもずっと大きく、ボロボロだった。最初はコンクリートの壁についたでも這つているかと思ったが、近づいてよく見てみるとそれはびっしりと張り巡らされたひび割れだった。校庭では野球部が活動をしていた。校舎の中に入つて待つのは人目にさらされるようでいやだつたので、前田は校門の前に木立を見つけてその日陰で時間をつぶすことにした。質問内容を何度も確認しながらじつと時間が経つのを待つて、それからようやく学校に入った。

校舎の中は期待していたほど涼しくなかつた。靴を脱いで上がるうとすると、奥から初老の男が歩み寄つて挨拶をしてきた。どうやらずつとここにで待つてくれていたらしい。時間つぶしなんかしなければよかつた。

「今日はどうもよろしくお願ひします」

「いらっしゃりこそお世話になります」

笹山の声には60台とは思えないような張りがあつた。体格もどちらかといえば大柄なほうで、実際の年齢より10歳は若く見えた。前田は笹山に案内してもらつて、応接間の椅子に腰を下ろした。応接間は、廊下もそうだが掃除が行き届いていて外見よりもずっときれいだつた。

前田は簡単に挨拶を交わしてからすぐさま本題にはいった。

「今日は笹山さんが一度担任になられたことのある、青島真一という人物についてのお話を伺いたいと思います。先日も電話口で説明させてもらいましたが、私は先程起きた横須賀証券株式会社の事件について調べていて、今回の取材もその件に関連するものです。よろしいですか？」

笹山は返事の代わりに楽しそうに笑みを浮かべた。

「こんなことで出版社のインタビューに受けることになるなんて、

夢にも思いませんでしたよ。やっぱり教職っていうのはいろんなことがあっておもしろいですね」

前田はなんと返していいか分からず、笑って「まかすこと」にした。犯罪を犯した自分の生徒たぐいについてインタビューされるのが、果たしておもしろいことの類に入るのだろうか。

前田は始めて青島真一が学生時代どんな性格だったのかと尋ねた。「性格は、そうですね。個性が強いというか、華やかで、クラスの中でも目立つてゐる子のうちの一人でした。世話好きで、友達の間で起きた揉め事の仲裁に買って出ていました。目立ちたがりやな所もあつたんでしょう。今はめつきり見かけなくなりましたが、似たような子は、当時私の受け持つたクラスでは大体クラスに1人か2人ぐらいいたものです。ただ、傷つき易いというか、悪口なんかを言われるなどずっと引きずつてしまつような繊細なところもあつて、別に深刻にというわけじゃないけれども、相談に乗つたことがありました」

「深刻じやないとは、どういう風に相談を受けるんですか?」

「普通に普段話している時にそういうことがポロッと口に出るんですよ。それでちょっと話をするという程度です」

「ずいぶん詳しく覚えてるな」と前田は思った。

前田は、おぼろげな印象でも分かればそれでいいと思つてこのインタビューに臨んだつもりだった。笹山にとって青島真一の担任を受け持つたのは30年近く前のことだ。当然、笹山のほうはある程度青島真一のことを話せると思つたから今回の申し出に応じてくれたのだろうが、それにしてもここまでつきりと1人の生徒のことを覚えているなんて少し不自然じやないだろうか。もしかしたらでまかせを言つているのではという考えが頭に浮かんだ。

成績のこと、部活のこと、家庭の状況（さすがにこれは覚えていないと答えられた）について前田は次々と尋ねてはメモを取った。 笹山の受け答えはとても親切で、わざわざ学校にしまいこんであった記録を手元に用意して、それと合わせて説明してくれた。すると青島真一は成績も良く、部活についてもテニス部でレギュラーをつとめていたということだった。特に勉強のほうは、早稲田に進学したというくらいだったからかなり良くできたらしく。これだけ目立つていたのならば、笹山が30年たつても青島のことを覚えているのはそれほど不思議なことではないのかも知れないとも思えてきた。そこでついに本命の質問をした。

「交友関係のほうはどうでしたか」

他のことを話していくうちにだんだんと記憶が戻つてくるのではないかと思つて、前田は一番重要なこの質問をできるだけ後のほうに持つてくることにした。今回の訪問の目的は、青島真一に関する情報といつよりも、彼とかかわりのあつた人物を特定することにある。友達の中にそれらしき人間がいないうならば、学年の中に素行の悪い生徒はいなかつたかと聞くつもりだった。

しかし、笹山は意外な答えを返してきた。

「青島はいつも、羽鳥という子と一緒にいました」

笹山の声から一瞬暗いものが臭つたような気がした。おかしな言い方だつた。まるでその1人のことが重要すぎて、他の友達はいてもいなくてもどっちでもいいと言つていいかのようだつた。

「友達は、その羽鳥という子だけだったんですね？先ほどの話ですと、当時の青島氏は明るくて交友関係も広いような印象を受けましたが・・・」

「いえ、当然他にも友達はいたと思います」 笹山は訂正した。「けれどなにぶん、私もだいぶ前のことなのでそんなによくは覚えてい

なくて。覚えているのはその羽鳥のことだけです
これはもしゃ当たりかもしれない。

「その羽鳥というのはどんな子だつたんです？」

前田は自然と身を乗り出した。今日わざわざここまでやつてきたのはこの話を聞くためなのだ。どうしても興奮を抑えることができなかつた。

そのとき不意に、篠山が怪訝そうな表情を浮かべて言つた。

「もしかして、あなたもですか」

突然だつたので、前田は何のことを言われているのか考えることができなかつた。篠山が探りを入れるような目線でじつとこちらを見つめていた。あなたも？ 一体何の話をしているんだ？ だが、考えてみても前田にはその言葉の意味するところが分からなかつた。

「私もとは・・・

「いいえ、構わないんです。ちょっと気になつたものですから

前田はそうですかと言つて話を受け流した。何を隠しているのか気にはなつたが、羽鳥という人物に関する情報のほうが重要だし、もしも前田が「あなたも」の前にあたる人間と同じことを考えていると思われて、篠山が何も話してくれなくなつたら元も子もなかつた。

「それで羽鳥とはじうこつた・・・」

「彼は、そうですね」篠山の顔つきが難しそうに歪んだ。「青島とても仲が良くて、勉強もスポーツも青島と同じくらいできる、一言で言えばとても優秀な生徒でした」

優秀な生徒？ 僕が見つけようとしているのは暴力団とのつながりがあつたという人物だ。こいつははずれだ。

前田は「ほかに青島と友達だったことは思い出せませんか」と尋ねようとしたが、それより先に篠山が口を開いて言つた。

「彼のことは今でもはつきり覚えていています」

前田は開きかけた口をつぐんだ。

「あのときは、そりや大した騒ぎでしたよ。誰も羽鳥があんな事件を起こすなんて思つていませんでしたからね」

「何があつたんですか？」

「喧嘩です。確か15人もけが人が出て、私達教師も保護者からのクレームを処理したり警察の相手をしたりで」

喧嘩、とつぶやいた。

「羽鳥がどうしてあんなことをしたか、それは結局分からずじまいでした。彼はその後学校を辞めてしまつて」

「その羽鳥という友達について、もう少し詳しく教えてくれませんか？」

間違いない。羽鳥こそ、青島真一とコンタクトのあつたという暴力団員なのだ。笠山は相手の様子を見て怪しげに眉をひそめたが、前田はそのことには気づかなかつた。

「とにかくいろんなことを満遍なくこなして、問題のない良い生徒でした。青島とは3年間同じクラスだつたらしく、仲が良くて、当時は3クラスしかありませんでしたからクラス替えをしてもある程度一緒にクラスの子がかたまるんです。かなり昔のことだからはつきりとは覚えていませんが、なんというか、独立心の強い子でした。あの喧嘩の原因も一つはそんなところにあつたんだと思います。けど、それ以上のことは良く覚えていません。保護観察が入つてすぐ、彼はどこかに引っ越しましたから」

「それは、喧嘩を起こしたからもうここに入られないという理由ですか？」

「さあ、それはよく分かりません。おとうさんの仕事の都合だつたのかもしれません。転勤と事件があいまつて、だったら引っ越そうとこうことにしたのかもしれませんね。青島のことが記憶に残つて

いたのも、この事件があつた後、何度か青島に事情を聞いたり羽鳥のことについて一人で話しかけたりしたからなんですよ」

「どうりで青島について詳しくしゃべれるわけだ、と納得がいった。2人はそれから30分近く話しこそけた。青島真一のことだけでなく、当時の学校の雰囲気や近所の様子についても教えてもらつたりもしたので、話題はなかなか尽きずメモは6ページ近くが黒く埋まつた。さすがにもうこれ以上聞くことはないだろうと思つたところで前田は話を切り上げると、笹山が校門前まで見送つてくれるということだった。

「今日は貴重な時間を割いてお付き合いでいただき、本当にありがとうございました。これはほんのお礼ですが・・・」

「いりません」といつて笹山は断つたが、前田は半ば無理やり封筒を手渡した。

校舎の外はあいも変わらず強い日差しであふれていて、そんな中でも校庭では野球部員の掛け声が響き渡つていた。

別れ間際、どうせなら聞いておこうと前田は口を開いた。
「つかぬ事を伺いますが、羽鳥のことについて聞いた時に『あなたも』とおっしゃられましたが、あれはどういつ・・・」

「 笹山は思い出すようにああ、ともらした。「いや、実は前にいらっしゃった警察の方も羽鳥のことについて詳しく聞かれていたんですね。あなたも、青島のことより羽鳥のことに関心を持つているように見えて、なにか気になることがあるのかと鎌をかけてみたんですよ」

「 笹山はそう言つて苦笑いした。

「 そうですか」

「 前田は何も言えなくなつた。

先回りされていた。校門を出てから小走りで走り、照り付けてくる日光がじりじりと肌に熱い。

前田も苦笑いを浮かべるしかなかつた。

6

1月5日

冷たい風が吹いていた。真一は肩をすくめて道路のほうへと歩み寄つた。外はまだ夜が明けきらず、人は全く見当たらなくて車があり思い出したように通り過ぎてゆくだけだった。

頭がずきずきと痛むのを我慢して大きく息を吸い込むと、首筋に一気に冷気が忍び込んで思わずぶるりと震えあがつた。田を覚まそうとして出てきたけれど、このままでは風邪を引いてしまう。真一は昨日から一睡もしていなかつた。仕事が手間取つて、ついさつきようやく全ての課題が終わつたところだつた。

正月とはいえ休みを取ることはできない。仕事は山積みで家に帰る時間もなかなかとれず、今日のようになかなか寝ることもたびたびだつた。不意に、今ほど忙しくはなかつた平社員の頃がひどく懐かしく思えてきた。中に入つて温まるうときびすを返したとき、はじめてビルの自動扉の横におかしな紙が貼り付けられているのに気がついた。近くに寄つて見てみると、それは何の変哲もない青い封筒だつた。普通と違うのは、真ん中に一文、ワープロで文字が打たれていることだけだつた。

青島真一様

そこに書いてあるのが自分の名前だというのに気づくまでに一瞬かかつた。広告でも人探しでも悪辣な悪戯でもなくて自分の名前があるのに、真一は驚きよりも先に違和感を感じた。

ポケットから手を出してそれをはがし取つた。裏にはいくつもい

くつも丸められたセロハンテープが貼り付けてあって、取るには手間がかかった。風に吹き飛ばされないためだろうか。そういえばこんなもの昨日は無かつたはずだ。社員の誰かが帰るときに貼り付けていったのだろうか。

もしかしたら同じ名前の別人にあてたものじゃないかとも考えたが、そのときには既に封を破り取った後だった。中には三つ折の上質紙が一枚入っている。真一は開いて中身を見た。

1月5日の午後1時ちょうどに、駅前の喫茶店『ブルボン』に来い。来なれば身内の人間に危害を加える。

書いてあるのはこれだけだった。『家族に危害を加える』・・・脅かそうとするんだつたらもつといい文句があるだろうに。真一は小さく笑つた。それからふとまわりを見回した。真一が昨日最後にここに来たのは夜中の3時頃だ。だとしたら悪戯の主がこの手紙を貼り付けていたのはついさっきのこととで、もしかしたらまだその本人が近くにいるかもしれないと思つたからだ。こんなことのために早朝出勤するなんてよっぽど暇な奴なんだろう。はたまたリストラされた奴が腹いせにしたことか？

しかし、辺りにそれらしき人影は見当たらなかつた。怪しい人間どころか人の気配すらしないのだ。あるのは、ビルに吹きつけて悲鳴を上げている風の音くらいだった。

真一は封筒をポケットに突っ込んで、自動ドアを抜けた。悪戯でも話のネタくらいにはなるかもしない。

だが、建物に入つてエレベーターに乗り込んだ頃には、真一の頭の中は再び仕事のことでいっぱいになつてポケットの中の封筒のことなど忘れてしまつっていた。

結局一度外の空氣を吸いに行つたきりで、真一はまた仕事の山に埋もれて一睡もせずに働くことになった。

横須証券株式会社は今でこそ日本において代表的な証券会社となつたが、ここに至るまでに、真一たち社員には死ぬ氣で働くことが要求してきた。真一が入社した当時は今ほどに大規模な会社ではなくて、上場も第2部までだつた。バブルバブルと騒がれている中でも横須証券はこれといって景気が良くならず苦しい経営を続けていたが、ついにそのバブルが終焉を迎えたときには他社ほどに経営に打撃を受けずにすみ、前社長の横須翔はそれを期に攻勢に出て、一気に横須証券を盛り上げようともくろんだのだった。真一が入社したのもちょうどその時期に当たつた。片つ端から営業を行い、あまり力を注がずにいた宣伝部門に一気に3倍近くの増員を行つて、社員にはそれこそ地獄のような労働が課せられた。真一と同期だった社員の中でも耐え切れずに辞めていく者が少なくなつた。利益が上がりつてゆくにしたがつて全体的な余裕もでき、当時ほど仕事はきつくなくなつたが、それは下のほうの話であつて真一たち上層部やいくつかの部署は相も変わらず身を粉にして働くかなければならなかつた。

部屋の扉がノックされて、失礼します、武山ですという声がした。真一は入るようにと返事をした。せきからずつと来るのを待つていたのだ。

「××物産の報告書を持ってきました」

片手にファイルを抱えて立つてゐる武山の顔には、離れたところにいても見極められるような濃いくまが浮かんでいた。疲労のせいか、どこか足元がふらつてゐるようにも見えた。

「9時半だ」真一はそう言つて掛け時計に目配せをした。「9時までには提出するよつと言つただろう」

「申し訳ありません」

さらに2・3言の注意をうけて謝つてから、武山はファイルを手渡した。武山は時間に厳しい性格でこうい「ミスはなかなかしないのだが、だからといって何か言い訳を言おうともしなかった。社長の小暮は社内会合の場などにおいて、よく言い訳をするなという言葉を口にしていた。言い訳をするくらいなら、自分でその不祥事の原因を摘み取るようにつとめるということであり、実際横須賀証券の中ではそれが鉄則のような物として成立していた。

真一は報告書をざつと眺め必要事項が載つてることを確かめながら、武山に次の仕事の内容が書いてある書類を軽く説明しながら手渡した。

武山が出て行つてからしばらくして、人事部部長の宗谷がリストラ人事の報告書を持つて部屋を訪れ、また少し経つて営業部門の新しい企画を担当する堂本が来てから、真一は5時間近くの間、誰とも会わずにひたすら書類と格闘し続けることになつた。空腹に気づいた時は既に3時を過ぎていた。真一は出前を呼んで届いた親子丢を食べながら、5時から始まる予定の取締役会での報告内容を確かめた。つい何時間か前に武山が持つてきた××物産を含めて、7つの企業の近況報告と今後の対応について話し合つ会議だった。そして、真一は会議が始まる前までに2つの調査資料をまとめて小暮に提出しなければならなかつた。徹夜のかいあつてか何とかそれは終わっていた。

真一は食事を済まし、すぐに小暮のもとに向かつた。

青島です、と言つて部屋に入った。

とたんに照りつける日光が正面から真一の目を突き刺して目を細めた。部屋の間取り、外にあるビルの配置のせいで、社長室は冬の夕方になるといつも夕日が直接差し込むのだった。アンティークな安楽椅子、使われていない2つの木製の机、その上に置かれた装飾用の燭台や陶器が夕暮れの日差しを受けて淡いオレンジに染まつていた。奥の机に、電気をつけることも忘れて手を動かしている小暮

の姿があつた。逆光で顔が良くな見えなかつた。

小暮はひたすら見向きもせずに、ここに置いておいてくれとつぶやくように言った。真一は言つとおりにしてから「そろそろ次の会議が始まりますか」と知らせて扉の前に引き下がつた。小暮が何も答えずに黙々と書類に向かつているので、真一は仕方なしに待つて部屋に両脇に飾られた蜀台や陶器やらの骨董品を眺めていた。これらはみんな小暮が趣味で集めて飾つてある物で、なかにはそれなりの値が張るものもあると聞いていた。最初のうちは、忙しい中でどうやってこれだけの物を集めたのか不思議でならなかつたが、話を聞いてみるとこれらは全て亡くなつた事業家の父親から受け継いだ物らしい。仕事場にこんな物を持ち込むなんて普通では考えられなかつたが、小暮はこれがないと逆に落着かないらしく、真一にはそれがどうも理解できなかつた。

時計はもう4時45分を指している。さすがにそろそろ会議に向かわなければまずいんじやないか、と思つた時に机の上でタイマーが鳴つた。

「じゃあ、行くか

小暮は机の上の書類を調べながら立ち上がつた。やれやれ、だ。マイペースなのもいいが少しばかげりをしてくれないとこつちだつて不安になつてしまつ。

小暮は机の中を覗きながら、突然思い出したように言った。
「ちょっと用意する物があるから先に行つていってくれないか」

「時間は大丈夫ですか？」

小暮は空返事にああ、とつぶやくと机から何かを探そうとしだした。

「分かりました

不承不承、真一は部屋を後にして先に25階の会議室へと向かつた。

疲れていた。一人廊下を歩いていると何かがのしかかったように体が重く感じられ、真二はふとため息をついた。目的の場所があつて歩いているはずなのに、自分がどこを歩いているのかが分からなかつた。一瞬仕事から離れると、たまつていた疲れや憤りが一気に体へ押し寄せてくるということが時々ある。そういうのはたいてい朝電車に乗り込む前だと出社する直前といつことが多いのだけれど、仕事中にも無いというわけではなかつた。

自分が一体何のために働いているのか、分からなくなる。当然理由はあるのだ。家族を養わなければならぬし、金はあるだけあつたほうがいい。それにこの仕事に對して感じているやりがいだつてあつた。それでも、そんなものに価値があるのか、と問いたくなる時があるのだった。

「価値」や「意味」なんて、突き詰めていけばどんな物にも存在しない。特に絶対的な尺度として位置づけられるような物などこの世のどこにもありはしないし、それらはあくまで人間が後付けした物なのだ。そこにあるのは「欲望」だけだ。それが真二の持つている、人生に対する考え方だった。

そもそも物事の価値を探す、意味づけをするという行為こそが、欲望に根ざした人間の行動に過ぎないのだ。だから真二は、人生にはこうこうこういう意味があるのだと人前で恥ずかしげも無く語っている宗教家の連中や、自分はこの世の仕組みを全部理解していると鼻高に言うような人間が大嫌いだつた。この世のあらゆる憎悪を込めて憎んでさえもいた。そして、憎しみを感じずにはいられない自分の心の中の欲望に苦しむのだった。

けれどもそう考えた時に、果たして自分が今の生活を本当に望んでいるのかという問いにかち当たるのだった。自分が働くことの「価値」、それは金に対する欲求、達成感を味わいたいという欲求、家族を養いたいという欲求、そして家族をほっぽり周りの人から非難を浴びたくないという欲求、世間体を守りたいという欲求・・・。数え上げていけばきりが無いが、これらの欲求を満たすことだった。

しかしそれ以上に、休みたいとか、楽をしたいという思いが膨れ上がることがある。一通りの欲望に、板ばさみにあつのだ。どちらかをとればどちらかが苦しみとなつて押し寄せてくる。一つをとることはできない。逃げ道も無い。あることはあるが、それはすなわち死ぬということだった。欲望の波に押されて崖から落ちてしまった時に死はやって來るのであり、真一は自分が崖っぷちに立っていることを自覚していた。

いつの間にか真一は会議室の前に立つていた。中からは誰かの話し声が聞こえていた。部屋に入ると、橋元と谷屋が椅子に座つてなにやら議論を交わしていた。

「宗教なんて言つてみれば信者をどれだけ満足させるか、というだけのことじやないか」

「だが、その宗旨が間違つているとも言い切れないじやないか。どうも、青島君」

浅井が声をかけてきた。橋本もこぢらに気がついて挨拶を寄越してきた。浅井と橋本は二人とも40中じろの真一よりも20歳近く年上で、浅井のほうはこの会社の常務、橋本は副社長をそれぞれ務めており、かつ真一と同じく代表取締役でもあつた。当然この役職に関しても年齢にしてみても真一の大先輩で、立場は近くても日常でのこの二人に対する上下関係ははつきりしていた。

「何の話をしていたんですか?」言いながら席に着いた。

「宗教は善か悪かって話だよ。青島君はどう思う?」

「私にはそんな難しいこと分かりませんよ。それに、宗教といつても、一概に言い悪いって言えることかもどうか……」

「ほら、青島だってこう言つてる」橋本はそう言つてしてやつたりといつ風にニヤリとした。「全部が全部悪いなんて、考え方偏りがあるんじやないか」

「別に悪いとは言つてない。意味がないんだよ」

「それはつまり悪いってのと同じに聞こえるけどな」

「意味がないってのは、教え通りのことをしたつて極楽浄土や天国には行けないってことだよ」

「どうして? 全部の宗教の教義を見てきたつてわけでも実践してみたつてわけでもないのに何を根拠にそんなことが言えるんだ?」

「根拠はあるさ。なぜなら、あらゆる教義は全部“人間”が作つてきた物なんだからな」浅井はそこでこぼすような小さな笑みを漏らした。まるで病人のような影のかかつた笑い方で、真一にはそこから浅井の底の見えないような深い疲労の色が読み取れた。突如、原

因の分からぬ恐怖が背中を走った。

「人間が作つたつて事は、結局その教義の中には必ず作つた人の“望み”が込められている。よく分かるような例を挙げるとすれば、そうだな、例えば『神のもたらす幸福』とか『死後の極楽』とかがあるし、もつと言つてしまえば、この世の成り立ちや生きる意味が知りたいつ、ていうのもそうだな。いや、一番強いのがそれなんだろう。自分がどうして生きてるのか知りたくなるのは誰だつて一度はあるし、往々にして答えが見つからないからな。だから、無理やりにでもそこに意味をつけようとする。彼らには絶対的な根拠なんていらない。一瞬に感じた感動、夢の中に現われた神様、ちょっとした実践とちょっとした成功例、なんだつて『神の啓示』とか『真理を悟る瞬間』に差し替えてしまう。そしてそこに疑問などないんだろう。あつたとしてもまずは忘れようと努めるものだ。だから、所詮それらは人間が自分達の“望み”を満たす物であつて、数学や物理のような真実は持つていないんだ。そして、彼らは自分たちのことを否定するものに恐怖し、怒りを覚え、排除しようとする。自分達の『真理』を守るためだ。その『真理』のおかげで満たされていた自分達の疑問に対する答えや、人生の充実感、未来への安心感を奪われないようにするために彼らは戦うんだ。もつとも、宗教戦争には宗教に対するこだわりの他にもいろいろと原因はあると思うけれど」

「だけど、その考え方には一つ大きな穴があるぞ。もしも、地上に現われた現人神とか真理の啓示とかが、本物だつたらどうなるんだ」

「それは……」浅井は間を置いて息をついてから、今度はさつきよりも大きく笑つた。「論外だろ」

真二も思わず笑つてしまつた。確かにそうだけれど、それを言つたらおしまいだろう。

部屋の扉が開いて堀口と小暮が入つてきた。

「待たせたな」

「いえ」

2人が席に着いた。
「では、始めるか」

思えば3日ぶりの帰宅だった。

真一は駅の階段を外へと下り、ひつそりと静まつた民家の郡を上から眺めながら今さらのように思い出した。

一つ一つの家から漏れ出ている小さな光には都会の夜景とはまた違つた幻想的な面持ちがある。真一は昨夜会社のビルから眺めた外の景色を思い出して、千葉の一角にある、まだ快適とはいえない風景とを見比べながらしみじみと感慨にふけつていた。若くてまだ入社したての頃は、仕事が終わつたという開放感からなのか、その日持つて帰つた疲れが多い日には決まって似たような感慨を覚えたものだつたが、それもいつの頃からあまり感じなくなつた。感動そのものを疲労として受け取るようになつたせいかもしれない。はたまた仕事や出世のことが頭の中を占めるようになつたからだろうか。とにかくそういう感動とは離れて久しかつた。なのに、真一は今日にしている風景の中に、昔感じたのと同じ懐かしさや、涙腺を突いてくるような安堵感を覚えずにはいられなかつた。今まで麻痺していた感情が急に思い出されたかのようだつた。

ここに引っ越してからかれこれ6年がたつた。はじめ来た時は今よりさらに何も無かつた田舎町にも段々と家の数が増えはじめ、大規模なショッピングモールや大型スーパーが立ち並ぶようになり、逆に駅と家の間にあつた昔馴染みの家屋や商店は少しづつなりを潜めていった。真一はあまり近所の散策をしたりはしないけれど、きっと町中で同じような光景が見られているのだろう。日本中のこういう町にしたつて同じなのだ。新しいものが立ち並び、古い建物は次々と消え去つてゆく。人もしかしり、年老いた、人生経験の豊かな人間は次々と亡くなつてゆき、新しい人間で埋め尽くされるようになる。かつてある外国人が「世界で一つの民族だけが生き残るとしたら、それにもつともふさわしいのは日本人だ」と評した「日本

人らしい日本人」など、すっかりいなくなってしまうのだろう。そこには、日本人は細かいところに気が利くとか、勤勉な性格とかいうハンデは存在しなくなるのだ。日本人は諸外国の人間と同じスタート地点、いや、競争社会になじめないという点で数歩分送れた場所からスタートして、戦つていかなければならぬ。かつては湯水のように金が溢れ、いまや世界最貧の地にまで成り下がったマリ王国の辿った道を、日本もまた歩んでいくのだろうか。しかし、それ以上は考えたくなかつた。

真一は一輝の教育に関してはあまり干渉していないので良く分からぬが、たまに早く家に帰つてみると（本当にたまにだけれど）塾に行つていてまだ帰つていないとこどりがあった。高校生とはいえ、夜の11時に外にいるといふのには大いに驚かされた。自分の学生時代にはそんなことは考えられなかつたのだ。結局その日は好子よしこと口論になつてしまい、そこへ一輝が帰つてくるという気まずいことになつた。あなたは子供のことに全然関心がないくせにいちいち変な口出しをするな、とか、今の子供達にとつて何が普通かなんてあなたには分かつていないと言われた時には真一もさすがに傷ついたし、憤慨ふん慨もしたが、後になつて考えてみると自分は確かに一輝のことなんてよくは分かつていないともしかなかつた。そもそも小さい頃から仕事で忙しくて人並みにどこかに連れて行つたり、一緒に遊んだりすることもできなかつたのだ。一輝にしても好子にしても言いたい事はあるかもしれない。けれど、だからといって家族のために毎日苦しみに耐えて働いている真一の立場がこうも軽んじられて、それでも黙つていなければならぬというのはどうしても我慢ならなかつたのだ。もっとも、何をしているから何をする権利があるなんて話をしてもきりがないのは真一にも分かつていた。だからどこかで互いに妥協妥協をしなければならない。しかし、二人にはどこが妥協点妥協点なのが分かつていなかつた。

気づくともう家についていた。財布の鍵でドアを開けて中に入つて靴を脱ぎうとした時、突然居間の扉が飛び出すように開いた。

「きなり飛び出してきた好子を見て、真一は思わず息を呑んで固まってしまった。

「大変なよ、いま電話をもらつたんだけど・・・」

「どうしたんだよ」

好子はどちらかといえど色白なほうで化粧も少し厚く塗るタイプなのだが、今日の前にいる彼女の顔はそういうことではなく本当に白かった。

「弘昌さんとこの美穂ちゃんがまだ家に帰つていなつて。まだ電話つながつてゐるから、出でかけよつだい」

「本当なのか」

弘昌は真一の兄であり、美穂はまだ小学生の長女だった。東京に出てきた真一の代わりに地元の福島に残つて近くの中小企業に勤め、両親と同居していた。東京に引っ越しして好子と結婚した当時は年に五回以上は会いに行つていたのだが、だんだんとそういう機会も少なくなつてゆき、最近は仕事が忙しかつたりして年に2度お盆や正月に会う程度だった。今年は正月に集まらなかつたので、美穂ちゃんのことはしばらく見ていない。内氣で、どちらかといえど人と積極的には話したがらない子だつた。

真一はすぐにリビングへ飛んでいつて電話の脇に置かれていた受話器をつかんだ。

「兄貴か」

「いたのか、真一」

弘昌の声は力なくしおれているよつて聞こえた。今にも崩れ落ちそうになるのを必死にこらえている。

「いま、どうなつてゐる。美穂ちゃんは見つかりそなのか?」

「いや」今度は確かに声が震えていた。「さつきまでずっと近所を探していて、警察にも捜索届けを出したけど何一つ分かつてないん

だ

「それは・・・田撃者とかも見つからないうことか?」

「最後に学校を出たのはいつとかなら知っている人がいたけれど・・・

・「弘昌はここで一度口を詰まらせた。」警察は誘拐や事故の可能性もあるって言っている」

「そうか

なんと言つたらいいのか分からなかつた。自分の娘が行方不明になつた。それもまだ小学生だ。とりあえず勇気づけなければならぬのだと氣づいて、真一はなんとか言葉を探した。

「家出とか、どこか友達の所に行つてるとかはないのか?」

「とりあえず学校の友達の家には一通り電話してみたんだけれど、誰も知らないって言つてた。それに家出なんて・・・俺の知る限りでは最近そんなに叱つたりしたこともないし、京子も家出じやないつて言つてる。それに・・・」

「なに?」

「へんな手紙があつたんだよ」

同時に、受話器からため息が聞こえてきた。その音から伝わつてくる底知れない絶望感だけで真一は胸にすっと冷たい物が流れるのを感じた。手紙?何の?

「封書に、ワープロで一文『約束通り、倉田美穂はさらつてゆく』つて書いてあるんだ。差出人の名前もないし、ちょうど4時頃にポストの中に入つていたのが見つかった物だから、多分悪戯とかそういうことでもない」

虚をつかれて返事をすることができなかつた。一瞬だが、遺書なんじやないかと考えてしまつたのだ。だが誘拐を告げる手紙にしても真一には十分な衝撃だつた。

「『約束通り』って、何か心当たりはないのか

「あるわけがないだろ。京子の知り合いにも、俺の会社の人とかにしてもそんなことは全くない」

けれどもその文書には、まるで美穂ちゃんを誘拐することをあら

かじめ取り決めていたような言葉が書いてある。わけが分からなかつた。前から決められていた計画。そして手紙。

いや、もしかしたらその手紙は誘拐犯が警察の捜査をかく乱するために作った嘘偽りの物なんじやないだろうか。あたかも犯人が美穂ちゃんに家族の知り合いか、恨みを持つた人物のように見せかけて自分は悠々とどこかに隠れているのではないか。

それとも。まさか本当に『約束』があつたのだろうか。犯人と約束を交わしたのは別に弘昌たちと限つたことじやない。

誰かが依頼し、依頼された人間はそれを遂行する。しかしそうすると目的が分からなかつた。だいたい何のために本当に被害者の家に手紙を送るのだろうか。復讐？ あてつけ？ 考えれば考へるほどなにが何なのか分からなかつた。

「心配かけて悪いな。あとは俺達で何とかするから」「大丈夫なのか?なにかあつたらすぐうちに電話してくれよ」

分かった、と一言いつて電話は切れた。

「こんなことが本当にあるんだな」

「真一は呆然となつてつぶやいた。

「無事なのかしら、美穂ちゃん・・・」

答えるべくもなく真一は好子の言葉を無視する形で居間から出て行つた。

自分の部屋に入つて、真一はベットの上に腰掛けた。頭の中は突然の出来事に混乱してまるで宙に浮いているかのようだつた。

全く、現実味というものが感じられない。ぼんやりとスースを調べながらようやく自分の兄の娘がいなくなつたということのイメージが沸いてくる。美穂ちゃんが車に押し込まれる光景、兄貴達が警察と話している姿、そんなものがつぎつきと浮かんでは膨れ上がりつていつた。

美穂ちゃんは誘拐された。それだけは確かなのだろうと真一は思つた。そして、おそらく無事に帰つてくるということはない。たとえ無事に帰つてきたとしても、外見に何の危害も加えられていないかつたとしても、知らない人間に連れ去られるという異常な経験はそれだけで相当なショックを本人の残すことになるだろう。小学生の女の子が背負う思い出にしては、十二分に重いトラウマには違ひなかつた。

なんという不幸だろうか。

けれど、それだつて無事に帰つて来れるに越したことはないのだ。

美穂ちゃんは今、どこで何をしているのだろう。

それ以上考へることが真一にはできなかつた。想像すればするほどに、自分の考へが闇の中に突き進んでいくみたいで怖かつたのだ。

こうなつたらなるようにしかならない。今ここで俺がどうこういふと事態が良い方向に進むなんてことはないんだ。そう自分に言い聞かせた。そして、弾みをつけようとしてベットから腰を上げた、そのときだった。

床に1枚の封筒が落ちているのに気がついた。

青い封筒だった。真一ははじめ足元に落ちているそれを見た時どうしてこんな物が自分の部屋にあるのかと不思議に思い、とっさに、まさか好子が知らないうちに入つて落としていったのだろうかと疑つた。無意識にスーツをいじつていたので、まさにそのポケットからそれが落ちたということに真一は気づいていなかつた。

いぶかしげに拾い上げて表を返した。そして『青島真一様』という言葉を見つけたとたん、脳裏に電撃のように記憶が駆け巡り真一は全てを思い出した。

引っ張り出すかのように封筒の中から手紙を取り出した。三つ折の白い封筒を指先に握る両手の動きがまるで冬の冷氣の中に放り出されたかのようにぎこちないのを見て、えたいの知れない恐怖が全身に這い上がってきた。今朝この封筒を見つけたときと同じだ。まるでデジジャビュじゃないか。

今朝ビルの外に立つていた時の光景が鮮明に浮かび上がり、白紙の中に一文ワープロで書かれた文章が頭に飛び込んできて、手元の手紙と重なつた。

間違いじゃ、ない。確かにそこには真一の恐れていた物があつた。

1月5日の午後1時ちょうどに、駅前の喫茶店『ブルボン』に来い。来なければ身内の人間に危害を加える。

どうして今の今までこの手紙のことを忘れていたんだろう。絶望のふちから突き落とされた気分で、真一はそこから目を離せずにいた。

もはや疑いようがない。ここつは悪戯でも他の「青島真一」にあ

てられた物でもなく、正真正銘本物の脅迫状だつたのだ。

ベットの上に腰がどすんと落ちた。体重と同時に、体内にあつたエネルギー や活力が全て地面にひきつけられそのまま下へ下へ溶け落ちていくような感覚に襲われた。頭の中から血が引いてゆき、めまいがした。一瞬視界が歪んだが、それでも手紙が見えなくなると、いつことはなかつた。

知らせなければ。」の手紙があつたことを、「約束通り」とはどういう意味なのか兄貴たちに知らせなければならない。

真一は立ち上がろうとしたが、その体は意思に反してピクリと止まつた。頭の中で全く思いがけない考えが膨らんで、真一の足をつかんでいた。

もしもこの手紙を持っていたことを知つたら兄貴や京子さんはなんと言つだらう。真一がこの手紙に書かれている指示に従つていたのならば美穂ちゃんは連れ去られたりしなかつたのだ。そもそも、美穂ちゃんは俺のせいでこんな事件に巻き込まれたということになるんじゃないか。そして、実際その通りなのではないか。

歯軋りをせずにいられなかつた。こんなことを知られたら、俺にはもう兄貴たちに合わす顔がない。第一この手紙を渡して何が変わるというのだらう。犯人の指紋を見つけたいなら、兄貴達のところへ届いた手紙を見ればいい話じゃないか。

隠さなければ。

真一がこの手紙を受け取つたことを、誰にも知られてはいけない。手紙はどう処理すればいいだらう。机の中や家のゴミ箱に捨てるの見つかってしまうんじゃないだらうか。やはり捨てるのならば駅のゴミ箱や会社の近くなどどこか遠くのところがいい。

真一は手紙をポーテの内ポケットにしまおうとして、再び思つてしまつた。

この手紙があれば、犯人が誰なのか分かるかも知れないじゃないか。そうしたら美穂ちゃんを助けることができるかも知れない。それをたかだか自分の体面のためだけに隠すなんて、許されるわけがない。

真一はあらためて、自分の考えていたことに愕然とした。
俺は何をしているんだ。

めまいが巻き起しつて部屋の机が、天井が、床がぐるりと円をえがいて歪み、真一は頭を抱えてうなだれた。

どうしたらしい。どうしたらしい。どうしたらしい。

真一は狂つたように目だけを動かして、まるでどこかに自分を救う解決策が隠されているのではないかという風に部屋の中を駆け巡つた。視界のなかの物があちこちに飛び回り、行つたり来たりを繰り返していた。自分の精神がその行為だけで何とかつなぎとめられていて、目を動かすのをやめたらあらゆる恐怖や不安が押し寄せてくるような気がした。

バカラしい。

落ち着くんだ。俺らしくもない。

真一は目をつぶつて、じつと暗闇の中を見つめた。

こついうときこそ、落ち着いて冷静に考えなければならない。今までだつて大変なことはいろいろあつた。そして、どんな時だつて、俺は自分でも信じられないくらいに冷静でいられた。なのに今日に限つてどうしたっていうんだ。同じことじゃないか。冷静になれ。まずは自分を第三者の視点で見ればいい。いつものことだ。

真一はもう一度、自分の手の中にある手紙に目を向けた。そこにはさつきまでの焦燥は消え去り、しっかりと現実を見据えて状況を把握しようとしている自分がいるはずだつた。自分を取り戻すことなんて造作もない。真一は小さい頃から、それこそまだ小学校に入りたての頃からどんなことにも動じない強い心を持っていた。それは同じクラスの友達の中で自分だけが特別な存在であるということを噛みしめるようでいつも真一に底知れない自信を与えてくれた。俺にはその心の強さがある。

あるはずだつた。しかし手紙を握つた手は小刻みに震えていた。

消えたとおもっていた恐怖が一気に押し寄せてきて、真一の体を丸ごと飲み込んだ。

冷静になれ。震える右手を左手でつかんだが、止まることはなかった。手紙を離して両手で頭をつかんだが、今度はじかに腕の震えが伝わってきた。

真一は立ち上がった。どうして立ったのか分からぬほど無意識の行動だった。この手紙を持って兄貴達に電話で話をするためだろうか。それとも、隠しとおすことを決心したのだろうか。しかし、真一にはリビングに足を運ぶことも、ポケットに封筒をしまいこむこともできなかつた。

何かをしなければいけないのだ。どちらかを選ばなければならぬい。

真一は手紙のことを話したらどうなるのかを想像した。

誰かに恨みを買つていたんじゃないかとまくし立てる兄貴に、そんな覚えはないと説得しようとする。手紙を警察に預けて事情聴取を受けることになり、警察署へと向かつ道中携帯に幾度となく小暮から戻つて来いというメールが届いてくる。こんな時に休まれたら困る。お前は今うちの会社ががどれだけ忙しいか分かっているだろう。身に覚えがないんだつたらわざわざ行く必要なんてないんだ。早く戻つて来い。・・・戻れるものか。血眼になつて娘を探す両親の目の前からびりやつて逃げ出せといふんだ。そして、美穂ちゃんは見つからない。いや、見つかるかもしれないが、少なくともそこにはもう今までの美穂ちゃんはいない。外に出ることにおびえ、人と話さなくなり、家に引きこもるようになるかもしない。最悪、殺されていることだつて考えられる。そして、兄貴達がその怒りや憤り悲しみ恨みを向けるのは真一しかいない。本当な何か知つていなんじやないのか。じゃなけりや、なんで美穂がこんな目にあわな

くちゃ いけなかつたんだ。教えてくれよ、真一。なあ。教える。

俺にはできない。できるはずがない。このまま手紙を隠して誰にも話さずにいられるのならどんなにいいだろ？

美穂ちゃん、答えてくれ。俺がこの手紙を警察に持つていて、何が変わるんだ？君が救われるか？それともこの手紙を使えば犯人は捕まるのか？本当にそつなのか？

いや。捕まりはしない。何も変わらないじゃないか。だったら、どうせ意味がないつていうなら、この手紙を兄貴達に渡さないことの何がいけないんだ。

手紙をポケットに入れ、真一はベットに座り込んだ。

どこからか救急車のサイレンの音が聞こえてきた。そんなに遠くでもなく、だんだんと小さくなつていくサイレンは、近所から発車したものなのだと分かった。電話をしていた時にやつて来ていたから気づかなかつたのかもしれない。急病人がいることを告げる警報の音は、真一にも最後の警告を行つていても聞こえた。

真一はサイレンの聞こえなくなるのを待つた。ポケットに加わつたわずかな重みを感じながら、両手に顔をうずめてただひたすら待ちつづけていた。

昨日、あの後どうやって寝たのか真一は思い出すことができなかつた。気づいたらベットの中で横になつていて、目覚ましをかけるのを忘れていて好子に時間だと書いて起こされ、急いで朝食をかぶり、家を出て、3番線の電車に飛び込んでいた。1分1秒が勝負となる職場について、遅刻など普段ならありえない話だつた。そうして、あせりと苛立ちに挟まれて満員電車の中で苦闘しているうちは良かつた。電車から降り、蒸しかえる熱氣にあふれた人の海から解放され、同時にすべてのことを鮮明に思い出した真一は、内ポケットの中に入っているはずの手紙を思い出して、頭の真に冷風を吹きかけられたような感覚に襲われ、ホームを流れる人ごみの中で一瞬立ち止まりそうになつてしまつた。

忘れる以外に、手はない。

乗り換えた電車の中で真一は自ら結論を出し、その結論を自分に言い聞かせていた。いまさらよくよ後悔してみたつてただ単に苦しみを引きずつっていくだけだ。手紙を持つていつたつて美穂ちゃんが戻つてくるわけでもないし、兄貴達は娘がひどい目にあつたことを知つても決して喜ぶわけじやない、むしろ希望が断ち切られているという事実を突きつけられて落胆するだけだ。捨ててしまつに越したことはないのは分かつてゐる。分かつてゐのなら迷う必要なんてない。駅でも会社でも路上でもいい。せつたとこの手紙を、真一の近くの人間に悟られないような場所に捨ててしまふんだ。

けれど、さつさと処分しようとしてあせつてゐる意思に反して手がポケットの中の手紙へと伸びていかないのは、ぎゅうぎゅう詰めの社内で体を動かせないためだけではなかつた。

車窓から、すっかり青く晴れ渡つた空が覗いていた。林立するビルの頭越しを雄大に広がつていく空の景色は、この青い壯観な眺めがはるか遠くの場所にまでつながつてゐることを教えてくれてい

た。そして同時に、どこかで監禁されているか、それか、既に命を落としている美穂ちゃんの頭上にも、同じように空が広がっているということを真一に見せつけていた。

真一はつり革をつかんでいた手を握り締めた。この手紙を送りつけてきたのが誰か、それさえ教えてくれるんだつたらどんなことだつてしてやろう。そいつを警察に突き出しさえすれば、全てが解決するのだ。

行くしかないのかもしれない、と真一は口中につぶやいた。相手は真一と合おうと要求している。なら、手紙に記載されている待ち合わせ場所、『ブルボン』に行つてこちらに相手と交渉をする意図を示しさえすれば、もしかしたらもう一度コンタクトを取つてくるかもしれない。相手が何故ここまでして真一を呼び出そうとしているのか、それだけでも分かれば。

どうして俺はこんなことに巻き込まれているんだろう。こまさらのように、真一は思った。

電車のアナウンスから会社の最寄り駅に着いたという声が流れた。途中何度も人とぶつかりそうになりながら、足音と電子音が飛び交う駅の中を真一は呆然と歩いていた。昨日までは騒がしいだけ、煩わしいというだけだったはずの場所なのに、今日はそこに自分だけがのけ者にされたような疎外感がある。改札を抜け、『ブルボン』のある角に目を向けながらぼんやりとそんなことを思った。

カバンの中で携帯電話が鳴り出したのはちょうどビールのときだった。拍子抜けのような、間ができたおかげで救われたようなタイミングだった。画面には番号と名前が出ている。小暮社長だ。真一は通りの脇について通話ボタンを押した。

「青島、今どこにいる」

間違いなく、語調に怒りが込められている。真一は力の抜けた声で、駅の前です、とだけ答えた。会社に遅刻し、さらには小暮の雷を食らおうとしているところなのにもかかわらず、何でこんなに気のない返事が返せるんだ?、と自分でも不思議だった。

「20分の遅刻だぞ。もう会議が始まる。分かつてるのか!..」

「すいません。今すぐ向かいます」

「ほんとに分かつてるのか?急げよ、もうこれ以上予定の延長はできないんだ。あと10分以内に来なれば今日の会議は中止になるぞ」

切れた電話をカバンにしまって、真一は『ブルボン』のあるほうを見た。駅前の通りはいつもどおりたくさんの人であふれていて、次々と行きかう人々の影が真一の視界を奪つた。あの人ごみを押しのけて、進まなければならない。真一にはそれがひどく億劫に思えた。できることなら帰つてしまいたかった。家に帰れないなら、どこか遠くの場所に行つてしまいたい。そうすれば全てが嘘だつたことになるんじゃないか。

カバンのチャックを締め切り、真一は向うの角へと向けて、1歩ずつ歩き出した。横から追い抜いてくる人や、ぼうっとしているせいで、2・3人にぶつかりそうになりながら、おぼつかない足取りで進んだ。目指す喫茶店の輪郭が、5階建てビルの陰から少しずつ覗いてくる。

そのとき、またもや携帯が鳴った。真一は足を止めて、さつきし

まつたばかりの携帯電話を取り出した。本当に『ブルボン』に向かう覚悟ができているなら電話に出なければいいのにな、とを思いながらも、点滅しているボタンに指を乗せた。

「竹田です。青島さん、今どこにいるんですか？」

真一がよく一緒に飲みに行く部下だった。押し殺したような声で話している。おおかた、大会議室の中について、大きな声を出すのをはばかっているのだろう。横須証券本社ビル6階にある大会議室は最大で300人を収容することができる階段作りになつていて。今朝は、本当なら今頃真一が壇上に立つてプレゼンテーションをしているはずの場所だった。会社の経営方針や、経済論について述べるプレゼンテーションで、もちろん小暮や橋本副社長を含めて重役も多く出席している。主役となる当の本人が欠場している会議室の中は、今頃険悪なムードと焦りとで満ち満ちているはずで、竹田が声をひそめたくなるのもよく分かつた。

「青島さん。ビルにいるんですか？」

返事がないのに驚いて、竹田の声があわてだした。

「駅の近くにいるんだ」

「なんだ、だつたら急がないこと。社長達も怒りますよ」

「ああ、今から向かう」

「さすがにあと10分もしたら社長達も待つていてくれるかどつか・

・・・

「ちよひじわいをむんなじ」とを社長に電話で言われた

「なんだか」急いでいないように聞こえますよ、と言おうとしているのが分かる。「急いだほうがいいと思しますよ。走ればきっと間に合いますから」

じゃあ、時間がないからと直つて電話をきのうじた時だった。

「あ、それと、宗谷さんが変な手紙を預かってたみたいですよ」通話を終える直前についでのように言われたことだつたので、もう少しで聞き流しそうになつた。瞬間、どうして自分がこんなことをしていなければならぬのかを思い出した。会社のビルの前に朝早くから貼つてあつた手紙、脅迫の文章が書かれていた手紙、そして実行された犯行予告。あの手紙のせいだ。電話が切られるという危ういところで、真一はどんな手紙だ?と叫んでいた。

「いや、別にどうつてことはないんですけど……会社の入り口のところに青島さんの手紙が貼り付けてあつたんですよ。ほら、青島さんつて朝はすつじくは早くから会社に来るじゃないですか。たぶんそれを見越してあんなところに貼つてあつたんだと思いますよ。ただ、差出人の名前がないし、貼つてあつた場所も場所ですから、とにかく怪しいし、青島さんがなかなか来ないつてんで宗谷さんが預かつたんだそうです」

「もしかして、封筒とかに入つてる?」

「はい、封筒です」

「色は？」

「へ」

「封筒の色は何色だった？」

「ああ・・・たぶん青だったと思いますけど・・・どうしたんですか？」

雷に打たれたかのよつて、固まってしまった。実際、真一は雷に打たれたかのような衝撃を感じた。田の前の景色が意識の中からはじき出され、視界が全てホワイトアウトしていくかのようだった。さっきまで見えていたはずの『ブルボン』の角も、そこにあつた恐怖や圧迫感とともに嘘みたいに視界から消えていた。

「分かった。じゃあ、本当に急ぐから」

竹田は『本当に』の意味をどうとつただろつか、と思いながら、真一は電話を切つて走り出していた。もし変に勘ぐりでもされて手紙の中身を意確認でもされたらと思いながらも、真一はとにかく走つた。

交差点を一つ越え、ビルとビルの間の裏道を抜けると、横須賀証券株式会社のビルはすぐそこだった。

1月6日

一輝はその日久しぶりに学校に出かけていた。正月休みは8日まであるし、特に登校日とか部活とかがあるわけでもなかつたが、お気に入りの服を着て、大きなボストンバッグを無理やりがごに押し込み、近所の学校まで自転車を走らせていた。学校といつても小学校だ。

母さんは久しぶりに小学校の友達の家に泊まりに行くといつてあり、嘘を信じさせるために、わざわざ田の前でその友達と電話で話をしたり、いろいろと荷物を用意してもらつたりもした。

だが、今日はこの重い荷物も、本当だつたらほんと必要ないのだつた。泊まつてきたと見せかけるために公衆トイレがどこかで服を着替え、中の荷物を多少いじくり、いつも持ち歩いている財布の中のテレホンカードで家に電話をかけたりする必要はあるかもしれないが、それだけだ。もつと大事なものはほかにあつた。

口笛を吹きながら、一輝は上機嫌だつた。外はまだ寒いが、頬を切る冷たい風がそれだけに心地よかつた。まるでこれからしようとしていることを冷たい北風までもが黒い贊美をしているようで、自尊心をくすぐられる思いだつた。

4時を告げる時報が鳴り響いた。冬の日の入りは早い。辺りは既に暗くなりだしていた。とりあえず、時間をつぶす場所を見つける必要があつた。勿論母さんに見られるようなことはあつてはならぬし、知つている人にも見つからないような場所で、且つ寒さをしおげて居心地もある程度よくなければならない。一応、めぼしい公園が学校から2キロほどいったところ見つけてにあつた。そこに行く前に、今日一緒に『仕事』をする仲間と落ち合つ約束になつてゐる。

中高一貫の私立に通っている一輝は違うが、彼らのほうは今年、中学校の卒業式を迎えるはずだ。かれこれ半年は会っていないので、もしかしたら様相がすっかり変わっているかも知れなかつた。派手な格好はできるだけ避けたほうがいいというのがグループ内の決めごとだつたけれども、周りの空氣に流されてそれを忘れている奴もいるかもしれない。1人がルールを破れば他の全員も分かつものではない。それに、人は予期せずに変わつてしまつものだ。こういうことをしている連中ならば、なおさらだつた。陰でくすぶついた欲望がいつ表に向けて燃え上がるかなど分かつてものじやない。一輝自身についても同じことが言えた。いつまでもこのようなことを続けているわけにもいかない。

逆行を受けて遠くに見える小学校の角を視界に入れながら、そろそろ潮時か、とつぶやいた。そのときはメンバーのみんなにも説得する必要があるだろう。はたして、これだけいろいろなことをしてきた後で、みんなはすんなりと解散を聞き入れてくれるだろうか。そのときになつたら、こちらに同調する人を探す必要もあるだろうな、と思つた。不安だつたが、やるしかないのだ。

角を曲がつて、一輝は自転車を小学校の脇に寄せた。校門から50メートルほど離れたところにあるコンビニの近くには、既にメンバーが集まつていた。

格好はぱつと見たところ変わっていなかつた。自転車を脇に置いて、5人で話をしていた。とりあえずはひと安心だ。

「青島、遅かつたな」

「家を出てく時に準備とかでいろいろ時間とつちやつてた」「なんにしても、これで全員集まつたな」大西が笑みを浮かべて言った。

「ああ」

「全員で集まつたのは久しぶりだな」

「最後に会つたのはちょうど半年ぐらい前じゃないか」

「そんなになるのか。やつときたつて感じだよ」

大西の表情に満足感がこぼれ出た。メンバーの中で一人だけ肥満体質の大西は、体格が良く、一見するとしても喧嘩が強そうに見える。

きつと、グループの解散を申し出したら、こいつは一番最初に反対するだろ？ 用心する必要があるな、と一輝は自分の肝に命じた。

「悪いな。いろいろと都合が合わなくて」

「いいや、俺達も受検やらで忙しかつたし。いいよな。青島と三木は、受検なんてなくて」

三木は一輝と同じく私立の一貫校に通つている。

「その分小学生の頃にじいがれたんだよ」三木がやや自嘲氣味に答えた。

「まあいや。とりあえず青島の言つてた公園に行こいぜ」

「そうだなと感じて全員が自転車に乗り込んだ。一輝も自転車に乗つて、みんなを先導するために前にこぎだした。

6人は暗くなつてくる町の中を大町公園へと向けて走り出した。まだ中学生とは言えど、できるだけ見られないために人通りの多い場所は可能な限り避けて行くが、それでも全く誰にも見られずにい

るといつのは不可能だつた。中には、こんな時間に部活や学校の帰りでもなく、どうして私服の子供たちが固まって自転車に乗つているのだろうと疑問の目を向ける人たちもいた。

もつとも、彼らにもこれから一輝たちがなにをしようとしているのかは分からぬに違ひなかつた。遠くに遊びに行つていたと思うか、今の子達は遅くまで遊んでいるものなのだろうかと思うくらいだろう。でなければ、誰かの家に止まりに行くとか、集団家出の途中だとか想像するのが関の山だ。

まさか、これから小学校に忍び込んで盗みを働くことを計画しているなど、思いもしまい。

20分ほどで大町公園に到着した。辺りはすっかり暗くなつている。明かりは、街灯の光以外は完全に何もなかつた。

首筋と顔面を吹き抜けてゆく風の冷たさもひどいものだつた。6人は厚着をしていたが、それでも冬の夜の屋外を6時間近く耐え忍ぶのにはつらいものがあつた。

たとえどんなに寒くても、ゲームセンターやどこかの店の中などで暖まつて人の目にあたるようなところには行かない。計画はあくまで秘密裏で、綿密でなければならぬといつのが、グループの約束事の一つだつた。それはこのグループの活動の目的が楽しみとは別に、純粹に犯罪を犯し、かつ捕まらないことにあるといつところにあるといつところからきていた。

「本当にここで見つからない場所なんてあるのか」
三上は首を縮めて一輝の後を追いながらたずねた。

「だいじょうぶ。ちゃんと調べてあるから」

「にしても寒いな」

「お互い様さ。いやなら抜けてもいいんだぜ」

「冗談」大西が無理に引きついた声で笑い飛ばす。寒さでうつくろれつが回っていないようだが、それでも、一度中断をすすめた一輝に対する露骨な敵意が込められているのは分かつた。
やつぱりこいつは解散に反対してくるだらうな、と心中で確認する。

他の4人は一輝と大西の言葉に對して何も言わずに、黙っていた。
解散に賛成か、反対か、それとも何も考えていなかどうにもはつきりしないが、それでも多少解散について思うところがあるとうのを、この沈黙が物語っているのかもしれない。

「ここまで来ちましたんだから、いまさら中止つてのもめんどうさいしな」竹田があっけらかんとして靴を鳴らした。「走つていこうぜ、さつさと行つちゃつたほうがあつたまるだろ」

竹田はそういうながら真一の前に出てきて、卑くしようぜ、とかかした。

考えすぎか。と思い直した。

解散がどうとか潮時だとか思つてるのはよせん一輝ぐらいのかもしれない。俺と違つて、みんなにはまだ余裕があるのだ。そういえばここ一年近く、一輝はグループに収集をかけようとしたことがなかつた。疲れているのかもな、と思つた。俺はだんだん飽きはじめている。だから解散なんてことが頭に浮かんだんだ。

そうだな、と一輝は目的の公園中心部に向けて走り出した。

一輝が隠れ場所にちょうどどいいといふことで探していた場所は、

中央の大きな噴水のあるところから50メートルほど行った茂みの中だった。芝生の上に点々と規則正しく並べられた茂みは、皆どれもドーナツ状の形をしていて中に空洞があり、がんばれば人が10人くらいは座つて入ることができた。大町公園は比較的最近作られた公園で整備も抜かりない。一輝が最後に確認のためここに来たのは1ヶ月くらい前の話だったが、案の定、枝が生い茂つて茂みの中に空間がなくなっているということはなかつた。

6人はすぐには茂みに近寄らず、一輝だけが、に入ることに決めた茂みの一つへと近づいていった。

あつまつて動いて怪しまれたりしないためだ。公園の中を歩くのはともかく、少年が6人もかたまつて芝生の上を歩いていたら、さすがに見ている人も気になるだろうということだった。

子供っぽいことには違いない。もし自分が第三者の視点から見ていたとすれば、この年になつてまだテレビドラマの真似事みたいなことをして、と指をさして笑つただろう。弁解のしようもなかつた。やめたいと思うのにはこういう理由も絡んでいた。

今日はいい加減に変に神経質な行動を取るのは止めにするよう提案するかと頭の隅で考えて、辺りに人がいなか注意を払いながら、一輝は茂みの中にもぐりこんだ。

荷物を置き、少ししてから首を突き出して外の様子を見た。5人は既にばらばらに分かれていて、どこにいるのかも分からなかつた。辺りに人影はない。

首を引っ込めてしばらくすると、30秒くらいの間隔をあけて、竹田たちが次々と茂みの中にもぐりこんできた。

「なあ、そろそろこんなあほらしい下準備はやめようぜ」まさにこれから自分が言おうとしていたことを唐沢が口にしてきたので、真一は逆に驚いてしまった。

「それ、俺も思つてた。いい加減小学生じゃないんだからこんなことする必要もないよな」一輝が心の中で考へてたのと似かよつたセリフを大西が口にする。

「なんだ、そんだったら俺もおんなじこと考へてたんだよ。もつと早く言つてくれれば……こんなしちめんどくさい下見などしなくてすんだのに。「もしかして皆もそつか？」

3人がまあな、というふうに苦笑いする。

「確かに、やんないですむんなやんないほうがいいと思うけどさ、ほかに行く場所がないじゃんか。だからしづしづって感じでさ」

村上の言つとおりだつた。犯行を予定しているのは夜中の3時頃だ。それまでのあいだ町に出ようものなら、すぐに補導されて、計画の履行どころか親に嘘をついていたことまで白昼にさらすことになるのがおちだ。補導されないにしても現場の近くにうろついているというだけで十分危険だ。中学生が真夜中、それも集団で6人も集まつて外を歩いているとなれば通行人たちの注目を集めずにはいられまい。仮にそのまま深夜になるまで待つて犯行を行つたとしても、怪しい6人組の少年がうろついていたと証言されれば、犯行時刻に姿を見られていなくても警察にかぎつけられ、最悪捕まつてしまふかもしれない。

危険は冒すけれど、絶対危険な日には遭つてはならない。それもこのグループの一つのルールだつた。

「大西はどつちがいいと思う。いまのままこんな遠回りな準備をするのか、それとももつと簡単な、でも危ない橋を渡るか」村上が尋ねた。

村上は大西とそんなに仲がいいわけじゃない。それなのに、聞いてきた一輝ではなくて大西に聞き返したところに一輝は違和感を感じた。

「俺は」大西は答えに詰まつて考える素振りを見せた。「ちゃんと目的だ果たせるんだつたらどつちでもいいぜ。なんだつたら屋内かどこか暖かいとこで見つからないような隠れ家を、また探せばいいんだ」

「そうか」村上の返事はそつけなかつた。

結局6人で相談しあつた結果、今日だけは予定通りここで時間をつぶすことになり、次回からまた同じような準備をするかどうかは別の機会に話し合つことに決つた。

風が吹き抜ける真冬の夜は信じられないくらい寒かつた。ボストンバッグから厚着やジャンバーを出して何枚も着込んだが、風はそのわずかながらの抵抗をあざ笑うかのように体を這い回り、温度を奪つて流れ去つていつた。

強い光をつけると見つかつてしまつので、本を読んだり地図を見て計画の確認をしたりはできない。計画内容を口頭で確認し、後はライトのついたゲームや携帯電話をいじくるか、仮眠を取つたりするしかない。ゲームなどはたいてい2時間ほどで飽きてしまうし、本番前に頭が固まつてしまつたりするとまずいので、皆ほどほどにして横になるか、小声で互いにはなしはじめる。

話題にもつまり、興奮で眠る氣にもなれなかつた一輝は、一人このグループが始まつた頃のことを回想しだした。

最初は、ほんのちょっとした不満を互いにぶつけ合つとこつ程度の間柄だった。

6人が出会つたのはインターネットの掲示板上だった。中学入学から8ヶ月、ちょうど学校生活にもなじんで、なんとなく刺激が足りないようと思えてくる時期だ。

その頃から一輝はネットにもちょくちょくと顔を出すようになり、当然のように、自分の学校のサイトへと行き着いた。サイトといつても、学校の行事や募集人数、進学実績などが何の面白みもなく並べられている公式ホームページではなくて、陰に隠れた陰気な欲望の立ち込める裏サイトのほうだった。

中学一年にして、あの殺伐として、秩序の吹つ飛んだ空間が自分の学校の人間が作ったものと想像するのはそれなりに衝撃だった。一輝はそこに書き込んだりはまつたりはしなかつたけれど、それなりに掲示板への興味をそられた。

自分の思つてることを、誰かればばかることなく打ち明ける事が許された場。それがインターネットなのだと思った。

だからできるだけアクセス数の高く、なおかつある程度ルールの守られている掲示板を探して、書き込みを始めた。

生きることに何の意味があるのか分からなくなってきた。毎日毎日やらなければいけないことから逃げられず、将来が不安でたまらない。この世の中に果たして苦しみから逃れる方法なんてあるのか。答えは見つからない。毎日毎日、あつという間に過ぎていつてしまふ。宗教は皆「テラメだ。どうしたらしいのか分からない。

はじめのうちは、1行か2行くらい、ほんの短い文章を独り言のように打つていた。

そうしてしばらく待つてゐるうちに、彼らはやつてきた。いや、正確に言えば、最初にコンタクトをよこしてきたのは竹田一人だつ

た。まさか返事がくるなどと期待していなかつたのでパソコンを開いて、昨日自分がコメントを送ったはずの場所に竹田のコメントが返されているのを見たときは、それが自分に対する送られた物とは信じられなかつた。

竹田は一輝と同じようなことで迷つてているという旨の返事を返してきた。自分と同じようなことで迷つている人がいることを知つて、一輝は救われたような安心感を得た。

もちろん、そのとき竹田はハンドルネームをつかつていたので、本名は分からなかつた。誰かを知つたのはそれから1ヶ月後のことだつた。

掲示板を通じた「ミニユニークーション」の次は、個人的な交流もするよになつた。竹田は一輝たちと似た疑問を抱える人たちの集まるサイトなどをいくつか知つており、そのうちのいくつかを実際に紹介してくれたりもした。パソコンを頻繁に使うわけではなかつたが、しばしば訪れ、何度か投稿したりもした。

同じ町の人間がいるのに気がついたのはそれからすぐだつた。つまり青島一輝、竹田耕太、大西遼平、村上龍、三上卓、谷雅夫の6人だ。実際は他にもいたかもしれないが、ともかくこの6人は互いにコントクトを取り始め、2年前の3月には実際に会つてもみた。あのとき会わなければ、今、こんなことをしてなかつただろう。自分の存在価値が分からぬんなら、俺達の存在を世に示して、確かめればいいんだ。

そう言い出したのが誰だつたかは、もう覚えてない。誰が言い出したかはともかく、6人はその意見に賛同したのだ。

手始めはインターネット上で、そして、現実世界へと移行していつた。

やるなら犯罪しかない。

世の中の人間が勝手に作った「秩序」という名の縛りを犯す。それこそ真に世の中の人に対してもん達の存在を示すことができる方法じゃないか。そこから人の存在意義も見えてくるんじやないか。

今思えば、ただの屁理屈だ。そうやって無理やりな理論付けをして、俺達は犯罪を犯すという行為の魅力に惹かれていた。

多少の期待はあったかもしれない。犯罪を犯すことでの今まで見えてなかつたものが見えるようになるんじやないか、毎日のけだるいマンネリから抜け出せるんじやないか、という期待が。

手始めは、学校での窃盗だつた。

学校というのはあきれるほどに警戒心の欠如した所だ、というのが俺達の持論だつた。持論といつても、本当にその通りでだつたし、実際のところ俺達は論理を実践に移してうまくやっていくこともできていた。

さすがにああも窃盗が重なると、学校も手を打つたり、生徒のほうも多少貴重品などに對して氣をつけるようになつてきたりが、痛い目にあわないうちにはひどいものだつた。盗む側の人間が被害者を「ひどい」というのもどうかと思うけれど、そうなのだからしかたない。扉の鍵なんて平氣で開けていくし、誰もいない教室にいくつもカバンが残されたままという場面など、図らずしても簡単に見つけられてしまう。

実行は、こちらが拍子抜けするほど楽だつた。一輝や三上は残りの4人と別の学校なので無理だつたけれど、大西たちは実行犯と見張り役、受け取り役など分けていろいろやつていたらしい。

かくして起こつた学校内の窃盗団の跋扈も、2ヶ月ほどすると下火におさまつた。誰にも見つからず、盗つた金額の総計は15万円程度。金は全て公園で寝泊りしているホームレスの寝床においていつた。べつに金欲しさにやつたことではない。

学校での窃盗に見切りをつけると、今度は普通の店や家に手をつけようということになつた。まだ早すぎる、失敗したら今度こそただでは済まないし、もつと安全なところからいつたほうがいいのではないかという意見もあつたけれど、避けられた。逃げ出すようでいやだつたのだ。それに、学校でのことがあまりにもうまくいつて

いたので強気になっていたところもあった。

もうこれ以上は思い出す必要もあるまい。さまざま本を使って犯行に適する場所や時間、タイミング、注意点や技術を身につけ、さらにはいくつもの経験を通して、俺達は今日にまでたどり着いた。最初に感じていたスリルや緊張も、今日に至ってはかなり薄れてしまった。

一般的に犯罪者が捕まるのは安心感が生まれて警戒感が低下しへじめる時だというから、気をつけなければならぬのは分かっていけど、こればかりは、どうにもならない。

だからこそ、そろそろ潮時なのだ。大きなへまをしてかす前に、手を引かなければ。

「青島」

突然声をかけられて、軽く心臓が飛び上がった。寝そべる一輝を見下ろしていたのは竹田だった。

「なあ、トイレ行かねえか」

「いいけど、外出でも大丈夫か？」

「こんな寒い日に真夜中の公園に出てる人なんていないよ」と言つて苦笑いを浮かべる。見られるわけないつて。

つーんと唸りながら、一輝は横になつたり座つたりしてゐる4人の様子を盗み見た。特に、何か反応を遺していくことはない。

「まあいいか」と言つて立ち上がつた。ちょっと動いて体を温めるのもいい。

一輝と竹田は公園の奥にあるトイレへと走つていった。風が冷たく吹き付ける。もちろん人影など見当たらなかつた。

「なあ、青島」

用を済まして、トイレからでてきた時だつた。竹田が神妙な顔でこちらを見ていた。

「もう止めないか、こんなこと
「いまさらなんだよ」

突然のことに、思わず反論してしまった。

「正直俺はさ、こんなことがいつまでもうまくいくなんて思えない。
いつか失敗する時が来ると思うんだ」

竹田が真剣な目つきでにらみつける。

「今まで黙つてたけど、実は大西とお前以外の3人には話をとおしてあるんだ。みんな止めることに賛成してる。俺達は今日限りでこの集まりから抜ける」

竹田は決然と言い切った。

「それって・・・」

「そう。解散だよ」竹田の言葉に迷いはなかった。「もう2ヶ月くらい前から決まってる。今回俺がみんなを集めたのもそのためだ」「お前が集めた?何言ってんだ。今回の計画を提案したのは・・・」

「大西だよ。でも違う。俺達4人で決めたんだ。そして大西をけしかけて、今日集まるように仕向けた」

「なんのために?だつたら放つておけばよかつたじゃないか。わざわざこんなことをする必要なんて・・・」

「大西がどう出るか分からなかつたんだよ」

意味不明だ。どうしてそんなに大西を意識するんだ?あいつ一人に、何ができる?

「青島は知らないかもしれないけど、大西はしばらく前からかなりまずい連中と付き合いはじめてる。いわゆる不良だよ。バックには暴走族だとか暴力団とかも繋がってるらしい。」竹田は困り果てたというふう苦笑した。「そいつらに大西が、武勇伝つてことで俺達の活動を触れ回つてたんだ」

「だから面子を守るために、大西はなんとしても解散に反対していく

るつて、そういうことか？」

「そうだ。だから今日俺達は、わざと計画を失敗させるつもりでいる」

「自分が言いだした計画が失敗に終わったところで失意のうちに話を持ちかけて、それで、大西に解散を納得させる」

「そういうことだ」

「何で俺に黙つてたんだ」

「青島も反対していくと思つたんだよ。盗みをしようとした時に提案したのはお前だつたる」

「そりだつけ」すっかり忘れていた。

「で、どうなんだ。賛成なのか、反対なのか？」

もちろん賛成だ、前から止めようかと思つてたんだよ、と言つと、竹田は大げさに安心した。

「お前が反対してきやしないかと不安だつたんだよ。もし大西にこの事を話して形勢を巻き返そくなんてされたら、それこそ俺たち4人は大西の仲間の連中にどんな目に合わされるか分からなかつた。特に同じ学校の3人は」

竹田はそれから今日の計画について説明をだした。なんてことはない、単純な方法だつた。要するにわざと学校のセキュリティーに引っかかって後は逃げるだけだ。

頼むぞ青島、とだけ言つて竹田はもと来た道を戻りだした。一輝もそれについて、冷たい寒空の公園の散歩道を歩いた。

時刻は午前2時。丑の刻。幽霊が一番出てくるのはこの時間だと聞いたことがある。

一輝たちは三島中央小学校の裏口の前に立っていた。立ち込める冷気は肌をも凍りつかせるほどだったが、自転車で走ってきたばかりなと緊張もあって、体の芯はそれほど寒さを感じていなかつた。一輝が6年間通つた学校だ。そこにこれから不法侵入しようとうのだから、人生ホントになにがあるか分かつたものじゃない。

登るぞ、と村上が口だけで合図をした。一輝たちは周りに人がいるか確認する。

村上の足が金網にかけられ、ガシャガシャという金属音を辺りに響かせた。もしこの音を聞いている人がいたら本当に幽霊が出たかと思つたかもしれない。夜中に徘徊する甲冑の騎士だ。西洋じやあるまいし。

見張りに残つた竹田と谷以外の4人が登りきると、今度は手は必ずおり非常階段のところへと向かう。ここでまた村上が見張りに残り、3人は閉ざされた鉄格子を乗り越え、できるだけ足音を立てないようにして階段を上つていつた。目指すは3階の扉だ。4日前に調べに行つたところ、そのガラス窓は割れてテープで塞がれただけになつていた。昨日も外から様子を見に行つたけれどガラスは割れただままだつた。

どうせなら、わざわざ手間をかけるよりその場にあるものを活用したほうがいい。

一輝は手早くテープをはがして、ガラスに穴を作つた。中に手をつつこんで鍵をまわす。一応6人とも手袋をしているので指紋は残らない。

だがこれだけでは扉は開かない。中から別の鍵がかけられているのだ。しかもこちらは鍵本体がないと開け閉めができない。

そこで三上の出番だ。一輝と場所を変わって手袋をはずし、用意しておいた金属片と針金を指先に、腕を穴に入れる。

こんなめんどくさい扉を入り口に選んだのにも、理由があった。三島中央小学校は60年以上前とかなり昔に校舎が建てられたのだけれど、最近、防犯設備の導入があつて学校中の扉やドアに自動警報装置を設置したのだ。そのため、侵入の際には例のごとくガラスを割つてそこから建物に入つてゆかなければならぬ。

けれど2重鍵があるから大丈夫と高を括つたのか、外に面した非常階段ぞいの扉には警報装置がつけられていない。セキュリティーがどこにかけられているのかは谷と三上が調査済みだつた。

そんなことを思つてゐる間にも鍵が開いた。三上が扉の取つ手に手をかけ、ゆっくりと引いていく。警報は鳴らないはずだとはいへ、もしも間違つたことになつたら取り返しがつかない。3人が同時に息を飲んだ。

何の音もしない。

緊張を抜かないようにして三上が建物の中へと足を入れた。

真つ暗だつた。何も見えない。月明かりのある外とは違つて、校舎の中は微かな光も見えなかつた。

一輝はポケットからペンライトを取り出して、静かにスイッチをONにすらした。3人の目の前におぼろげな光の輪が広がつた。遠目に気づかれないように、ライトには布をかぶせて必要最低限の光しか発しないようにしてある。

頭の中の道順と照らし合わせながら、闇の中をゆっくりと足音を忍ばせて進んでいく。狙うのは2階にある職員室の金庫だ。

閑静とした廊下の中を、自分の脈の波打つ音だけが耳元で響いている。

宿直室には今日も見張りの人間がいるはずだつた。大きな音を立てれば、見つかって一巻のおしまいだ。

「ライト、もつと足元にも当ててくれ」大西が耳元でささやいた。

「これじゃあ転んじまう」

「分かつた」とうなずいたが、一輝は光の向きを少し下げただけだつた。残念ですけれど、その御要望はかなえられませんね。

不服そうにもう少し、と言つてきたが、三上はそれを「声を出したら気づかれる」と返して黙らせた。大西も言い返そうとするが、大きい声がでてしまうのを恐れてかそのまま何も言わずに歩き続けた。

予定通りだ。

一輝たち5人の目的は今回の計画を失敗させて、大西にメンバーの解散を納得させることにある。だけどそのためには、失敗の原因をメンバー全員か、もしくは大西一人に置かなければならない。でなければ、責任者にメンバーを抜けてもらうとかして、大西に解散を阻止する口実を与えてしまうからだ。

もちろん、一輝たちの思惑がうまくいつたとしても大西は反対してくるかもしない。それでも前者と後者では説得のし易さが違つてくるだろう。

本人もお察しの通り、大西には今から派手に転んでもらうことになつてている。2階の階段を出てすぐ右側の廊下、机と椅子が積まれて並んでいるはずのところでだ。

実は大町中央小学校では明日、高校で言う文化祭の様なものをやる日になつていて、そのために教室中の机と椅子が廊下に積まれているのだ。そして大西だけがそのことを知らない。あとは廊下に出て、わざと机のある方向から光を遠ざけてやればいい。大西は机に激突し、宿直員が飛んできて一輝たちはすぐさま逃げ出すという寸

法だ。

階段に足を踏み出す。音を立てないように1段1段慎重に歩き、2階に着く。もう少しだ。大西は3人のなかで右側を歩いてる、そのままライトをまっすぐ当てて……

突然のことに一輝は自分の左足が痙攣を起こしたのかと思ったが、そうではなかった。携帯が電話の着信を知らせて振動していた。頭の中で6人の間で取り決めた言葉が駆け巡った。

犯行中、携帯電話は互いの仲間以外の着信を遮断し、緊急の要件以外では通話連絡を厳禁とする……緊急の要件以外では いつたいどうしたつていうんだ、2回の廊下はすぐ目の前だぞ。

さりげないふうを装つて、2人の様子を伺う。さすがに大西もハイブが鳴つたのに気づいていた。一輝は諦めてポケットから携帯電話を取り出した。

かけてきたのは非常用階段の下で待つっていた竹田だった。

「青島」

声が上ずつている。同じ声を竹田が出したのを一度だけ聞いたことがある。一番最初に留守の住宅に忍び込んで、近所の人間が庭の手入れをしに家に入ってきた時だ。

「大変だ人に気づかれた。たぶん金網を乗り越えた時からだ、さつきまで二階の部屋の窓からこっちの様子を伺つてた。もしかしたら警察を呼ばれたかもしれない」

何てことだ。

「どうしたらしい」

「とにかく急いで出て來い。人に見られそうになつたらすぐここから連絡するから今のうちに早く」

「頼むから声を抑えてしゃべつてくれ

「悪い。でも急ぐんだ」

「だけど」計画はどうなる?

竹田は黙つたままだ。大西のいる前じゃ何も言えない。

「今から行く。人に見られた、逃げるぞ2人とも」

「マジかよ」

三上が毒づいたのとほとんど同時に大西が舌打ちを漏らした。

「つたく何やつてたんだよ竹田たちは」

最悪だ。一輝はもと来た道を早足に歩きながら自分も舌打ちした。これで大西に責任を取らせることも、メンバーを解散させることもふいになつた。おまけに目撃されて急いで逃げなければならぬといふおまけつきだ。前もつてした準備も全て水の泡だ。

悪いことはさらに続いた。三上が勢いよく開いた出口の扉が大きな軋み声を上げたのだ。学校中に響き渡る、宿直の人が起きていたら間違なく耳に入つてくるような大きな音だつた。

真つ青になつている暇もなく、3人は校舎から飛び出して階段を駆け下りた。気づかれたかどうかなど確かめもせず、ひたすら下へと足を動かした。

「こつちだ」

見ると竹田が足もとで手招きをしていた。

「裏口は危ない、校庭のほうから出る。こつちだ早く」

歯軋りをしながら竹田のあとを走つて追いかけた。あごの力が抜けるたび歯がガチガチと音を鳴らした。

校庭の金網を乗り越えて校舎から出た。谷と村上に合流し、息をつく間もなく自転車をとめてある工場前の道路に向かつて駆けた。背中からパートカーのサイレンが学校の方向へ近づいてくるのを聞いて、寒さとは別の理由で全身に鳥肌が立つた。

「パートカーだ」誰かがかされた声で言つた。「音を立てずにいかないと見つかる」

可能な限り足音を忍ばせながら、それでも一輝たちは全力で走つた。自転車を見つけると飛びかかるようにして鍵を外し、乗り込むと同時にこぎだした。どこでもいいからとにかくここから遠くへ。

それだけを考えてひたすらこいだ。

家々の間を抜け、無人の交差点を渡り、車の通らない道路を横切つて進んでいった。寒さも疲れも感じなかつた。こびれついたサイレンの響きだけが頭の中であえず反響していた。

どれだけの時間がたち、どれくらいの距離をいつたのだろうか。一輝たちは見たこともない町の景色の中で、荒い息をついてぐつたりと自転車に寄りかかっていた。

「くそ」

吐息とも愚痴ともつかぬ声で大西が吐き捨てた。

「何でこうなるんだ」

大西の自転車が蹴飛ばされて横倒しに地面に叩きつけられ、そのままひょうしにハンドルが内側にへし曲がつた。

くそ、ともう一回叫ぶと地面に仰向けに寝転がつた。

はじめての失敗。それも自分達で失敗を望んでいた時に、全く予期しない形でやってきた失敗なのだから、皮肉以外の何ものでもなかつた。

真つ暗闇の2回の廊下が頭に浮かんだ。あともう少し、曲がり角まで本当に目と鼻の先の距離だつた。もう3歩進んでいたのならつまくいっていただろう。竹田が携帯をかけてきさえしなければ。

もちろん、竹田を責めるべきではない。これは全員の責任だ。

思えば、今までがうまくいきすぎていたのかもしれない。所詮は素人の中学生が馴れ合いでしていたことだ。いつか失敗するはずだつた。それがたまたま今日だつたというだけのことだ。

もうやめよう。こんなことは今夜で最後だ。大西を説得して、普通の学生生活に戻ろう。

覚悟を決めて、一輝は何気なく空を仰いだ。

冬の夜空に太陽の昇つてくる気配は感じられなかつた。

1月7日

真一はホテルのベットの上で目を覚ました。

眠気はなかつた。体中が、指の先まで醒めきつている。

手を伸ばして目覚まし時計のスイッチを切つた。まだ5時だつた。セットした時間よりも1時間早いが、一度寝するほどの眠気はない。起き上がって部屋の電気をつけ、顔を洗い、昨日の夜コンビニで買つてきた弁当を食べた。

カーテンを開けると外は真つ暗だつた。光はどこにもなく、東京の街は深夜以上に夜だつた。

手紙の主が再び会う約束を取り付けてきたのは今日だつた。午後1時、喫茶店『ブルボン』に一人で来ること。一枚目の手紙の文面と同じ、感情を感じさせない、一方的で有無を言わせぬ要求だけが短く書かれていて、美穂ちゃんのことについても一言も触れていたなかつた。唯一美穂ちゃんに関係したことといえば「身内の人間に危害を加える」の中に「別の」という2文字が加えられていたことぐらいだつた。1人でダメなら2人目、3人目があるという徹底した冷酷さに、真一は底知れぬ恐怖と、どうしようもない己の無力を感じずにはいられなかつた。

『ブルボン』にやつてくるのは誰なのか、送り主は何が目的でこんなことをしたのか、美穂ちゃんは無事でいるのか、真一はここ2日間、それのことばかりを考えて仕事も何もほとんど手につかなかつた。

だが、考えて分かることなどなかつた。

はつきりしているのは今日いくらかの答えが明かされるだつとということだけだ。自分でどうこつできるものは一つもない。そう。分かつたことといえば、今の自分の運命が見ず知らずの他人の手に

握られているという事実くらいだつた。

しかし今は落ち着いたものだつた。ある意味、諦めがついてしまつたのかもしれない。俺がどうあがこつと、何も変わらないんじやないかという諦めが。

スーツを着て、部屋を出ることにした。1時からの待ち合わせに時間をとられるかもしれないのに仕事はできる限り済ませておく必要があつた。

会社にはまだほとんど人影がなかつた。真一はがらんとしたロビーをぬけ、エレベーターに乗つて自分の仕事部屋へと向かつた。こういうときは例にも漏れず時間がゆっくりと進むもので、机に向かつている2時間が4時間にも6時間にも感じられた。

朝会に出向いてから、部屋に戻つて仕事を再開した。しかし、効率よく進んだのは1時間かそこらで、11時になる頃には、手が動かないといつていいほど少しも書類の文書に集中していられなかつた。

動悸を抑えようと真一は窓を開けて深呼吸をした。窓を開けると車の騒音が部屋の中へと流れ込んで、かえつて落ち着かなかつた。

「これから落ちたら死ねるだろつか。

ふとそんなことを考えている自分に気づいた。

自分の考えに驚くことはなかつた。自殺を考えるのは頻繁というほどでもないが、少なくもなかつた。いつもは仕事や生きがいのなにに絶望するけれど今日はまた違うことが真一の背中を押していた。

投げ出すにはまだ早い。これから全てが始まるんだ。

真一は窓を閉めて机につき、仕事の続きを取りかかった。必ず自分の力で今回のことに対する決着をつけてまたいつも生活に戻してみせる。そのためにも目の前の課題をほつたらかしにはできない。そう自分を説得して、真一は前を向くように自分に言い聞かせた。波打つ動機を無理やり抑えてペンを握り、書類との格闘に集中しようとした。

1時間半後、12時半を知らせる時計のアラームを聞いて真一は部屋を後にした。

空は曇りで、外は凍えるほどに寒かったが、体は緊張からくる動悸で火照っているくらいだった。早足に歩道を突き進むと『ブルボン』まではあつという間だった。

午後0時42分。時計で時間を確かめ、目の前にたたずむ建物を見据えると、急に今まで感じていなかつた激しい怒りが胸の中で燃え滾つた。敵の姿を、憎むべき相手の姿を見つけたように錯覚したからだろうか。この中に手紙の主が待っている。心の中でそう言葉にしてつぶやくと怒りは我慢できないくらいに膨れ上がった。

恐怖と不安が巻き起こつて怒りを消し止めてしまつ前に、猛る足取りで開きだした自動扉の間に飛び込んだ。

中はそれなりに人ごみで混んでいた。昼休みに立ち寄つたらしいサラリーマンや買い物途中の女性、遊びに来たらしい若い男達の声があちこちから聞こえてくる。

「お客様、お一人様ですか？」

のんきにたずねてくる20くらいの男性店員にそうですと答えた。手紙には来るよう書かれていただけで、待ち合わせ客と名乗れだとか言つ指示はなかつた。真一はだつたら余計なことはせずに席についていようと前もつて考えていた。

「カウンター席でよろしいでしょうか？」

「いや、できれば静かな席がいいんですけど
ではこちらにどうぞ、と店の奥のほうへ案内してくれた。カウンターのような人目につく席でできるような話じゃない。最悪、相手がなにも言わずに帰ってしまう可能性もあった。

「ごゆっくりどうぞ」

午後0時45分。あと十五分だ。

暖房が効きすぎでいるわけでもないのに真一は頬を伝つた汗をぬぐつた。

50分。見える範囲に怪しそうな人物は見当たらない。

56分。辺りを見回してみるが、誰も近づいてこない。店内は相変わらず明るい話し声が絶えなかつた。

58分。じつと時計の秒針を見つめた。そろそろ来るはずだ。店の空気には何の変化もない。

残り60秒。秒針が12時を通り過ぎる。カウンター向うの壁掛け時計も同じ時刻をさしている。喉が渴いている。何度つばを飲んでも潤わない。

30秒、20秒、もうすぐのはずだ。

「青島真一様という方はおられますか。小暮久則様が電話でお呼びです。お客様の中に青島真一様という方はおられますか」

小暮・・・社長？虚をつかれて一瞬何がなんだか分からなくなつてしまつた。が、すぐに理解が追いついた。時計はちょうど午後1時を指していた。壁掛け時計もだ。これは小暮じやない。小暮久則は偽名だ。

「すいません。私です」

飛び上がるよう立ち上がり、レジまで小走りで駆けた。周りの客が変な人を見るような目つきで見てきたが気にならなかつた。

「私です」

店員も真一の勢いに驚き、無言で受話器を渡した。

「青島だ。でたぞ」

たたみかけるやつといつと、
「どうも」といひな
が返ってきた。

機器の匂づかひ無表情な声で返事

「お前があの手紙を私によこしていったのか？」

「そういうことになるな」

「美穂ちゃんは無事か？」

信じがたいことに、笑い声が返ってきた。

「そんなことをこんな場所で言われると困るな。まわりに人がいるんだろ。聞かれたらどうするんだ？」

「答える」

怒りで受話器を持つ手が震えた。店員が不安そうにこちらを見ている。

「おいおい、俺の話を聞いてるのか？このことを他人に話したら彼女がどうなつても知らないぞ」

「ということは無事なんだな」

「どっちでもいいぞ。なにも危ないのは倉田美穂に限った話じゃないんだぞ」真一の心境とは裏腹に、電話越しの男の声は陽気だった。「場所を変えよう。今から番号を言つから、とにかく人のいない場所で電話をかける」

そう言つと男は電話番号を読み上げた。明らかに携帯電話のものだった。真一はそれを自分の携帯電話に打つて登録した。

「お前は誰だ」

「そうあせるなよ」

電話が切れた。

真一は礼も言わずに受話器を店員に返して自分の席に戻り、すぐに登録したばかりの電話番号を呼び出した。が、返ってきたのは通話中を知らせる電話案内の声だった。

呼び出しの中止ボタンを押して、その指で危うく携帯電話をへしあつてしまいそうになるくらい、手に入つた力がはいつた。完全になめられている。

何とか怒りを抑えて、相手がどんな人物なのかを考えようとした。声の感じは堅くもなく柔らかくもなかつた。歳もそれほど離れていないような感じがする。

そして、あの男は真一とのやり取りを楽しんでいた。まるで勝手知った友達と話しているような口ぶりだつた。楽しむことだけが目的だとしたら、はたしてこの俺に、あの男と一人で対峙して全てを解決することができるだろうか。真一は底知れない絶望感が心に根を張つていぐのを感じた。そしたら、俺の人生はどうなつてしまふんだ?

不安を振り払おうと、再び呼び出しのボタンを押した。今度は3秒ほどでつながつた。思わず息を飲み込む。

「悪いな。上司から電話があつて」

「会社勤めなのか」驚いて尋ねた。

「まあそんなところだ。それより取引の話をしよう。要求を呑んでくれれば倉田美穂は返すし、お前の身内にも何もしない」

「要求とは何だ」

「簡単なことだ。横須証券株式会社に俺達が自由に干渉できるようにしてもらいたい」

「は?」

聞き間違いかと思つた。男が横須証券株式会社をどうにかしようといつている。

「なにを言つてるんだ?」

「だから言葉どおりのことだよ。俺達がお前が専務を勤める会社に自由に干渉できるようにしてもらいたいんだ」

「意味が分からぬ。そんなことできるはずがない」

「できるさ。そのための算段は俺達がしてある。お前には、社長とかのお偉い連中にこのことを伝えてもらいたいんだ」

「どうにつけどだ」

「小暮久則をはじめ、役員連中にお前にしたのと同じかそれ以上の脅しをする。なんだつたら横須証券の社員に手をかけてみたつてい

いぞ

「ふざけるな」

震える声でそう一言だけ搾り出した。憤怒で震えてるのか恐怖で震えてるのか分からなかつた。

「ふざけてなんかない」

「そんなことをしてどうするつもりだ」

小さく笑い声がした。余裕を持った、いやらを見下ろしてくる笑い声だ。頭が真っ白になつた。視界が本当に歪んで見える。

「まだ言えない。そのときになれば全て分かる」

「どうしてこんなことを・・・」

「それも俺達がすることを見てれば分かる」

「本当に社長達に伝えなければならないのか」

「もちろんだ。あと、警察には何もしゃべるな。美穂ちゃんの誘拐とお前にやつた手紙のことはいいが、今回のことを他言したらただじやすまないぞ」

いまさら警察に行けるわけがない。

「社長連中にここのことを伝えて、全員に脅迫が終わつたら美穂ちゃんも返してやるつもりだ。言つとくが警察に行こうとしてもすぐには分かるぞ。電話で伝えるのも無駄だ。警護の人間の姿が見えればすぐには気がつくからな」

もはや何も言い返すことができなかつた。言い返そうにも、頭の中が真っ白になつてしまともにものを考えることができなかつた。

「そういうことだ。明日の1時、もう一度この番号に連絡して来い。じゃあな」

「待つてくれ。最後に一つだけ教えてくれ」最後の力を振り絞つて尋ねた。「どうして、この俺なんだ？」

電話口に沈黙が流れた。何のための沈黙なのか、男がどんな顔をして黙つていいのか、真一はそのことを強く知りたいと願つた。

「都合がいいから、とだけ言つておくよ」

電話が切れた。あとには、無機質な電子音だけが残つていた。

7月17日

その日は天気予報が外れて大雨になった。

朝から小雨が降りだして、今はザアザアと音を立てるほどに雨脚が強くなっていた。夏の午後はひどい湿気と前日までに残つてた暑さとで羽鳥を憂鬱な気分に誘つた。

羽鳥はいつものスーツを着込み、この雨の中で国道を抜けたところだった。バンパーをかけても曇つたままの前部ガラスが苛立ちと不安に拍車をかけ、知らぬうちに舌打ちをしていたようだった。

「羽鳥さん、やっぱりこんなのが行かなくつたつていいんじゃないですか？」

助手席に座つていた小富山がめんどくさを隠せずに言つた。

小富山は羽鳥の直属の部下で、秘書的な存在だった。羽鳥の執り行う事業にはたいてい小富山も絡んでいる。今回の、横須賀証券の乗つ取りに関してもそうだった。どちらかといえば羽鳥とは違つたタイプの性格で、軽率なところは田にあまるが、行動力があつて人付き合いもうまかった。

「念のためだ。俺が手をかけたことなんだから、その根は自分で摘み取るのが道理だろ。それに、ついてくるつて言つたのは小富山じゃないか」

「そうなんですかね」 大きくため息を吐く。「めんどくさくなつてきちゃつて。こんな天気だし」

小富山はそう言つて自分の着ているスーツの襟をいじくつた。わざわざ地味な格好の物を選んで羽鳥が貸した物だった。非番だといえ目立つようなことがあつてはいけないと思つたのだ。それに、ひょつとすると内ポケットに収めたサイレンサーを使う必要が出て

くるかもしれない。

「もしも呼び出してきた相手がこちらのしていたことのある程度知つていて、強硬手段にでもそつた態度を見せたら、迷わず、消すぞ」

分かつてます、と小宮山が氣のない返事をした。

「でも、もしも相手が大人數でしかけてきたらどうするんです?」

「そのためにお前に来てもらつてるんだろ」

「相手も銃を持っているとしたら大した応援はできませんよ」

「あの手紙を書いたは一般人だ。その筋の人間は出でこない」

同業者の人間だとしたらこんな事をする動機がない。十中八九、相手は青島達と何らかの形で交友のあつた人物だと、羽鳥はにらんでいた。だから、羽鳥が青島真一の住んでいたマンションに来るのを見越してあんな手紙を貼り付けて呼びつけ、復讐しようと企んだ。自分がどれだけ危険なあだ討ちをしているのかも知らずに。

一昨日、羽鳥は『十日後に来い』という指示に従つて再度ロイヤルマンション坂田を訪れ、そこでまた同じ青い封筒を見つけた。その中には一枚の地図と、宣戦布告のような趣旨の内容が書かれた手紙が入つていた。その地図に示してあつた場所というのが今羽鳥達の向かつている旧工場団地の空き工場だつた。まさに、決闘の舞台にふさわしいセッティングというわけだ。

手紙をあてつけてきた人物の始末のほかに、羽鳥には大きな懸念があつた。この手紙を書いて廃屋で待ち伏せしているのが一人にせよ大人數にせよ、そいつらが他の人間にもこのことを言いふらしている可能性があるのだ。

もしそうだつたら、とてつもなく厄介なことになる。せつかく、横須証券がらみで事が露見しないようにと行った工作も、役員5人にして口封じも全て無意味になつてしまつ。羽鳥はそれだけはどのようにかして避けたいと考えていた。だからこそ、今日手紙に指示された場所に向いて、直接話を聞く必要があつた。始末をするかを決めるのもそれからだつた。

「今は、一般人だつてやうとすれば拳銃も手に入る時代ですから
「なるほど。そういうことも考へられるな」

「とあるとやつぱつ危険ですよ」最後の警官とでもこいつらは、や
わやか声で言つてきた。

「そうかもしれないな」

それでも行かなければいけないのだ。

「まったく、一体誰がこんな世の中にしちまつたのや」

小畠山がぼやいた。

1時間くらいして、車は廃工場の前へとたどり着いた。うるさい音を立て落ちてくる雨粒以外に何一つとして動く物の姿が見えず、ここに、本当にかつて人が出入りしていたのかと疑いたくなるほどだった。町に生物兵器でも投げ入れられて、人だけが死に絶えてしまったのならこんな寂しい風景が出来上がるかもしれない。それほどに、辺りには生氣というものが感じられなかつた。

半世紀、いや、それよりも短い時間でもさかのぼつたのならば、ここも人の掛け声と機会の稼動音であふれていた。そう思うと不気味な感じもした。所詮どんなに活気に満ちていようと、人間などあつという間に荒廃し、落ちぶれてしまつ。そんな現実を突きつけられているかのようだつた。

傘をさして2人は車を出た。来た時に見たが、やはり辺りに人影はない。

人を殺すのにはもつてこいの場所だ。その上この雨。近くには工場が連なるばかりで民家はずつと遠くのほうにある。たとえサイレンサーのついていない銃を撃つたとしても、銃声を聞きつけられるようなことはないだろつ。

もしかしたら。

「本当に銃を持つてるかもしだせんね。相手さんは、ここでは俺達を撃つても気づかれないでしょ」

「お前もそう思うか」

目の前では扉の開け放しになつた工場の入り口が、ぽつかりと暗い屋内をのぞかせていた。

「やつぱりやめておきませんか？」

小富山が眉間にしわを寄せて工場をにらみながら促した。

この先に、俺達に復讐を果たそうとしている人間がいるかもしだれない。あの日獄中に葬つたはずの青島真一たちの亡靈が。薄暗い工

場の中で、じつと羽鳥が来るのを待ち構えて。

俺は自らの幻影を葬るために、青島を葬った。中学生のあの日、自分が今の道に進まなければ歩んでいたはずの人生を生きる青島真一を消し、今の自分の生き方が間違つていいないことを確かめようとした。力も金も、青島真一の行き方より勝つてているということを確認したかった。そして俺はそのことを証明して見せた。俺は今日も外のこの地を踏みしめているのに、青島は狭い牢屋の中に閉じ込められ、まずい飯しか食えず、むなし労働に従事して、暮らしている。それも全て、羽鳥には力があり、青島を支配することができたからだった。この生き方が正しかつたからだった。

それなのに、今俺の目の前には青島の亡靈が身を潜めてる。ビニカで銃口をこちらに向けて、俺を殺そうと待ち構えている。

「いや、行こう。いまさらやめるのもなんだ。素人相手に俺達がびびつてどうする」

「それもそうですね」気が進まなさうに小富山が答えた。

入り口へと進んでゆく。後ろから小富山の足音がついてきた。

工場の中は、天氣のせいもあってかほとんど真っ暗といってよかつた。がらんどうで、機材の一つも残つていらない。おそらく廃業になつてから工場だけを売り渡そうとして、全て処分されたのかしたのだろう。そのあとで急に商談が決裂し、ただつ広い廃屋だけが残つてしまつたのかもしれない。おかげで人がひそんでていられるような場所はそんなにない。が、この暗さは身を潜めるのには十分だつた。これだけ視界がきかないとなると、こちらから銃の狙いをつけるのは難しい。羽鳥は人影はないかと注意を払いながら、ゆっくりと中へ1歩ずつ進んでいった。

「小富山、あの手紙をロイヤルマンション坂田の青島の部屋にに貼り付けたのは誰だと思う？」

突然気になつてたずねてみた。

「さあ、見当もつきませんね」小富山は相変わらずどこか口調が不機嫌だつた。

「考へてもみれば当たり前のことだけれども、その人物は俺がいつあの手紙の元を訪れたのか知っていたはずだ。でなければ、10日後にどうこうしろなんて約束ができるはずない」

「はあ、確かにそうですね」

「とするとだ」羽鳥は得体の知れない不安が胸に渦巻くのを感じた。「その人物はずっとあの手紙の前に張り付いていなければいけないことになる。それもできないことじやない。けど、幾ら復讐のためとはいえそこまでするとは到底考えられないだろ。だつて俺がいつあのマンションに出かけて手紙を見つけるかなんて、相手の側からしたら見当もつかない事のはずだ。それこそ朝も、昼も、夜も、深夜だつて十分ありえる。実際俺があの手紙の元を訪れたのは事件から2ヶ月も経つてからだつた。そのあいだずつと同じ場所で張り込んでいるなんて普通だつたらできない。大人数の仲間がいたつてそんなことはやらないだろ？ なのに相手は10日後という期限を守つてきた」

おかしい。おかしすぎる。俺は何かを見逃している。

「何かおかしくないか？」

「どういふことです」小富山の声色からは恐怖が感じられた。

頭の中ではさまざまなことが交錯した。青島真一と再会した夜のこと。横須賀の乗つ取りを計画した時のこと。幹部5人の逮捕、そしてロイヤルマンション坂田で見た青い封筒、『羽鳥勇介様』・・・

・・・

そのとき羽鳥は全てを悟つた。

「あの手紙の目的は、復讐じゃない」

ガチャリ、と拳銃の安全装置の外れる音が工場の中に響いた。羽鳥はようやく自分に向けられている銃口に気がついた。

「だから何度もやめたほうがいいって言つたんだ！！」

小富山が、この世の物とは思えないような絶叫を上げた。

羽鳥はポケットから拳銃を取り出そうとしたが、遅かった。

銃声が炸裂して頭蓋が打ち碎かれたのを最後に、羽鳥は全ての意

識を失つた。羽鳥は視界が暗くなるのを知覚し、続けざまにいくつもの銃声が鳴り響くのを聞きながら、永遠に覚めない眠りについて床に崩れ落ちた。

7月17日

「病院に運ばれたって？」

「ついつさつき。腕の骨を折られて・・・」

「原西、おまえは大丈夫なのかよ」

「大丈夫じゃないけど、岸本よりは」

原西が大きく咳き込んだ。雜音で音が割れる。

「一応手当てとかしてもらつたらどうなんだ」

「めんどくさいからいいよ」

「財布、盗られたのか」

「ああ」歯軋りが伝わってきた。「クソッ、ホントついてねえ」

電話の向うから突然人が立ち上がりて椅子が揺れる音と女の人の小さな声が聞こえた。おそらく岸本の母親だろう。どうですかと尋ねているのが、微かだが聞こえた。答える医者の声は病院の中で話していると思えないくらい大きく、原西の持つ携帯電話にもしつかり届いた。

骨折なので無事とはいえませんが、腕以外では特に問題はありません。

その後に岸田の母親を慰める言葉が続いたが、原西の「岸田は無事みたいだぜ」という一言で遠くの声はかき消された。

「で、どこで襲われたんだよ」

「塾の帰りの、ほら、前にも一度通り魔があつたとこだよ。通り魔だぞ、ただの通り魔。ちくしょつ。かつあげまでするなんて聞いてねえぞ」

悔しそうに言つているけれど、言い方がおかしい。どこまでも能天気な奴だな、といつもなら笑つて言い返しそうになるところだつたけれど、今夜ばかりはさすがに笑うことができなかつた。

一輝は指先で手紙を握り締めながら質問した。

「相手は何人くらいだつたんだ」

「6人ぐらいだ。よく覚えてねえ。2人相手にかかつてくるなんて、卑怯だろが」

かつあげつてそういうもんだろ、とツツコム余裕もなく、一輝はさらに尋ねた。

「歳は」

「たぶん俺らと同じくらいだ」

「そいつら、何か変なこと言つてなかつたか」

「つたく何でそんなこと聞くんだよ」

原西が陰悪にはね返してきた。体中を殴られて財布も取られ、気分最悪の中で、心配して電話をかけてきたはずの友達から突然意味の分からぬ質問をまくし立てられたらそれは怒るだろう。

「いや、わるい。なんでもないんだ」

「そうかよ」

とりあえず岸田のとこに行くから、と言つて原西は通話を切つた。一輝が口を挟む間もないくらいに、あつといつ間に切られた。

俺もお前と同じくらい最悪の気分なんだよ。

受話器を置くと、母さんがすぐに岸田君たちはどうだったの、と聞いてきた。一輝はそれを適当に大丈夫みたいと言つて居間を出ようとした。詳しく教えてくれと声をかけられたが、無視した。

「なによ、反抗期？」

背中からさつきの原西と同じ風に邪険に声をかけられたが、それも無視した。今までの母さんだったら、どんな時でもこんな風に荒れた口調で話すことはなかつた。母さんは、父さんが逮捕されてこの小さなアパートに引っ越してからずっととこんな感じで機嫌が悪く、化粧もしなくなり、髪の毛をぼさつかせて、外見は10歳くらい老け込んでしまつた。幸せな生活から突き落とされた人はどうなるか、一輝はこの2ヶ月近くの間ずっと思い知らされる羽目になつた。しかし、それも今は慣れて何でもなかつたが。

できるなら鍵をかけたが、築40年のボロアパートにはそんなものはなかつた。一輝は母さんが入つてくる気配はないかと確かめてから、手に持つた手紙を開いた。

三つ折にされた手紙が手のひらに落ちる。

手紙を開いて文面を見た。やはり、見間違えでもなんでもない。そこには最初に見たときとなんら変わらないことが書いてあった。

7月17日午後10時、お前と同じ塾に通う岸田洋一と原西敬介を襲つた。嘘だと思うのなら、明日の早朝ポストに2人の財布を入れておくから確かめる。

7月20日の午後10時に現金10万円を持つて市川中学高等学校の校舎裏に来い。来なければ同じ手口でお前の学校の知り合いを襲い、そいつらにお前が谷雅夫、竹田耕太、大西遼平、三上卓、村上龍と何をしていたかを全て話す。

まさかいまさらになつてこんなことが起こるとは思つてもいなかつた。もつとも、1月はじめにメンバーを解散したときもこんな事態、全く想像すらしていなかつた。メンバーの名前が漏れていた。そして少なくとも一輝に関しては住所まで知られている。

けれど誰がこんな事をしたのかは、考えてみるまでもなかつた。一輝たちの名前、住所、そして今までやつてきていたことを知つていて、且つこれだけの事をやれる人間は、1人しかいない。

一輝は怒りを抑えながら机の上の携帯電話を握り取つた。そのときちょうど居間の電話が鳴り出して母さんが出たが、構わずメニューを開き、電話帳を並べ、問題の人物の名前を押して・・・

「一輝、電話よ。学校の友達から
通話ボタンにかけかけた指が止まつた。

「誰?」

「岸田君」

岸田は一輝とは違う学校だ。その上、今は骨折して病院にいる。

一輝はふすまを開けて部屋を出て、怪訝そうな表情をしている母さんから受話器を受け取った。無言で、何かが変だと伝えている。まさかとは思いながら受話器を耳元に当てた。不安感が胸の中で渦を巻いて広がり始めた。

「もしもし、岸田か？」

たつふり5秒ぐらいが流れたかと思った。それくらいの間があつた。「岸田？」

返ってきた声は、岸田でも、人ですらなかつた。

「青島一輝だね」

キーキーと甲高い電子音がそう言った。ボイスチェンジャーを使つていて。

「だれだ」

「君に手紙を送つた、犯人さ。手紙はもう見ただろ？」

「どうして電話をかけてきた」

さりげなく横に視線を流すと、母さんがこちらを怪しげに見ていた。自分の心臓が大きく波打つていて分かる。ここで話されたら、まずい。

「特に理由はないよ。暇だつたからどうしてるかなつて思つて」感情を感じさせない、平坦で抑揚のないしゃべり方だった。本当に人じやないのでと錯覚してしまいそうだった。

「今忙しいからさ、後でまたかけてくれないか」

必死に平静を装つた声を出した。

「いいじゃないか。ちょっと話さないか」

「後でもいいだろ」

「いやだね」

「何で今じやなきやいけないんだよ」

「言つたろ？暇なんだよ。君こそ何で忙しいんだい。教えてくれなきや、俺、切らないよ」

母さんはまだこっちを見ている。額を汗が流れ落ちて目に入った。考えようとしても、頭が凍つてしまつたかのように働かない。間違

いない。相手はこっちの様子を知つていて話をじょじょにこころる。

「頼むよ。宿題残つてるんだ」

「なんだ、宿題だつたら後でもできるだる。ほんの5分くらいいだよ。

話してもいいだろ」

「だめだ。どんなに言つてもこいつは引きつこつてくれる。

「いい加減にしろよ。もつ切るからな」

「切つたらまたかけるよ」平坦な口調の中に、一瞬だけ感情が混じつた。「分かるよね。同じ人から何度も電話がかかってきたらさがに君のお母さんだつて怪しむと思つよ」

声にこもつているのは、嘲りでも、怒りでも、馬鹿にしたようなあきれでもなかつた。これは
「なにをあせつてゐるんだ?」

「あせつてる?」鼻で笑う音が聞こえた。「どうして僕があせんな
あやいけないんだ」

横に座っていた母さんが立ち上がり、台所に戻つていった。喉
につかえていた重りが軽くなつた。

「そんなことしるか」

「いい加減なことを言つなよ。あせらなきやいけないのは君のほう
だろ。このままだとまことにんじやないかな。君が今までしてきただ
とが知れたら、君の周りの人たちはなんて言つかな」

またもや笑い声がこぼれた。冷ややかな空気が耳を伝つてくるよ
うだつた。

「まあ、普通の生活はできなくなると思うね。犯罪者の親子か。父
親のほうは会社をつぶし、息子は夜な夜な盗みをはたらくろくな
し。おっと、これはこれで面白いかもしない。君は父親のことを
まだ誰にも言つてないんだな。どうせならそのことも言つふらして
やるうか」

「やめろ」怒りと恐怖で受話器をつかんでいた手を握りしめた。全
身の皮膚から冷や汗が吹き出た。

「家も引っ越さなきゃいけなくなるんじやないか? 最近また引っ越
したばかりなんだろ」

「どうしてそんなことを知つていいんだ」「言つながら、知つている
ほうの手で拳を握つた。当たりだ。電話口で話している声の主が誰
なのか、今はつきりした。

母さんに聞こえなによつに声を潜めた。「父さんのことまだ」

「さあね。自分で考えたら」

「じゃあ、その答えとやらを言つてやるうか」

鎌をかけるんじゃないことを分からせるため、すうんとみせた。

「答え?」

「やう。お前がどうして父さんや、俺が竹田たちとしていたことを知つてゐるのか」

「言つてみなよ」

電話の相手は考えの読めない、無表情な声に戻つてゐる。

台所に視線をやつた。流しから水の流れる音がある。

「お前は、大西だな」

確信を持つて、言つた。相手は何も言つてこない。図星なのか、外れていてまたもや一輝を鼻で笑うつもりなのか、とにかく黙つている。

「俺達がしていたこと、父さんや俺の住んでるところを知つてるのは、あのメンバーだけだ。それに岸田たちを襲わせるのも、お前の付き合つてたつていう連中に手伝つてもらえばできた。やうじやないか」

声にじんでしまう自信のなさを隠そうとして、威嚇するようなこわばつた言い方になつてしまつた。それでも相手は何一つ言葉を発してこない。一輝は電話の向こう側を見ることを強く望んだ。一體どんな顔をして聞いているのか、それが見れるのなら。

「無理やり解散させたから、その報復つてことか？」

電話口からはかすかなかすかなノイズの音が流れてくるだけだった。

「何とか言えよ」と言おうとした時だつた。ノイズ以外の音が耳に入つてきた。一瞬、反論をしてきたのかと思つたが、聞こえてきたのは耳ざわりなボイスチーンジャーの声ではなかつた。

「何がおかしいんだよ」

笑つている。一輝は耳を疑つた。機械を通していな肉声、それだけじゃない。聞こえてくるのはどちらかと言えば柔らかくて弱弱しく、人を馬鹿にしたような高い声で、大西の太く大きな声とは似ても似つかなかつた。

「やっぱりね。やっぱりそう思つよね。だけど残念ながらその回答は外れだ。そなへかりか君はとんでもない人に濡れ衣を着せてる。

そうだ。ちょうどこいから大西君に電話してみなよ。わざと面白ごことになる」

「どういう意味だ」

「電話してみなよ。そうすれば分かる」

そういった途端だつた。どこからか、海外のロックのメロディーが流れてきた。ぐぐもつた音は、一輝の部屋から鳴つているものだと分かつた。・・・携帯の着信音だ。

まさか、大西か？いや、そんなはずはない。たまたま大西の話をしていたところにこうも都合よく電話の鳴るはずがない。単なる思いこみだ。だいいち、大西は今電話の向うで話しているこの相手のはずだつたのに。

「ちょっと待つて。電話を切るな」

一輝は受話器を床において立ち上がつた。何がなんだかさっぱり分からぬ。頭が混乱している。あの電話の相手は大西じゃないのか？だつたら誰がどうやってこんな事をできる。一輝たちがしてきたことを知つていて、かつ一輝の住所を知つている人間があのメンバー以外にいるのか？

いや、いた。一輝は自分の考えたことの意味に凍りついた。まさか、そんなことがあるだろ？いいやありえない。

電話を取つた。鳴り続く着信音。そして、非通知の着信番号が液晶に写つている。

通話ボタンを押した。

「もしもし」

「青島か。青島だな？」

「大西！」

大西だつた。急いで居間に戻つて受話器をもう片方の耳に当てるが、切れてない。

「どうして俺の番号を知つてるんだ」

メンバーの携帯の電話番号は、あの日解散を決めたときに、互い

に全て消去することにしたのだ。一輝や谷たちの間につながりがあつたと言ひ痕跡を残さないためだ。実際に分かれ間際、消したといふことを田で確認して。

「メモを取つておいたんだ、何かあつたときのために」
両耳を受話器に当てるが、片方の声が片方から漏れてくる」とはなかつた。

「どうこう」とだ。何かあつたのか

間が空いた。「おうか言つまいか迷つてこる。今日はもう十分悪いことがおきた。まだ何かおきるつていうのか?」冗談じゃない。

「実は、齧られてるんだ。相手は俺達、達でして来た」とを全て知つてゐつて言つてゐる。手紙がポストの中に入つてた。なあどうする。ばれてるんだ何もかも

ああ、最悪だ。

「俺もだよ。齧されてる」

「なに?」

「俺もだ。同じ手紙をもらつた」

「嘘だろ」

「本当だ。なあ、お前じやないんだうつな」

「の際はつきりと言つておくべきだ。

「お前があの手紙を送つてきたんじゃないのか。全てをばらすと手紙に書いて仲間に俺の友達を襲つたんじゃないのか」

「ふざけるな。そんなわけないだろ!そもそもあいつら……お前の言つ仲間とはとつぐのとうに別れたんだ。何で青島がそんなことを知つてゐるのか知らないけどな

「村上に聞いたんだ」

「あいつか」ちつと舌打ちする。「余計なこと言いやがつて

「今はそんな」とうだつていいだろ。そうだ、竹田達には電話したのか

「したや。けど誰も出ない。みんな番号をえていたんだ。三上が残つてゐるから、4番田のお前によつやくつながつたんだ。どうす

るつもりだ。青島も金を出すよう書かれているんだろ」

「残念ながらその通りだ。10万円。たいそう欲張りなことだ」

「青島のほうが高いな。俺は5万だ」

「安く見られたな」

「黙つてろ」

「それより実は、特別ゲストにつながつてるんだ」

「誰だよ」

「手紙を送つてきた犯人」

大西は大げさに驚いてみせた。

「何だつて？！」

「本当だ。今からちょっと話してみる」

携帯電話を顔から話して家の電話に口を近づけた。

「待たせたな」

「いや、いいよ。どうだい。面白ことになつてるだらつ」ボイス

チーンジャーに戻つている。

「ホント、笑えるよ」怒りに歯をかみ締めながら、一輝は言った。

「なあ、一つ頼まれてくれるか」

「なんなりと」

馬鹿にしたような含み笑いは機械を通した声でも伝わった。

「アーツて言つていて欲しいんだ」できるだけ卑屈つぽく聞こえる
ように言った。

「ふざけてるのか」

「頼むよ。そしたら何でも要求どおりにする。別にどうしたことないだろ」

「・・・まあ、いいよ」

アーと音声が電話口から流れ出した。一輝は電話越しにあざ笑
つてやりながら、すかさず携帯電話を取つた。

「大西」

「なんだ」

もう、疑いようがなかつた。手紙を送つて、一輝達を脅迫してい

るのは大西じゃない。大西の言つていることは本当だ。

「聞こえるか。こいつだ」

そういうて家の電話の受話器を携帯にあてた。

「何だこれは」

「ご本人の声だよ」

「なんだか間抜けそうだな。ずーっとアーッて言つてるぞ」大西が

怪訝そうに言つた。「俺達はこんな奴に脅されてるのか

「そつらしいな」

「もういいだろ？ とにかく分かってるな。金を持ってこなかつたら全てをばらして、お前達が一度と人前を歩けないようにしてやる。いや、こんな事を話されれば、いやでも人前に出たなくなるかな？」

「だけど、金なんてない」

「君は仮にも大会社の経営を勤めた男の息子だろ。それぐらい何とかしろよ。10万円で我慢してやつたのはむしろ情け深いくらいだよ。それに君は親に頼んなくたつて自分の力でやれるだろ？」

思わず息を呑んだ。無意識のうちに後ろへと目を移し、台所の母さんの様子を伺つた。水場前のカーテン越しに動いている影が見える。

「それは・・・盗めつてことか」

「それ以外にあるか？」

容赦なく、言う。

「できるわけないだろ？ もうやめたんだ。それだけじゃない、10万集めるためにどれだけやらなきゃいけないと思ってるんだ。それこそ」

「ああ。それこそかなりの人数を相手にしなきゃならないだろ？ な場合によつちや捕まることも十分に考えられる」

「無理に決まつてるだろ。期日まであと何日だ。自分で言つたことだろ。それとも、延ばしてくれるつて言つのか」

言つてから、一輝は自分がその気になつていて気に気づいてぞつとした。やはり、俺は心の奥底の部分ではあの頃から何も変わっていないのだろうか。もつとも、1年近い期間は10数年的人生の中ではあまりにも長く、そう簡単に抜けきれるものでもないのかもしない。けれど、いつまでそれが続くのだろうか。一輝はあんなことをしながらも、どこかで、いつかは自然としなくなるだろ？

思っていた。だからこそ平氣でやっていたという所があった。あくまで、人生の中の一部分、一過性の嵐のようなものだと思っていたから。

けど、本当にそうなのか？人は、そんな簡単に過去から切り離せるような物なのだろうか。

一輝ははじめて自分の考えていることが単なる思い込みなのだと気づいた。テレビをつければ簡単に見つかるような人生の転機、起死回生のストーリー、そんなものは所詮想像上の物でしかないのだ。過去は常に人にまとわりつき続ける。一度に切り離せる物では決してない。俺は無意識のうちに、テレビや小説でしかありえないような都合のいい理屈だけを信じていたのだ。人は簡単には変わらない。体の中に降り積もった欲望は、身を潜めることはあるけど、勝手になくなることはない。一度押し上げられてしまった欲望のランは自然には下がらない・・・

「君はもう戻れないんだよ。自分がそういうことを始めたときに考えなかつたのか。自分のしていることはどういうことかってつて少なくとも、普通に考えれば分かるさ。中学生の坊主が手を出すには早すぎた。そして、一生、君は自らの責任を背負つて生きるんだ。死ぬまで。一生。罪を消すことはできない。人生に取り返しはつかないんだ。僕から逃げることなんてできないよ。馬鹿だよ、君は」「こらえきれないと言う風にこみ上げる笑いが相手の声について出てきた。機械がその声を写して一輝の鼓膜にいつまでも、いつまでも響いている。

俺は馬鹿だ。本当に、馬鹿だ。もうどうしようもない。俺は、人生をなめていた。

「やめろ」

は？と妙に甲高い機械の声が応えた。

「やめろ！」

一瞬、空気が凍りついた。流しの水が流れっぱなしで音を立て、カーテン越しの影が固まった。笑いが受話器の向うに吸い込まれた。

もつやめひ。言つな。俺にこれ以上聞かせるな。今は、まだ、やめ
る。

「ははっ」

一度消えた笑いが炸裂した。

「はははははっ、笑える。マジで笑える。何だ?今までなんだかんだで余裕ぶつこいててさ、いまさら『やめる』だつて?いざきつくると、今度は現実逃避か?笑わせんじゃねえよ。君つてどんだけ自受話器が、鋭い音を立てて電話に叩きつけられた。

大西が何か言つてゐる。どうなつたのか聞いているのだろうか。

一輝はそれも切つた。

何も無い。何も聞こえない。何も見えない。何も、分からない。もういいのだ、どうだつて。何だつてなるようになる。だから、俺にできることなんてない。考えるのはやめた。

考えたくなかつた。

7月18日

とんでもないニュースが飛び込んできた。

その日前田はいつもよりも遅刻して羽間出版社についていた。前日は小学校の頃の友達との同窓会で夜中の2時頃まで飲んでいて、家に帰ったのは3時近くだったのだ。目が覚めた時にはもう9時過ぎで、朝のニュースは終わり、テレビには主婦にお徳情報を伝える番組くらいしかやっていない時間だ。電源の切れた携帯電話には富元からの冷やかしのメールがたまっていた。

あわてて着替えて電話もせずに家を飛び出して電車に乗った。会社に知らせるようなことをする必要はなかつた。何しろ自分の時間は自分で考えて使えというのが会社のモットーなのだから、電話をして手間を取らせるくらいなら何も言わずに遅れたほうがいいというわけだ。一応会社のだからそれくらいの社員管理はしたほうがいいのではないかとも思ったこともあったが、取材やら何やらで忙しくなるうちにそんなものは不要なのだと分かつてきた。むしろ会社としては残業代をやる必要がなくなつて都合がいいらしい。

急いでいたから新聞も読まなかつたし、駅中のコンビニにある新聞の大見出しを目にすることもなかつた。

だから、会社についてはじめて前田はそれを知つた。

「一体、どうして

「横須証券の社員の中に幹部のしていることを知つていた人間がいたんだ」

「だから、殺した? そこまですることか?」

「犯罪者のすることなんて分からぬだろ」

犯罪者。確かにそうだけれども、横須証券の役員だつて人間だ。いくらなんでも殺人とは。家族をネタに脅すとかもつと他に手はある

つたんじゃないのか

横須証券の役員6人が、非指定暴力団に社員の殺害を依頼していた。いや、少なくとも横須証券とつながりのあつた暴力団が横須証券の社員を殺害していたというニュースは、どの新聞にも一面大見出しで飾られていた。

ビルの内側の凶行。金銭欲と殺意。週刊誌はおどろおどろしい記事を載せておりたて、日本企業の裏側が露見したままくし立てた。金のためなら犯罪も、殺人でさえもいとわない。日本人の道徳観念の崩壊。

殺害されていたと分かったのは少なくとも2人、名前は堂本弘雅と田中正志。堂本弘雅は広報部の部長で去年の4月から、田中正志は経理部の部長で、今年の3月から行方不明になっていた。堂本弘雅は所持持ちで、田中正志のほうは独身だった。今月2日、田中正志の死体が富山県の山中で見つかり、所持品の免許証などから本人の確認が取れた。死体は土の下に埋められており腐乱もひどかつたが、全身に強い打撲痕とその衝撃によると見られる頭蓋骨のひび等からそれが死因なのだと分かり、一度自動車か何かに轢かれて、それから山中に隠されたのだと推測された。

そして死体の発見後に役員6人を事情聴取し、田中正志の殺害を6人が知っていたのかと追求すると、1人がそれを認めたのだった。その後の調査でさらに堂本弘雅が行方不明になつていてることが判明し、その時期が横須証券の不正取引の始まつた以降のものだと分かれ、同日役員の一人が堂本の死体が福岡県の山中に埋まっているということを暴露したのだ。役員は埋められた場所について詳しいことは知らず、殺害や死体遺棄は暴力団員が行つたものだという見方が強かつた。

そして今日の朝、警察から田中正志の殺遺体の発見と堂本弘雅が殺害された可能性があるという発表がなされた。

マスコミにとつては幸いにも事件そのもののおきたのがわずか2ヶ月前だったので、このような大々的な報道になつたということだ

つた。

どうして殺人だったのか。動機についてはまだ何のも供述も得られていなかつた。というよりも、役員6人は殺害についての自分達の関与には全面否定しているのだ。

「俺達とは根本的に考え方が違うんだよ。犯罪者だぞ。何を考えていたかなんて分かりはしないさ」

富元の口調にいつものような柔らかさはなかつた。殺人の話をするときの富元はいつもそうだつた。なんで聞いてみたことがあつたが、適当にばかされて富本は何も教えてくれなかつた。

「そういうものか?」

「そうだよ」

絶対だ、と言い切つた。

「でないなら、前田には殺人者の考えが分かるのか?」

そういう風にいわれたら、なんて答えたらいいか分からぬじやないか。

けど、確かにいわれてみれば、人を殺す人間の考えなんて前田には分からなかつた。金のために人を殺すなんてのはさすがにやろうとは思わない。

だからこそ、金のために人を殺して見せた横須証券の役員の気持ちが分からぬのだ。金のためだけとは言い切れないかもしれない。事が露見すれば、自分の社会的地位、その後の人生が全て崩壊するのだ。けれどもそれで人を殺すか。もつと他にも手はあつただろうに。

それとも本当に、6人は殺人には関与していないのか。

「そういえば、おまえ横須証券について調べてたのはどうなったんだ。何か分かつたか？」

「まあ、あれから少しだけ」

分かつたといえば分かつたが、事件そのものとは全く関係のなさそうなことだつた。あれから前田は青島真一の家に行つていた。

「もうそろそろ潮時かな」

「なんだ、もうやめるのか」

「もう少しだけ調べるよ。それとも、今回のことと加持さんたちも横須証券の記事を書こうつて気になつてくれたならまた張り切るけど・・・」

「じゃあ諦めるんだな」

「何とかなんないものかね」

「無理だつて。なんだつたら自分で殺された2人について調べてみればいいじやないかよ」

「またか？もうごめんだよ。一人じゃ限界があるつて。前回のこととで懲りたんだ」

結局あれだけ時間をかけても、ほとんど何の進展もなかつたのだ。今回、殺人事件の調査がつとまるとは思えなかつた。

「1人じやなきや、やるのか？」

富元が怪しげに笑つた

「なんだよ」

「いい奴を知つてるんだ。別の出版社の知り合いだ。もしかしたらそいつが取材についていろいろ教えてくれるかもしれない。会つてみるか？」

「どこの出版社だよ」

「出版だ」

「え」大会社じやないか「そんなところの社員が手伝つてくれるの

か？」

「まあ、友達のよしみつてやつだ」

何がおかしいのか、富元は始終ニヤニヤ笑っている。

「どうだ、話をつけてやってもいいんだぜ」

「ああたのむ」

「よし、承った。早速電話しといてやるよ」

そう言つて富元はすぐに携帯電話を取り出した。

「おい、こんな時間に電話してもいいのかよ。相手は出版なんだろ。忙しいんじゃないのか」

「フリー・ライターなんだ。たぶん今の時間は自由にいる」

フリー・ライターって。おい、まさか。

「お察しの通り」

「ちょっと、やめろ」

「もう遅いぜ」

携帯電話を取り上げようとしたが、その通り、もつ遅かった。富元は机の間を縫つて前田から逃げ出していた。

「どなたなんですか」

後輩の亀井が、こちらの様子を見て面白そうに聞いてきた。無視して前田を追いかけようとしたが、ジーニー亭にも前田は大声で説明をしてくれた。

「こいつの昔の知り合いさ

「言つたな、やめろ」

「こいつにいる全員に暴露するつもりか。

「もう2年近く会つていないらしいんだけど、俺はこいつに紹介されて、それからも何度も連絡を取つていて」

腕を伸ばしたが、携帯にはからずに入り口振りした。

「前田さんは何で連絡を取つていらないんですか？」

亀井は容赦ない質問をぶつけてくる。

「喧嘩してな。別れたんだよ」

「別れたってまさか・・・元カノですか

言いやがつた。おっしゃる通り佐山翔子と俺は2年前まで付き合っていた。

亀井、後で表に出る。

7月20日

その日はあいにくの雨だった。天気予報では一日中曇り空と言っていたのに、午後になつて小雨が降り始め、それからだんだんと雨脚は強くなつていった。

6時間目の終わりごろ、今日は傘を持ってきてないからぬれて帰ることになるな、と思いながら一輝はぼんやりと窓から外を見ていた。教科書もノートもぐしょぐしょになるかもしれない。

ノートはとつていたけれど、一輝はろくに授業を聞く気がなかつた。どうせ聞いたつて、頭はどこかに飛んでいて、まともに耳に入つてこないのだ。2日前から調子が悪かつたけれども、昨日からは気力を出すことさえも諦めていた。全てが悪い方向に進んでいる。なんとなく理解できているのはそれくらいだった。

横須証券内で殺人があつたというニュースを聞いた時、一輝は一瞬、何かの冗談じゃないかと思った。証券取引法違反の時はそんなことなかつたのに、今度は目の前で起きていることを信じることができなかつた。あの時はまだ予感があつたからかもしれない。前日の聞いた父さんのおかしな行動や、証券会社に勤めているんだ、と言う日ごろからの身構えが。

けれど今回は違かつた。少なくとも一輝は、親が殺人に絡んでいるところなど想像したことの無いような普通の高校生だつた。だから、家に帰つて、NHKのニュースのテロップに“横須証券役員が殺人に関与？”の文字が流れ、事件の詳細がキャスターの口から語られて6人の顔写真が映し出されているのを見た途端、体が固まつてしまつた。例の件を脅される電話が来たという昨日の今日で、今度は父親が人殺しをするなんてとてもじやないが信じられなかつた。人生そんなに不幸に出来上がつているものなのだろうか。悪夢とさ

え思つた。それくらいに実感が無かつた。

母さんがそのニコースを見ながら何事も無かつたかのように雑誌を読んでいたのも、一輝に夢を見ているかのような錯覚を起しかせた原因の一つかもしだなかつた。

母さんに声をかけたが、返事はなかつた。朝のニコースを見ていたから、殺人事件のことはとっくに知つていたのだろう。一輝は何も言わずに自分の部屋に戻つた。

何もかもがどうでもよかつた。なるようになればいいのだ。俺にできることなんて何もない。そう思つてこの2日間をぼんやりと過ごしてきた。

10万円だけはお年玉や、今までの貯金を全て足して何とかなつたけれど、それで問題が解決したわけじゃないのは一輝にも分かつていた。奴は、俺をずっと脅し続けることができるのだ。10万円を出してもそれで終わりじやない。いつだつて、それこそ俺が人のかかわりを断ち切るか、泥棒話が笑つて流せるくらいの時間が経つまでずっとこの脅しは有効だ。それまでに10万円が10回、それくらいで済めばまだいいほうかもしれない。奴は俺が青島真一の息子だということを知つていて。そのうち一回に100万円要求してくるような事だつてありうる。そしたら俺はどうなる。また盗むのか。親の金を?いくらなんでも、そんなことをしてばれないはずがない。第一、盗む金が残つてゐるかどうかも分からぬのだ。母さんはまだ意地を張つて父さんの持つていたたくわえだけで生活していくこつとしているし、そのたくわえがいつなくなるかも分からぬ。奴らにそんな言い訳は通じない。あくまで、出すものは出させよつとしてくる。もし出さなかつたら、どうなる?面白半分にすることを暴露されたら・・・俺は、おしまいだ。

そうして、今日が来た。金を渡す約束の日だ。

今日しかない。今日しか状況を開けるチャンスはない。それは分かつてゐる。分かつてゐるけど、どうしようもないのだ。何の手のうちもない。俺にできることなんて、ない。

一輝は、ぼんやりと窓の外の遠くのビルを眺めた。自分の人生が暗闇に転落していく。実感のないままに、そんなことを考えていた。

昨日と同じく、今日も、気づけば家に帰っていた。 線の××方面に乗り、12駅行つたところが一輝の家の最寄り駅だった。口イヤルマンション坂田に住んでいたときと違う路線で、前よりももつと混んでいて、さらには乗車時間が30分以上増えていた。引っこ越すときになるべく安い場所を選ばなければならなかつたので、どうしても都心の東京から遠くならざるをえなかつたのだ。

部活が終わつて、家に着いたのは7時過ぎだつた。今日は剣道でも散々だつた。集中力がなかつたせいだ。久々のトーナメントでの練習試合で、一輝は結局少しも押せないままストレート負けした。

約束の時間まで、あと3時間がある。一輝は喉を通らない夕飯をほおばりながら今晚の手はずを考えた。母さんには、ちょっと近くのTUTAYAに出かけてくると言えば家をでるのは何とかなる。そしたらあとは小学校の校舎裏に自転車で行って、奴が来るのを待つ。

その先はどうするか。考へても、いい案なんて浮かばなかつた。決死の覚悟で殴りかかるか。いや、その前に相手が誰なのか、本当にあいつなのかどうかを確かめることだ。解決の糸口もあるとするならそれだけだ。あいつを、あいつらをどうやって説得するのか。

第3章（1-1）～1-2（前書き）

前話の更新からずいぶん時間がたつてしまいすいませんでした。

加えて、前話「第3章（1-0）～1-2」の末尾に一部追加しておきました。

雨が降つたせいか外はいつもよりも多少は涼しかった。ただ、その分湿気はひどかった。自転車に乗つていても、爽やかな風どころかむしむしとした空氣に全身を包まれいるような感覺しかしなった。自転車を走らせながらまわりを観察していくけれど辺りには全然人影が見当たらなかつた。せめて外に人がいて、あいつらのやろうとしていることを目撃しているようなら今日の待ち合わせはなくなるんじやないかと思つたが、それは無理そうだ。

一輝はポケットに入つた10万円に封筒の重みを確かめて目的の場所へと向かつた。

もう、いまさら考えるようなことはなかつた。ここまできたら、実際あいつらと顔をあわせて話すしかない。言いたいことはたくさんあつた。何でこんな事をしたのか、いつから計画していたことなのか、どうして俺なのか。

聞いてみなければ、もう俺には何も分からぬのだ。1年間共に罪を重ねてきた仲間は、遠く向つて、俺の敵となつてしまつたのだから。

どうしてこんな事をするのか、今したいのは、そう竹田達に尋ねることただそれだけだつた。

校舎裏には、誰もいなかつた。

その代わり、フーンスに1枚の紙切れが貼つてあつた。暗くて見えなかつたと言つてこのまま帰つたとしても、あいつらに言い訳できてしまいそなぐらい小さな紙切れだつたけど、一輝はそれを手にとることにした。近くに電灯があつたのでなんとか文字は読むことができた。ここに10万円を置いていくよう書いてある。間違いない。誰か一人は、一輝がここに来て金を置いていくのを見張つている。そんな場所はこの近くでは学校の敷地の中しかなかつた。

「でてこいよ。竹田か、谷か？ それとも・・・」

「気づいてたのか」

聞こえてきた足音は、フェンスの向こう側からだった。

「竹田か」

「そうさ」竹田の声は無表情だった。一昨日ボイスチーンジャーを使つてかけてきた奴と同じ、無表情な声だった。「おい、村上、三上、谷、出ても構ないとさ」

途端に、四方から自転車がペダルをこぐ音が近づいてきた。一輝がやつてきたほうの道から谷が、その反対から村上と三上の姿が現れた。

「久しぶりだな、青島」

谷が冷めた口調でそういった。

「お前達が全部していたのか」

「そうだ」

「一体いつから」

「最初からさ。最初から、お前が力モになることは決まつていた」

「どうしてだ」

「金があるからさ」

「そういうことだよ」

いつの間にか竹田が一輝の後ろでフェンスを乗り越えようとしていた。そのまま竹田は道路へと飛び降りた。

「青島、金を出せよ」

「どうしてこんな事をするんだ」

「いいから黙つて出せ。俺達のやつてきたことを言つふらされたくないだろ」

「一緒にやつてきたんじやないか」

「黙つて出せつて言つてるんだよ。聞こえないのかボケ野郎が」

一輝の知つている竹田ではない、と思つた。これが本当の竹田で、今までの姿はわざと着飾つて見せていた物なのか。

そうではない、と思い直した。竹田自体は変わっていないのだ。

村上も、三上も、谷も。変わったのは俺だ。今まで仲間だった青

島一輝は、もう、ただの金づるにしか過ぎなくなつたのだ。ただの金づると接するなら、どんなにぞんざいだつて構わない。唐突に怒りが湧き上がつてきた。

「何でこんな事をするんだ」

竹田は答えなかつた。答える代わりに、大きく一つため息をついてみせて、それから一輝の顔を見下ろすように眺めた。その表情には、強者が弱者を哀れむかのような優越感が満ちていた。

「青島、お前は大きな誤解をしているよ。お前はもう俺達の仲間じゃないんだ。ただの力モさ。だから俺達がこつしてお前を脅していくのに理由なんて要らないんだ。分かるか？」

「力モ・・だと」

「そうだ。力モ。ただの力モ。利用するだけして、搾り取られるだけ搾り取られて、それでお終いの力モだ。分かつたならさつさと金を」

「ふざけるな！！」

竹田が言い終わらないうちに、一輝は右手のごぶしで竹田の顔面を殴りつけていた。殴つたごぶしに顔の骨があたつて痛みが走り、遅れて鈍い音が辺りに反響した。

竹田がよろめきながら何とか体を支えて足を踏ん張つた。地面上に何かが滴り落ちている。電灯の光による反射で一輝はそれが竹田の赤い血液なのだと分かつた。

生まれて初めて人を殴つた。頭の中が、まるで熱にうなされるかのように熱い。こぶしの先がジンジンと痛かつた。

「やめろ、青島！」

谷が叫んでいる。

“青島”だと？お前はもう俺の仲間でもなんでもないんだ。軽々しく呼び捨てにするな。

そう言つたつもりなのに、声がでていなかつた。

自分の息が妙に荒くなつっていた。走つたわけでもないのに、体まで小刻みに震えていた。

ゆらりと、そういう言葉がぴったりと合ひうような動きでそれまでうつむいて鼻を押さえていた竹田が、ゆっくりと体を起こした。夏の蒸し暑い夜の空気が一瞬凍りついた。谷達が反射的に身構えて、一輝も両手を即座に持ち上げた。

竹田は口元を真つ赤な鼻血でぬらしていた。鼻からはまだまだ血が流れ続けてノースリーブのTシャツに赤いしみが広がっている。血の色が電灯の光を受けて映えていた。

そして、その顔には満面の笑みがあった。

「本当に愚かだよ。青島一輝」

骨を打ちつける鈍い音があたりに炸裂した。

「やめろ！」

後ろから村上とが飛び掛つて体を押さえつけたが、一輝は続けざまに左手で竹田を殴りつけた。今度は右腕を繰り出そうとしたが、抑えつけられたので弱弱しいパンチにしかならなかつた。それでも一輝はやめなかつた。足を振り上げて、スニーカーの先で腹のど真ん中に振り入れる。足をつかんでくる手を振りほどいてひたすら蹴り続けた。数人のこぶしに頭を殴りつけられて自分が倒れるまで、ウツとかグツと唸つて両腕で体をかばいながら地面に崩れ落ちていく竹田を一輝は力の限りで殴るのをやめなかつた。

「やめろ、青島！死んじまう！」

渾身の蹴りが竹田の頭を直撃し、竹田は後ろへと吹き飛んでコンクリートの上に崩れ落ちた。あたり一面に血が飛び散つて赤い斑点がそこら中に広がつている。か弱い息使いをかすかにもらしながら、竹田が体を丸めてうずくまり、体をぴくぴくと痙攣させていた。

「このヤロウ！」

何がおきたのか分からなかつたが、気づいた時には一輝は地面に体を叩きつけられていた。数秒遅れて首筋に割れるような痛みを感じて殴られたのに気づくと、続けざまに蹴りが腹をめがけて入つてきていた。両腕で体をかばおうとしたが意味がなかつた。ところ構わぬ、スニーカーが全身を蹴りつけ、踏みつけ、転がされた。体中

に痛みが進つて、目の前が真っ白に眩み、その視界にもスニーカーが飛び込んでくる。

左腕に電撃が走り、一輝は絶叫を上げた。が、かすれた声が口からこぼれただけだった。腕がバーナーで焼かれているのかと思った。痛みの信号が壊れている。いたい、と呻いていた。骨が折れたのだ。辺りに、荒い呼吸の音がいくつも聞こえている。肉を打ち付ける音がやんでいた。引いていかない激痛のせいで、しばらく経つまで、一輝は3人が殴るのをやめていることに気づかなかつた。

耳元に地面を踏む靴の音が聞こえた。

「これは、俺達に逆らつた罰だ」

誰かが話している。誰が言つたのか分からなかつた。

「腕が…」

「折れてるよ」

息切れした声で谷がはき捨てた。

電灯の逆行を浴びて、3人が覗き込むようにこちらを見下ろしていた。怖いとはじめて思った。殴られるかどうか、見逃してもらえるのかどうか、このまま家に帰ることができるのか、全てをこの3人が決めているということに、一輝は情けないくらいに恐怖が湧き上がってくるのを感じた。瞼からあふれ出てくる涙もとめることができなかつた。情けなかつた。恥ずかしくてしかたなかつた。けれどそれ以上に恐怖が全身を包み込んで離れなかつた。

意味がないと分かっているのに、一輝は折れていないほうの右手を伸ばして、必死に谷達から逃れようと体を引きずつた。体が地面をこすつて揺れると左腕が悲鳴を上げてそれ以上進むことができなかつた。痛みで息が速くなつた。滴り落ちる鼻水も止まらずに気道を塞ぎ、余計に呼吸を苦しくした。

もういい。10万だつて、この先の人生だつて、この痛みと恐怖から遠ざかれるのだつたら何もいらない。頼むからやめてくれ。頼むから…

「金を出せよ。おい。まだこれでも懲りないつてか？」

「分かつたから。やるから。幾らだつてやるから…」

そうかよ、といつと谷はぐつと顔を近づけて、胸倉をつかんで一輝の体を持ち上げた。腕に激痛が走つて悲鳴が口から漏れたが、谷の手は構わず上着に内ポケットをまさぐつた。10万円の入った封筒がするりとぬかれた。

「馬鹿な奴だな、お前も。おとなしく渡してれば何にもないつてのに」

服をつかんでいた手が離れて、折れた腕から体が地面に倒れた。

絶叫が夜道に溢れた。

「これだけ大声を出せば誰かがパトカーでも呼んでくれるだろ? うな」皮肉な笑いを浮かべて、谷は残りの一人に肩を支えられていた竹田のもとへ歩み寄った。

涙で視界が歪んでいたが、竹田がこっちをにらみつけているのだけははつきり見えた。顔についた血が街灯に反射して不気味な赤い色をしていた。

竹田は2人に支えられて一輝に近づいてきた。そして、一輝の前に来ると立ち止まつた。

「青島、これだけは言つとくぞ」竹田が真っ黒な目でこちらを覗きながら言つた。「お前は俺達のことをただの犯罪者で、頭の狂つた冷酷な人間だと思っているかもしだいけどな、それはお前だつて一緒なんだよ。俺達がお前を力モにしてなれば、お前だつて都合のいい誰かに同じようなことをしてたんだよ。何でだか分かるか? 俺達はもう、今までみたいなケチな犯罪じや我慢できなくなつてるんだよ。もっと刺激のある、もっと大きい、もっと完璧な犯罪じやないと、今の俺達は満たされない。お前だつて思つてるだろ。ごまかしはきかない。お前とは同じ道を歩いてきたから分かる。

別に、欲が膨れ上がつたんじゃない。欲はいつだつて同じだけあら。上がりも下がりもしないさ。変わつたのは立つてている位置だ。ラインだよ。ラインが上がつたんだ」

ライン…

「ラインは自然には下がらない。痛みを知るまで、ひたすら上がり続ける…」

遠くから甲高い機械音が響いてきて、一輝の耳に入つた。拡声器が道を譲るようにと言つていた。

「お前はある意味幸福だよ。もう、この火車から降りられるんだ」そう言つたのを最後に竹田達は背を向けて一輝から遠ざかつていつた。

後には少しづつ近づいてくるサイレンの音が残つてゐるだけだつ

た。

7月24日

待ち合わせの場所は××駅だった。羽間出版の最寄り駅であり、まだつきあっていたころ、佐山翔子と初めてデートをした駅でもあった。待ち合わせ場所をここに指定したのは宮本だったが、最初に翔子の勤める出版社の元最寄り駅にようと言つたところ、休日のにいつも行つてゐる駅になんて降りたくないと本人に断られたられて、そのなりゆきで××駅に決まつたらしい。はじめてのデートの時と今日の待ち合わせが同じ駅になつたのを知つたときはまさか宮元が仕組んだんじゃないかと疑つたが、そうではないと分かると、今度は逆に偶然の皮肉さを呪わずにいられなかつた。

何もこんな時じゃなくつてもいいのに。

よつぽど場所を変えるように頬もうかと思つたけれど、やめた。どちらにしたつて気まずいことこの上ない面会なのに、わざわざ手間をかけるような気が起こらなかつたのだ。

宮元には何とか一緒に来てくれるようになると説得できた。もともとこちらが勝手に申しつけた面会で、後から断るのも悪いと思つたし、だからといって2人だけで会う気はさらさらなかつたのだ。

けれど、なんといっても一番分からぬのが翔子が何を考えているのか、ということだった。

翔子は宮元と今でも多少連絡を取り合つていたから、はじめのうちは、友達のよしみという意味で約束を取り付けてくれたのかと思つた。そして実際、彼女の割り切つた性格からしてもそれはごく自然なことのように思つていた。

けれど後々になつて、今度は別の考えが頭をもたげるようになつた。正直なことを言へば、前田は未練が全くないと言つわけではない。つまりそういうことだつた。

だから、富元と一緒に来るよつ誘つてから、密かに後悔したりもした。もつとも、今日になつてはそのはかない希望も、既に後の祭りだ。

駅の構内は休日なのに人ごみでごつた返しになつていた。10分前に場所に着いたけれど、2人ともまだ来ていなかつた。暇つぶしに本を読んだりする氣にもなれず、前田は人ごみの中を待ち合わせをしている人たちの間に立つて改札の向うを見ながら翔子たちを待つことにした。

ちょうどそのときだつた。ポケットの携帯がなつた。取り出してみると、富元からの電話だつた。

「わるいな。今日は行けそうもないわ」

「は？」

唐突で、言葉が出てこなかつた。

「急の用が入つたんだ。待ち合わせは2人でしてくれ。いま佐山にもメール送つたから」

「ちょっと待てよ。何でこんな直前に言つてくれるんだよ！」

「こつでもしないとおまえ、2人きりで会おうとなんてしないだろ。あのさ、前田つてそういう後手なところがあるからいけないんだよ」

「いや、つていうか俺達一度別れてるんだぞ」

「だからこつしてもういちど関係を取り直す機会を提供したんじやないか」

そんなこと頼んだおぼえはないつてのに。

「お前なあ…」

続きを言おうとした口が固まつてしまつた。

佐山翔子が改札の向うに姿を現した。

「翔子……」氣まずい。あまりにも氣まずかった。なんて事してくれたんだ富元……！

「あれ、富元は？」

「いや、実は……」

図らずも、じどりもどりの声しかでてこなかつた。なんていつてもこんなシチュエーションは全く想定の範囲外で、当然2人だけで会話をする氣構えなんて少しも用意していなかつたのだ。土台不器用な俺に、いきなりこんな場面を攻略できるはずがない。

「遅刻？」

明らかに距離をとるうとしているようなしゃべり方だ。

「違うんだ。俺もついさっき聞かされたとこなんだけど、あいつ急に用事が入つたらしくて今日来れないって……」

「え！ そんなこと聞いてないよ」

翔子の目に、明らかに疑いが込められている。まさか、俺と富元が共謀してこんな場面を作つたのだと思つてゐんじゃないだろうな。「冗談じやなかつた。だまされたのは俺のほうなんだ。

「今聞いたばつかなんだつて。電話もまだつながつて……」

差し出そつとした携帯電話はとつくに切られたあとだつた。

「……ない」

「……そう。じやあ仕方ないか」

翔子は諦め顔でうなづいた。

「富元だからこんなことなんじやないかつてうすうす考えてたけど、まさか本当に実行してくるとはね。後であつたらボコボコにしてやるわ」

翔子が口にすると「冗談に聞こえなかつた。付き合つて分かつたことだが、翔子は見かけとは裏腹にかなり気が強い。

「それで、これからどうするの？ 一応資料やら何やらは」ににある

けれど

「悪いな、手間かけさせいやつて」

「いいの別に。これ、会社の同僚が調べた物なんだけども「使わなければ」とりらしいから」

「いまさら帰るわけにもいかない。」

前田と翔子はとりあえず駅中の喫茶店で話をすることにした。
「これが田中正志の履歴書。生まれは山梨県の市。学歴は…まあ、普通の学生って所ね。23歳の時に横須賀証券に入社してる。んでもつて28歳の時に東京に引っ越し。死亡したとされているのは今年だから、45歳まで22年間勤務していたことになるわ」「22年か。それで会社での地位は？」

「広報部の部長」

「とすると、上層部の、小暮や青島との接触は十分に考えられる」「それで会社の不正を知つて、口封じに殺された」「と考えると自然だけど、果たしてそれだけで殺人までするかね。言わないように念を押しておけば済む話じやないの？」

「それ以外にどんな理由が考えられるのよ」

「内部告発をしようとしたとか」

「内部告発？でも、そんなことしたら会社はもうお終いじゃない。自分の首を絞めるようなもんよ」

「そうか…。じゃあ、田中正志が特別正義感の強い人間だったとか」

翔子はふつと鼻で笑つた。

「なんかおかしいこと言つた？」

「22年も会社勤めをして、まだ正義感なんて持つてる人間なんているわけない」

「きついことをおつしゃいますな」

「だつて普通に考えたらおかしいよ。正義感が全くないと言つわけじゃないけど、日先の危険を避けることと正義感のどっちをとるつて言われたら、普通の人は前者だと思つ。私も当然そつよ」「まだ社会に出てから5年しかたつてないのに？」

「6年よ。それにうちみたいな業界は人を腐敗させるのが早いの」「確かにそうらしい。前より言つことが辛辣になつてゐる」丸めた資料が飛んできた。

「くだらない」と言つてないで、次は堂本弘雅の資料。えーと、こ
つちも23歳の時に入社だけど、田中正志よりは8歳も年下ね。出
身地は同じ山梨県。30歳の時に東京に引っ越してる

「とすると田中正志と堂本弘雅の2人は同じ年に東京に引っ越して
るのか」

「そうみたい。どうも横須賀証券の本社はもともと山梨県にあつてそ
れから東京に越してきたらしいから、そのときに2人は東京に引越
したみたいね。ついでに1部に上場したのはそれから7年後」

「ちょっと待つた。これは？」前田は堂本弘雅の履歴書の小学校の
頃の欄を指した。「何度も引越ししてるみたいだけど

「さあ、なんでしょうね。親の仕事の都合とか？」

「それにしてはこの時期にだけ集中しすぎてないかな」

資料を見ると、堂本弘雅は6年間に4度の引越しをしたといふこ
とになつていて。どこに引越ししたとまでは載つていなかつた。

「転勤の重なる時期つてのもあるんじゃないの？何度も引越しして、
それから一つの職場に落ち着いたとか」

「でも、なんでこの欄だけ引越し先が載つてないんだ？東京に移
つた時は載つてるのに」

「これ調べたの私じゃないから…」

「じゃあ、この資料をまとめた人って、どうしてもういらないうつて
言つて、翔子にくれたわけ？」

「取材が終わつて記事が書き終わつたからよ。決まつてるじゃない
つまつもう調べてないつてわけか…」前田は黙つてうつむいた。

「もしかして」

「もしかして？」

「堂本弘雅はわざと自分の引越し先を分からないように履歴書かな
んかに何も書かなかつたんじゃないか？」

「隠したって事? 何のために?」

「分からぬ。でも、何か都合の悪いことがあったのかもしれない」「IJの事件に関係した何かが?」

「そこまでは分かんないけど。いや、まてよ。だとすると前田はもう一度田中正志の資料をひっぱし出した。

「IJを見りよ」

田中正志の高校生のときの欄を指差した。

「やつぱり引越してゐる。堂本が最初に引越した、そのちょっと前だ。同じように殺害された二人が、過去の同じ時期に引越してた。この時間には何があるのかもしれないぞ」

「気になるな」翔子は資料を見比べてうーんと唸つた。

「調べてみないか? きっと新しいことが分かると思つんだ」

翔子は苦笑いを返した。

「悪いけど私そんには時間取れそうにないから。最近仕事がいっぱい入つてきちゃつて」

「つりやましい理由だ」

「悔しかつたら面白い記事でも書きなさいよ」

「ああ書くよ。この事件の裏側が明らかになるとすれば文才のない俺にだつて何とかなりそうだ」

「まあ、応援してる」

そして前田と翔子は喫茶店を後にすることにした。情報提供料金と言つことで代金は前田が払うことになった。

「あ、それと一つ聞いていい?」

「何?」

「もう彼氏とかいるの?」

「ざんねん。いませんよ」

「そろそろ身を固めておかないと時期が行つちやうどじゃないの?」「余計なお世話ね。はつ倒すよ」

「スマセンでした…。じゃあ何か進展があつたら連絡するから」

「富元に伝えといてよ。今度こんなことしたらただじや済まなくな

るって「

情報は手に入れることができた。これから取材の方針も掴めた。
あとは……ストーカー規正法で訴えられないように気をつけるだけだ。

7月30日

真っ暗な山道の中の沿道を、車で走っている。

辺りはヘッドライトも吸い込まれてしまいそうなくらいに闇が立ち込めていて、早鐘を打つ心臓の音は不安の洪水で押しつぶされてしまいそうだった。

誰もいない。ライトの照らす目の前の10メートル以外は何も見えない。窓ガラスは閉めているのに車の滑走音に混じって森の木のざわめく音が聞こえてくる。車はまた一つ急なカーブを曲がつた。うそだ。嘘に決まってる。

心の中で何度もそう呟え続けていた。

突然、目の前の山道に、折れた枝や石以外のものが現れた。急ブレーキを踏む。車はそれにぶつかるギリギリのところで止まった。一目散に車から飛び降りる。

そこにあつたのは倒されたガードレールでも、小動物の死骸でも、誰かが捨てたゴミの袋でもなかった。

ヘッドライトに照らされたそれに近づいてゆく。それはちょうど人の体の大きさで…

「おいでうした」

青島真一は飛び上がるような勢いで布団から起き上がった。全身に汗がべつとり張り付いている。

目の前にあるのはさつきまで見えていた山道ではなくて、小汚いコンクリート壁の4人部屋だった。

「うなされてたぞ。氣味が悪いたらありやしない。ぶつぶつぶつぶつ呴きやがつて。目が覚めちまつたじやねえか」

半田が布団の脇に立つて、こちらを見下ろしていた。

「もう朝だぜ」

「悪い。またあの夢を見てたから」

「つたく何なんだよその悪夢つてのは。いい加減中身を教えてくれたつていいじゃないかよ?」

「いろいろとあつたんだ」

「そう。本当にいろいろなことがあつた。だから俺は今ここにいる。ロイヤルマンション坂田のような豪華な部屋とは比べ物にならないくらい質素で、アンモニアと汗のにおいで蒸しかえる8畳間に。「別に恥ずかしがるようなことじやねえだろ。俺だつてお前にいろいろとしゃべつてやつたじやんか。隠し立てするよつなもんじやないぜ」

「事情があるんだ。察してくれよ

捕まつたつてのに何をいまさら、と言ひて半田は不満そつな顔をした。

確かに、これがただの犯罪で捕まつて終わりということだつたら俺だつてとつぐに全部話してるだらう。だけどそつじやない。まだ何もかも暴露するわけにはいかないのだ。

「おい！もう朝だぞ。起きろ。おまえらそいつらを起しらせー。」

「はい！」

いつのかにか刑務官が部屋の前に来ていた。刑務官の命令には絶対服従だ。半田は彼が遠くに行くまで待つてから小さな声でやせやいた。

「危なかつたな。見つかったのが坂田の親父（刑務官のこと）じゃなかつたら絶対に懲罰だぞ」

半田と青島は2人で寝ている4人を起しにかかった。

起床は6時40分。7時50分までが朝食の時間だ。

時間厳守、私語厳禁、異動時には掛け声、これらは刑務所内の鉄則だ。守れなければ間髪入れずに刑務官の制裁の拳が飛んでくるし、その後は懲罰が待つていて。

懲罰の対象は恐ろしく細かく、厳格で、その懲罰自体もとても耐え難い物だった。

さつきのように、起床時間前に話しかけることはもちろん、作業中にわき見をしたり、食べ物などの受け渡しや、水を使って物や体を洗つたりしただけでも5日から10日の懲罰になる。喧嘩や論争は、20日の懲罰だ。

そうした細かな違反が、絶え間なく監視を続ける刑務官達の目に入ればすぐに取調べと懲罰審査会が開かれる。

懲罰と言つのが、これが鞭で叩かれるとか肉体的なものではなくて、起床してから他の囚人たちが作業を終了するまでの時間、正座と安座をただひたすらに繰り返してじつと一点を見つめ続けていかなければならないのだ。

真一は入所してすぐに不注意で懲罰を受けてから、7日間の懲罰を受けたが、それはまさに苦痛という言葉でしか言い表せなかつた。時間だけがひたすらゆっくりと流れ続け、窓から漏れる太陽の光を眺めることぐらいしかすることがない。

そんな日が1日となくひたすら続くのだ。

そんな7日間が終わると、今度は工場を別のところへと移されて、等工が落とされ、作業金が減らされ、さらにはすすめの涙のような所持金を削りとられる。場合によつては刑期が2、3年伸ばされることもある。

作業は民間企業や国の製品を受注して作るといったもので、自給は10円にも満たず、一ヶ月の収入は千円と少し。最低労働賃金で計算して食費などを合わせてみると、囚人はただ飯ぐらいというイメージは、とんだ思い込みだといつことが分かつた。

いつもなら工場へと向かうはずの時間だった。

だが、今日だけは違った。

「青島真二、行くぞ」

教官に連れられるままに、真二は仲間の列から外れて一人通路へと出ることになった。半田の視線が疑い深げにこちらを覗いた。全員の視線が、顔は前を向いたままこちらを観察している。

廊下は暗く、コンクリート張りで、昨日の雨のにおいが染み付いていた。真二の横には2人の教官が並んで歩き、廊下には3人以外の姿はない。

いつかはこの日が来るのだと分かっていた。覚悟はできていた。心臓の音が妙に大きく聞こえてくるのはこの日があまりにも早くやつてきたせいだろう。どこから発覚したのか、社員の証言か、家族の提言か、それとも羽鳥達が何か警察に漏らしたのだろうか。それは真二の知ったことじやない。真二がしなければならないのは、ただ羽鳥達との約束を守ることだけだった。

厳重な錠に加えていくつもの南京錠がかけられた扉に突き当たつたところで、廊下に響く3人の足音が止まつた。そこは刑務所の出口へとつながる通路だった。

金属の触れ合う音が反響し、教官が外した鍵を手に、扉を開いた。もうひとりが片手で壁のスイッチを押して部屋に明かりをともした。はじめに来た時と何も変わっていない。がらんとしていて無表情で小さな部屋の中に、机が一台と着替え用の個室がぽつんと置いてある。机の上には、真二がここへやつてくるときに身につけていた所持品が並べられていた。会社用のスーツ。スラックス、腕時計、箱の中に収められた革靴。

ここに来た日の記憶が波のようにどつと押し寄せてきた。

刑が決まって拘置所を出ると、乗り込んだ警察車両の外にはどこ

から聞きつけたのか、慌ただしくフラッシュをたきながらハイエナの「ごとくマスコミ連中が群がってきた。それを抑える警官の怒号、詰め掛ける人々の勢い、顔を伏せながら車に向かう真一と小暮たち。惨めさと絶望と空虚感で既に体はぼろぼろだった。たきつける光を顔に浴びながら車に乗り込み、発車した車窓から目をそらして前を向いたが、それでも追いかけてくるマスコミの姿が目に入った。そして数時間を車で揺られ、この刑務所へと辿りつき、所持品の全てをここに残した。

「着替えろ」

横山刑務官が、戦前の軍人さながらに完全に侮蔑したような下目使いで命令した。真一はそれになだがつて個室に入つて、水色一色の制服を脱いでスーツを着込んだ。

いつたいあと何回このスーツを着られるだろつか。刑務官によるチェックを受けながら、そう思つて真一はたまらず身震いした。

「よし。では行くぞ」

部屋をいくつか抜けて、真一はついに建物の外に出た。作業をするために工場への通路を通るためでもなく、余暇の時間に広場に出たのでもない。

真一は久しく吸つたことのない刑務所の外の空気を、思い切り大きく吸い込んだ。

田中正志、及び堂本弘雅の殺害に関する裁判についての初公判の日、外に出られたという氣概を十分に満喫することもなく、青島真一は待ち受けの警察車両に乗り込んだ。

空は気の遠くなるくらいに熱い晴天で、車の外は昨日降った雨のせいで蒸しかえっていた。中は窓も締めてクーラーも寒いくらいにきいていたけれども、こころなしか、そんな夏の空気を真一は肌で感じているような気がした。

暗幕をかけられて真っ暗な車内でできることなどない。

久しぶりに煙草が吸えるというわけでも、家族や友達に会えるわけでも、ただゆっくりと一人何もない部屋で休めるということですらなかつた。

もつとも、真一はこれから自らの罪を裁かれに行くのであって、何も刑務所での生活の気分転換だとか物見遊山に行くわけではない。それでも、多少の期待を持たずにはいられなかつた。

自分の人生の土台が足元から崩れてゆく音を何年も聞き続け、それからついに崖から足を踏み外して、刑務所での3ヶ月間を過ごした。あまりにも、それは長い期間だつた。そして、ようやく今その長い苦悩から開放される時が来ようとしているのだ。

いや、羽鳥達と会つて始まつた不幸じゃないのかもしれない。この顛末が始まるずっと前から、真一は泥沼の中でもがき、苦しんでいた。社会人として世間に出てきてからずつと、年数にすれば20年近くになる。だから全てが終わつたときに、底のない疲れと、それと同時に救われたような安心感もまたどこかで感じていたのだろう。

だから俺はこつも簡単に羽鳥の最後の要求を呑んだのだろうか。今度こそ、本当に全てを終わらせて楽になりたいと思つていたから。こういう結末になると予想していたから。

俺にとつて羽鳥が現れたことが、救いだつたとでもいうのだろうか？

羽鳥…羽鳥祐一。あいつは自分の人生のことをどう思つているん

だろう。人を食い物にし、破滅させ、かつての親友を裏切つてまで、その生き血をすすつて歩むしかない人生。あのときはまだ、羽鳥が本当に暴力団に入つて、どつぶりと漬かりこんでいたということが信じられなかつた。その姿を、4月の雨の中で目にして、真一の頭の中にある羽鳥祐一は、学生時代の共に中学時代と18歳になるまでに過ごした姿が全てだつた。共に同じ道を歩み、笑い、仲たがいもし、一度は道を踏み外して、それでも前向きに進んでゆこうとした羽鳥が全てで、それはたつた一日の再開と裏切りで打ち砕くには、あまりにも頑丈な思い出だつた。

あいつは変わつた。

そうさせたのが時の流れか、田も当てられない過酷な現実か、それとも羽鳥自身の中に巣くう何者かによるものだつたのかは分からぬ。どうやつたつて、分かることはないだろ。そして今となつてはもう一度と、あいつに会うことすらできない。

仕方のないことなのかもしれない。人生のうちでたつた一人の人間がかなえることのできる望みの数など、たかが知れている。それは、俺のような奴にはなあおさらのことだつた。

そう。もう誰と会うこともできないし、何かを見たり、食べたり、聞いたり、触れたり、感じたりすることもできなくなる。人間誰しも、そのときはやつてくる。それは人によって早かつたり遅かつたりして、真一の場合は、たまたまそれがあと少しでやつて来るというだけのことだ。

ただそれだけのことのはずだつた。

なのに、どうしてこうも悲しいのだろうか? どうして、瞼の裏側が熱くなるのをおさえられないのだろうか?

真一は前部ドアから外の道路を見ようとした。流れてゆく車の列、青い標識、信号、空……全てが、ぼやけて見えた。袖をぬらして露をとろろとしたが無駄だつた。

真一は泣いていた。とめどなく流れる涙を、ひたすらぬぐつて泣き続けた。

25年ぶり、18歳の秋の最後に流して以来の、涙だった。

「法廷が開くのは1~2時ちょ'うどです。それまでここで待つていなさい。」

高級なスーツを身にまとつた痩身の男は、そう言うとすぐにはやい足取りで廊下の奥の方へと去つていつた。まだとても若く、真二よりは10歳以上年下だろうか。男は真二の弁護士だと名乗つていた。真二が自分で国選弁護士をつけてもらうよう依頼はした覚えはなかつた。刑務官の誰かが勝手に手続きを行つたのだろう。

個室の中は、刑務所の6人部屋よりもずっと狭くて、同じくらい薄暗かつた。この部屋にだつて、今回のようなことでもなければ一生来ることがなかつただろうと思って、真一は微かな哀愁に浸つた。恐怖や不安は、不思議と感じない。自分の気がおかしくなつてゐるのだなと思うことにさえ抵抗感がなかつた。

裁判の時間はあつという間にやつてきた。真一は部屋に入つてき
た数人の警備員に連れられて部屋を後にして、法廷へと向かつた。不
思議と緊張感はない。というよりも、今回の裁判が自分とはまつた
く別の人物に対して開かれているような気さえしていた。

警備員が立ち止まり、それにつられて真一も足を止めた。目の前には莊厳ないでたちの扉が道を塞いでいる。警備員の一人が取つ手に手をかけ、そして思い切り開け放つた。

最初に耳に飛び込んできたのは、漣のようないつも法廷に溢れたどよめ

き声だった。傍聴席は好奇心に満ちた人たちで満員で、立つて見ている人も座っているのと同じぐらいの数がいた。皆、真一のことを見て、互いに囁いたりじつとこちらをにらみつけたりしていた。スパーでよく見かけそうな主婦から、学生と思わしき若い男、高齢で白髪だらけの男女まで、特徴を挙げていけばきりがなかった。そうした人たちで傍聴席がはちきれんばかりに埋まっている。

何が楽しくてこんな場所に来るのだろう。自分が犯罪者について分かつたような気になるためだろうか。いかにも正義感で溢れるという目をした青年を横目に入れて、真一の胸の中に小さな怒りが灯つた。

「被告人は席に着きなさい」

裁判長の声がそう命令した。

真一は警備員に導かれるままに席に着いた。誰もが真一の一拳手一投足に注目している。四方から降り注ぐ視線が痛いくらいだつた。真一はもう一度、今度はゆっくりと傍聴席に目をやつた。真一の知っている人は誰一人としていない。

最前列には、遺影を胸に抱えた50代くらいに見える女性の姿があった。堂本弘雅の遺族だろうか。母親ということではあるまい。おそらくは堂本の妻だろう。まだ30台の後半だというのに、その顔には遠めから見てもはつきりと分かるような深いしわが刻まれていて、諦めたようなどこか遠くを見る目をしていた。この俺が夫を殺した犯人として処刑されれば、多少はあの人人の心の傷も癒えるだろうか。

裁判長が高々と開会の宣言をした。騒がしかつた法廷が一瞬で静まり返つた。

法廷には裁判官、検事、真一の裁判官すらりと並んでいる。彼らは今、俺に、青島真一に科せられる刑罰を決めようとしている。

刑罰は一度目の法廷よりもはるかに重いといふのに、一度目ほどの恐怖はなかった。それでもやはり、空気は肌に痛い。

まずははじめに裁判官に関する基本的な確認が行われ、次に、罪状

が読み上げられた。

「被告人、青島真一は、自身の勤務していた、横須証券株式会社の社員である堂本弘雅を、4月の23日頃、自身の乗用車車ではね、全身打撲で殺害し、さらにその遺体を、福岡県××市 山の山中に埋めて遺棄した疑い、加えて同様の手口で同じく横須証券株式会社の社員、田中正志を殺害、富山県 市 山山中に遺棄した疑いで、7月13日に再逮捕されました」

「これから今朗読された事実についての審理を行いますが、審理に先立ち被告人に注意しておきます。被告人には黙秘権があります。従つて、被告人は答えたくない質問に対しても答えを拒むことができます。生きるし、また、初めから終わりまで黙つてすることもできます。もちろん、質問に答えたいときには答える構いませんが、被告人がこの法廷で述べたことは、被告人に有利、不利を問わず証拠として用いられることがありますので、それを念頭に置いて答えて下さい」

一連の諸注意が終わると、真一の弁護士が立ち上がり、検察官が提示した証拠は不十分であり、犯行に被告人の乗用車が使われたからといって、必ずしもそれが被告人の手によつて行われたものだとは断定できない、という旨の陳述をした。

まだまだ若いその弁護士が、自分の受け持つた仕事の重大さを自覚して気合のこもつたしゃべり方をしているのは、法廷にいた誰もが感じたことだった。

真一はこれから自分が何をしようとしているか、その意思を彼に伝えられないことを申しわけないと思った。

第3章（20）～14（後書き）

この話の中に出でた裁判の内容については、不正確な部分が多くあるかと思いますが、どうぞご了承ください。因みに黙秘権に関する記述は、実際の裁判で言われる内容を引用したものです。

裁判は検察官の陳述へと移った。30歳代と見える女性の検察官は、青島真一が殺人を犯したのだという証拠を挙げていった。神経が図太いせいなのか、彼女は傍から聞けばとても裁判の弁論だとは思えないようなのんびりとしたしゃべり方をしていた。

「青島真一の所有している乗用車には、明らかに人を撥ねたものと見られる痕跡が残っているのが分かっています。被告人の所有している車のバンパーの曲がり具合は、ちょうど50キロから60キロの物体に、時速約80キロほどで衝突した場合と、同じくらいの衝撃が加わって曲がったものです」

彼女は衝突の状況と衝突物の関係について、数分間、科学的な検証を説明した。

「さらに、発見された二人の死体には、背中からの強い衝撃を与えたことで出来たと思われる、幾つかの骨折の跡が残っており、田中正志の死体には、同じような骨折だけではなく、被告人の所有する車のバンパーの形に、およそ一致する打撲痕も認められています。これらの点から、田中正志、堂本弘雅の両被害者は、同様に、被告人青島真一の所有する乗用車によって轢かれて、殺害されたのだと考えられます」

検察官はそう言い終えてから席に着いた。

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

弁護士が立ち上がった。

「検察官の発言にあつたように、確かに2人の被害者の殺害は、被告人青島真一の所有する車によって行われたものだと思われます。しかしそのことが、青島真一が実際に二人を殺害したという明確な証拠にはなりません。

犯行が行われたと推測され、2人の被害者が失踪したとみなされ

てはいる去年の4月14日と今年の3月21日はともに休日であります。どちらの日も青島真一が会社にいなかつたということが分かっています。いま犯行に使われたとされている青島真一の車は、横須証券株式会社本社の近くの駐車場に常時とめてあり、車の鍵は青島真一の部屋にありました。部屋の鍵はピッキングなどで開けることもでき、無断で鍵を持ち出せば、犯行は会社内にいた人間の誰であつても可能でした。被害者である田中正志と堂本弘雅に対しては、別件で被告人と一緒に逮捕起訴され現在服役中の、横須証券役員5人もまた殺害に至る十分な動機を持っています。これらの点から、犯行を行つたのが被告人であるという検察官の意見は、いささか確証に欠けるものだと思われます」

「異議あり」

「検察官の発言を認めます」

「被告人、青島真一の弁護人は、先ほど横須証券株式会社の幹部の残りの5人であつても十分に犯行が可能であり、動機も十分にあつたと発言しましたが、だとすると、何も共犯関係にあつた被告人の車を使わなくとも、自分の車を使って犯行に及んだほうがずっと効率的です。そもそも、今日この場にいない5人の役員にとつて、手間をかけ、窃盗と言う行為に及んでまで犯行に踏み切るメリットなんて、どこにもありません。したがつて、被告人の車を使って犯行を行つたのは、被告人自身以外には考えられないものと思われます」

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

「被告人を除く横須証券の役員5人にとって、彼の車を使うことは十分にメリットがあります。まず第一に、2人を殺害した真犯人が別にいたとすれば、その人物は青島真一の車を使って青島真一が犯行を行つたと見せかけて自らの嫌疑を退けることが出来ます。第2に、例え田中正志と堂本弘雅を殺害したということが警察に露見したとしても、真犯人は6人全員に犯行が可能だつたと主張して1人に犯人が絞られることを防ぐことが出来ます」

「異議あり」

「検察官の発言を認めます」

「弁護人の意見からして考えると、同じ事を役員6人全員が考え、共謀して殺害に至ったとも推測できます。それだけではありません。犯行を実際に行なった人物が6人全員に犯行が可能だと主張し、真犯人を特定させないという策謀は、被告人以外の5人だけではなく、被告人青島真一もまた、同様に行なえたのです。

そして、今回の犯行を一番実行しやすかつたのは、紛れもなく被告人、青島真一です。こうして考えると、6人の中でもつとも犯行を行つた可能性が高いのは、被告人です」

「異議あり」

「弁護人の発言を認めます」

「裁判は可能性いかんで決まるものではありません。重視すべきなのはそこにある」

「もうやめにしましようか」

法廷の中の時間が止まった。真一は席から立ち上がって、まっすぐ裁判官を見ていた。弁護士が口を開けたまま呆然と固まっている。法廷に、ざわめきが巻き起こつた。

「静肅にしてください！被告人は許可なく発言することは控えなさい」

「裁判長、もうやめにしましよう。この裁判は、無駄です」

「何を・・・」弁護士が驚ききつたと言つ風に、素つ頓狂な声を出してこちらを見た。

「裁判をしたつて意味がないんです。あなたには申し訳ないと思つています。しかし、犯人は、私なんです」

法廷内は相変わらず嵐のように飛び交う人々の声で、ろくに人1人だけの声を聞き取れるような状態じやなかつた。

「いま、何と・・・」

「ですから私は、あの2人を殺した犯人です」

「静肅にしてください、静肅に！裁判が続けられません！」

弁護士は、目の前で起きていることが飲み込めずに、当惑した様子で真一を凝視していた。

「ちょっと・・・・待ってくださいよ。じゃあ、あなたは一体何のために今日の裁判をしたっていうんです。冗談じゃない！変なこと言わないでください。裁判はまだまだこれからですよ？何を思ったのか知りませんが、このまま続ければ絶対に勝てるんですよ？」

真一は何も答えなかつた。そして、弁護士から視線を外し、裁判長のいるほうを見上げた。

「裁判長！！田中正志と堂本弘雅を殺したのは、この俺だ！！」

引き潮のよ、に、溢れかえっていたざわめき声がおさまった。

「俺が・・・・・2人を殺したんだ」

誰も、一言も発さなかつた。黙つて、被告人席に立つ一人の男を見ていた。

嘘のような静寂の中、時間だけがゆっくりと流れていった。

しばらくして、裁判官が口火を切つた。

「あなた・・・・・被告人は、今の言葉を裁判の中で参考にしてもよい発言として、言つたのですか？」

弁護士は打ちのめされたような、あきれたような表情を浮かべ、誰も彼も、何がおきているのか分からずこちらを見ていた。

「そうです」

「あなたは、この発言をした上で、判決をおおうとしているのですか？」

「そうです。これ以上、何も言つことはありません。犯人は私はです」

裁判長は当惑を顔に浮かべ、隣に座つている裁判官に何やら囁きかけた。ざわめきの波が再び法廷におこつた。

真一は目を瞑つた。やるべきことは全てやつた。後はただ流れるままに流されるだけだつた。

止まるところを知らないざわめきの波を耳の奥に聞きながら、真一はただじつと、立ち尽くしていた。

どれだけの時間がたつただろうか。辺りに大きく響いた木槌の音

で、真一は目を開いた。

ざわめきが搔き消えた。

全員が壇上に立つ裁判長に視線を送っていた。

「では、被告人、青島真一への判決を言い渡します」

3月11日

田中は一人、会議室の窓際に寄りかかっていた。曇下がりの曇り空、窓の外からは威勢のいい車の滑走音ばかりが聞こえてくる。何もかもがもう、取り返しのつかないところまで来てしまった。これこそが、本当のどん詰まりだ。

俺は人生を間違えたのだろうか。やろうと思つたならもつと別のまともな生き方だつて選べたはずだ。俺は全てを蹴つて、今日この日にまでたどり着いてしまった。何をどこで間違えたのかなんてことじやない。どれか一つ、ではないのだ。選択肢一つ一つは、言うなれば全てが間違いでもあり、正解でもあつた。そして、田中の場合はたまたま、その組み合わせが悪くて、こうなつてしまつたのだ。

役員6人には黙つて、警察に自首してくるしかない。6人にとっても、俺にとつても、唯一残された最善の方法はただそれだけだ。田中は部屋を出た。廊下には誰もいない。そのまま、何事もないような様子を装つて、田中は会社を後にした。

外は、曇り空でも十分に明るかつた。その光を浴びて乳白色に輝くビルの壁や舗装を眺めていると、自分の今住んでいる世界が何もかも嘘であるかのようだつた。

忙しく行き交う人ごみの中を、ただ一人、ぼんやりと進んでゆくうちに、田中には、自分の人生がひどく喜劇じみたものに思えてきた。めかしこんだ観客が、満席になつたホールで座席に背中をかけながら、主人公の馬鹿な振る舞いを見て、その日の鬱憤を吹き飛ばそうと笑い声を上げる喜劇の席。俺はその主人公の役を演じて、観客を笑わせている。観客の笑つている表情までが目に浮かんでくるかのようだつた。ストーリーは順調に進んでいた。生まれて、子供

から始まり、青年になり、それから少しぬけている大人になつた。いくつもの茶番を繰り返して、これでもかと笑いを誘つて会場を盛り上げた。劇はもう既にクライマックスへと近づいている。最後のどんでん返し、主人公は誰もが予想していなかつたハッピーエンドを迎えることになつてゐる。だが突然、舞台監督は主人公にこう告げた。

ハッピーホンド? 何をほざいてるんだ。そんなものは用意してないぞ。お前が最期に演じるのは、無残な死に様だ。ほら、観客が待つてゐるから、さつさと行け。

俺は監督に舞台裏から突き飛ばされて、ステージの上に尻餅をついた。観客はそんな俺の姿がおかしかくて大きな声で笑つたが、すぐによんだ。期待するようなまなざしが、俺の顔に集まつてゐる。俺はそのときよつやく、舞台の真ん中に断頭台の刃がスポットライトを浴びて輝いていることに気がついた。

行かなければいけないのか? 俺は無言で監督に問いかけた。彼もまた無言で、行けと言い返した。俺は観客の好奇の視線のさなか、おぼつかない足取りでよろめきながら、舞台の中央へと向かつた。俺は観客席を返り見た。皆、何も言わずに最後のクライマックスで俺が首を切り落とされるのを待ち構えていた。ステージの上には、俺以外には誰もいない。死刑囚を断頭台へと引きずつていくはずの刑務官も、断頭台の刃を落とすはずの死刑執行人もいない。それに俺は自ら断頭台のもとへと行かなければならなかつた。ここまで演じてきたというのに、いまさらやめることなんて出来ない。

田中は騒がしい歩道の真ん中で、突如立ち止まつた。会場に溢れんばかりにいた観客も、舞台裏から田中を見つめていた監督も、物言わずに置かれていた断頭台もそこにはなかつた。

あと10分も歩けば、交番に着く。田中は小さく首を振つた。あんな馬鹿らしい妄想など、いつもはしないのに、今日は本当にどうかしている。

田中は自分に言い聞かせて、自首することなんてなんでもないと、

無理やりに歩を進めた。

これが、最善の手段。最後の、せめてもの抵抗。そして堂本への償いなのだ。あいつのとつて、こうすることが本当に供養になるのかは知らない。けれども、これが、田中に出来ることの限界だった。だから今こうして歩いているのだった。迷いもない。恐怖も、この足を止めてしまうほどではない。歩くしかないのだ。

田中は人の流れをぬって進み続けた。車道を抜け、踏切を渡り、ひと気のない道もひたすら進み続けた。

そして、ついに交番を目にした。いや、目にしたと思った。

あと一角曲がればたどり着くというところで、田中ははたと後ろに人の気配を感じて後ろを振り返った。だが、蛇のように伸びてきたその手が正面を向くよりも先に田中の口を押さえつけて、ハンカチを持つた掌を押し付けた。

(お前は・・・)

声を上げるより前に、田中は意識を失っていた。そして、突然押し寄せた眠気に飲み込まれて、地面に崩れ落ちていた。

第4章（1）～15（後書き）

これから約2週間の間、学校の行事で家を留守にするのと、テスト週間が入るので、更新が滞ります。ご了承ください。

絶え間なく流動する波に飲まれて、底なしの沼の中に落ちてゆく一枚のコインのように、田中は朦朧とする意識の底へと沈んでいった。全身の感覚がなく、なんとか腕を沼の上のはうへと伸ばそうとしても、本当に動いているのか、それとも動いていないのか、ということすら感じられない。

真っ暗な沼の中にいるのに、沈んでゆく自分の姿は見えていた。夢なのだ、と気がついた。体中がだるかつた。軽い吐き気もする。夢だつたらすぐに抜け出せるはずなのに、田中は、泥沼の中から体を起こすことができなかつた。

まとわりつく倦怠感が拭い取れないと、田中は次にじわじわと心の底から恐怖が沸いてくるのを覚えた。

ここはどこなのか。

自分は今どういう状況にあるんだ。

後ろから押さえつけたあの腕は誰だつたんだ。

蛇のようにしなり、薄ら寒くなるような、あの無感情で冷たい腕には既視感があった。一度だけじゃない。田中は幾度となくあの腕を、あの腕の持ち主と会つていた。

”あいつ”だ。あいつに見張られていたのだ。

田中は自分の馬鹿さ加減に嫌気が差した。

迂闊だつた。少し頭を使えば分かつたことだろうに。平日のそれも昼間に出てくるはずがないと思つて油断でもしてたのだろうか。それにしてつて、せめて人影のない通りにくれば用心してもおかしくなかつたのに。

危険を無くすためなら、私は手を抜かない。

あいつはそう言つた。俺の目の前でだ。堂本が失踪して、それから初めていつもの場所で会おうという連絡が来た時だ。

あいつと会う場所は、いつだって人気のない酒場だつた。そのた

めだけに、俺はいつも都心の外れまで、眠氣からくる頭痛をこらえて、深夜に車を走らせなければならなかつた。だから、会つときはいつだつて疲れきついて、頭が重いのを感じながら話した。俺はそれ以上に、あいつと会つことに疲れを感じていた。はじめのうちは違かつた。それこそ不安と猜疑心とでとても氣を抜いてなんていられなかつたからだ。

慣れを感じてきたのは、いつからか分からぬ、計画が成功して、それからだらうか。そうしているうちにだんだんとスリルと恐怖が消えて、それまで身を潜めていた疲ればかりが表れるようになつた。自分のしていることが途方もなくあほらしく思えてきた。

だから俺はあいつに、これ以上は止めたほうがいい、手を引けと勧めた。実際計画には行きづまりが見えてきていた。けれど、あいつはいつも自分の要件を伝えるだけで、俺の意見を聞こうとすることはなかつた。

私に任しさえすれば万事大丈夫だ。変な口出しさしなくてもいい。私はいうなればプロだぞ。失敗はない。

あいつは、そう言った。

もしあのとき、俺があいつにとつて掌の中で転がすだけのただの駒でしかないということに気づいて、何もかも終わらせてさえいれば。

だが、後悔してももう遅かつた。

夢は醒めない。田中は一瞬まどろんで、次に意識が浮かび上がつた時には、まつたく別の光景の前に立つていた。

10歳の頃の田中が、小さな体を丸めて、布団の中で震えていた。冬でもないのに全身が凍りつくように寒かつた。

30年以上昔のことだ。それなのに、夢の中の映像と感触は、空恐ろしくなるほどに鮮明だつた。

隣の部屋では、父が大声で何かを叫んでいた。早口の怒鳴り声が部屋を震わし、ときどき物にこぶしの叩きつけられる音がし、張り手が空氣を裂いた。母もまた半狂乱に何かを叫び、涙交じりの声で

必死に父の話の間に割り込もうとしていた。

狂ってる。

一人とも狂ってる。

田中はわけの分からぬことわめき続ける両親の声を聞きながら、半ば絶望的につぶやいた。

もう1ヶ月近くが、ずっとこの調子だった。

親父がずっと家にいるようになったのも1ヶ月前だった。それまでは昼は会社に行っていて、1-2時近くならないと帰つてこなかつた親父が、時たま家を留守にしてゆくだけで、それ以外の時間はテレビを見たり、自室で書類に向かって何かをしているようになったのだ。仕事をしているのかと思つて食事の席で聞くと、親父は怒つたように黙り込んで何の返事もしなかつた。頑固な性格で、本人にとつていやなことを尋ねられると何もしゃべつてくれないのはいつものことだったから、それ以上無理に聞こうとはしなかつた。

一日中不機嫌で、特に、外から帰ってきたときには近寄りがたいほどの険悪な雰囲気を発していた。そういう時は必ずお袋と喧嘩をするので、田中は早々に親父のいる居間から離れて自分の部屋に引き下がることにしていた。それでも今日みたいに逃げ損ねてとばつちりに殴られることがあった。

子供心にも、親父が失業したことは察せられた。

一人が怒鳴り散らすいくつかのわけの分からぬ単語も、仕事や将来についてのものなのだと思った。

両親が離婚するまでに、それほど時間はかからなかつた。もともと喧嘩ばかりしていたのもあつたのだと思う。親父が失業した頃から半年ほどで、二人は分かれることになった。

親権は親父が持つことになった。というよりも、押し付けられるようにして無理やり父親の後についてゆかされたのだ。

離婚から少し経つてから酔っ払つた親父がそのわけを教えてくれた。お袋は家業を継いで実家に戻ることになったのだけれども、そのときお袋の家が顔を見るのも嫌なくらい毛嫌いしていた親父の子供が来ることは、お袋にとつて都合が悪かつたのだという。酒気で顔を真っ赤にさせながら、親父は、お前の母親は母親失格の最低の女だ、と怒鳴り散らした。田中がなんの表情も変えずにその言葉を聞いていると、親父はさらに怒つた。お前はあんな人間の肩を持つのか、とまで言われた。けれど別にお袋が好きだつたわけじゃない。愛情なんて感じていなかつたから、そんなことを聞いたつてシヨックでもなんでもなかつたのだ。

親父が自殺をしたのはそれからすぐだつた。親戚ははじめ何も言わずに黙つていたが、葬儀が終わつて少ししてから、電話で親父が飛び降り自殺をしたのだということを教えてくれた。関東から遠く離れた山口県の崖の下で、遺体になつて発見されたのだという。親父は友人に向けて遺書を残していく、そこに記された場所に向かつた頃にはもう事が終わつていたということらしい。理由までは言つてくれなかつたが、それくらいは教えてもらわなくても分かつた。親父は会社が倒産し、それまでも危なかつた借金のやりくりがいっきに破綻して、どうにも行きづまつていたのだ。親戚との折り合いも良くなかつた親父は頼る相手を見つけることもできず、バブル崩壊で混乱した社会のなかで職場を見つけることもできずにいた。

毎日毎日あてもなくパチンコ店に入り浸つて借金を重ね、苦しみ

を忘れようとしては更に自分の首を絞めていった。

友達も皆親父のことを見捨てた。唯一、遺書を預けられた友人だけが親身に相談に乗ってくれ、たびたび家に来たりして話をして、お前ら親子のことが心配だという風な言葉を口にしたりしたが、その男もまた生活苦で金を工面することはできず、ついには親父の生命保険を借金の返済分としてそつくり持ち去つただけで消えてしまった。

親父の葬式の時、田中は悲しみを感じることができなかつた。ただ、両親と過ごす時間が終了したのだ、としか思わなかつた。もう殴られることも、両親の汚した部屋の後片付けもしなくてもいいのだという実感だけが沸いてきて、田中は開放感に喜びを覚えた。それでも葬式の時はそんな態度は微塵も出さないようにしたし、周りの莊厳な空氣に身を潜めてじつとしていた。数少ない親戚が親父の悪癖を非難している時も、ただじつと黙つているだけだつた。

しかしそれからすぐこ、田中は自分の周りの環境がちつともよくならないということを身をもつて知らされた。

田中は親父の葬式の後、すぐに親戚の家に移ることになつた。その家は昔の家よりもずっときれいで過ごしやすく、田中はそこがとても気に入った。家の人も親切で、田中はこんなにいいところに俺なんかが住んでもいいのかと信じられない気持ちだつた。

田中は夢見心地で毎日を過ごした。以前はできるだけ早く家を出て行くためにできるだけはやく働きに出ようなんて事を考えたりもしたが、今度はうつて変わって、できることならずつとこの家に住んでいたいと思うようになつた。ここ以上の居場所はないと思つた。やさしい親戚の家族はもはや本当の家族のように感じられた。しかし、当の親戚の人たちは、田中と同じ事を思つていなかつた。13歳、中学校に上がるという、ちょうどそんな時だつた。

田中は今でもその日のことをよく覚えている。

その日、田中は卒業式を終えて友達と午後7時まで遊んできた帰りだつた。帰りが遅くなつて怒られるのかと思つたけど、おじさん

たちは何も言わなかつた。それどころかおかしな愛想笑いを浮かべては、田中が謝ろうとしたことや卒業の話をしようとするのを上の空に、ひからから始終田をそらしてばかりいた。

おじさんとおばさんは食事が終わると田中を居間に残るよつてて、一人の子供には部屋にもどるよつて伝えた。

田中は3人になつてよつやく、部屋に漂う深刻な空気が間違いじやないことを確信した。

おじさんたちは、なかなか本題を口にしようとなかつた。曖昧なことを言つてことをはぐらかしたがつてゐるのも、露骨と云つていいほどに伝わってきた。

それでもよかつた。何も聞かないですむのなら、苦しい時間がずっと続いたつて構わなかつた。けれども、結局は、田中の望むよつにはならなかつた。

君はもう、うちのようなどこにいるべきじゃない、君には君にとつてふさわしい家が他にあるんだ、とおじさんは言つた。

田中は何も言わなかつた。何も言葉か出てこなかつた。言つても意味がないのだということは、分かりきついていたから。

おじさんは、田中の沈黙を、田中の理解が追いついていないためだと思つてさらに言葉を重ねた。

君がここにいてくれることはとてもうれしいよ、でもね、君にとつて、それは本当にいいことじゃないんだ。子供に必要なのは、本当の親だよ。僕たちのよつな、代わりの親じやいけないんだ。

大人の使う詭弁だと分かつていても、田中は何も反論しなかつた。要するに、おじさんとおばさんは俺がここにいることを望んでいないのだ。俺に、どこかに行つて欲しいのだ。それだけ分かれば十分だつた。ここは俺の居場所じやなかつた。ただ、それだけのことだつた。

おじさんたちの言っていたことが嘘なのは、お袋の実家についての最初の1日ではつきりした。

お袋は田中が引っ越しす当日まで、1度も顔を見せに来たことがなかった。だから不安だったというわけではないけれど、むじうでの生活はもう今までのようにはいかないんだとは予感していた。もともとは引きとるのがいやで父親に預けたはずの子が自分の元に戻ってくるところのを、お袋が穏やかに受け止めてくれるはずがなかつた。

不安は、悪いほうの意味で裏切られた。

お袋の実家での生活はとても信じられないものだった。

家は思っていたよりも大きく、2世帯が暮らすのにも十分な広さもあって、そのおかげで何とか自分の部屋をもらひうことができた。

学校はそれなりに通い易く、入学してすぐに何人かの友達もできた。学校は楽しく、新鮮さに満ちていた。そのおかげで、家に帰るときの苦痛はよけいに大きくなつたが。

中学に入つて体も大きくなつたためか、暴力を振るわれるようなことはなかつた。親父がいなくなつたことで、お袋の不満が俺のほうに全てのしかかつてくるかもしれないと恐れていたのだ。

もつともそれは、おじさんたちの家で暮して曲がりなりにも“普通”的家庭の姿というものを知つてから、暴力にあっても今までの様に無抵抗ではなくて、お袋を変えてみようと勇んでいた田中にとつて、いくらか拍子抜けしたことでもあつた。

そして田中にとつて悪いことに、おふくろ達の不満のぶつけ方は、暴力のように目に見えた、分かりやすいものじゃあなかつた。

田中は家の中で、徹底的に無視されるようになつたのだ。
さらには、敵はお袋一人ではなかつた。

子は親に似るのだということを、田中は自分の身をもつて学んだ

つもりだつた。

暴力もしかり、キレかたもしかり、生活習慣もしかり、田中は親父やお袋と似ているところがあった。そのせいでこれまでに何度も苦しみ、どうにか2人の呪縛なら逃れられないかと願いながら、過ごしてきたのだ。もちろんそれは誰だって同じことだつた。自分以外の人もまた良かれ悪かれ親に影響を受けて生きてるはずなんだから、それを免罪符にして人生に言い逃れすることなんてできなかつた。

しかしこれを、田中のまわりにいる人たち、たとえば友達には当てはめてはみても、自分の両親そのものについて考えたことはなかつた。親父は親父、お袋はお袋で生まれた時の性格のままに生きてきたんだと思いこんでいた。

だがこの家に来て、お袋もまた同じなのだと知つた。

お袋と、祖父と祖母は、同じくらいに田中のことを憎んでいた。正確には親父のことを、死んでもなおやまないくらいに憎んでいた。そして俺は行き場のない憎しみを向ける矛先にされた。小さい頃から祖父母に会つた記憶があまりない理由も良く分かつた。祖父母は親父と血のつながつた俺を見るのも嫌がつたのだろう。親父側の人間とは、縁を切いたいとずつと思っていたのだ。

2年経つた頃には引越しが決まつた。学校にもすっかり慣れて、部活動も大会に向けて盛り上がりつつてくる頃だ。引越しは唐突で、田中にはろくに身支度をする時間も与えられなかつた。

同じことがまた何度も繰り返され、大学に上がつてからようやく、で一人暮らしをすることに決まつた。

お袋はもうあんたの顔を見ないで済む、と言つて田中を送り出した。

そのときも田中は怒りを抑えて何も言わなかつた。

大学を卒業し、田中は横須賀に就職が決まつた。大企業とまではいえないものの、収入もある程度安定した物が期待できるところだつた。親戚の手を借りることなく、自分の手で生活できると知つ

たとき、田中はお袋に別れの挨拶をして行くことを決めた。

春先に、突然家にやつてきた田中を、お袋と家の人は少し驚いて、それでも動搖を隠そうといつも以上に邪険に振舞つた。遠まわしに帰るよう促すお袋たちの間を、笑顔を装いながら押し入つた。ろくに会話もしたことのなかつたお袋に感情をぶつけて怒鳴つたのは、そのときが初めて最後だった。

俺はそれこそ小学生の頃から、あんたらから離れるためなら一人暮らしても何でも構わないって思つてたんだ。けれどもうこれでお前らなんかと顔を合わさないで済むんだ。ありがとよ。そして、永遠にさよなら。

呆然とするおふくろ達を尻目に、田中は家をでた。そして一度と戻ることはなかつた。

横須証券に復讐をしようとしたのは40歳になつた頃だつた。部署を変わって新しく赴任した職場で、会社が行なつた過去の業績に田を通していく時に、偶然にも田中の目に、その資料が飛び込んできた。過去に横須証券と合同事業を行なつていて会社のリストの中には、親父の当時の勤め先に間違いなかつた。ふと田にした名前は、田中にどこかで見たような印象を与えた。親父が勤めていたというのを確かめるのはわけなかつた。親父達が離婚した年は、その会社が契約を打ち切られたわずか1年後のことだつた。すぐにパソコンでデータを調べると、会社はその年内に倒産したことだとはつきりした。

俺は親父に勝つたんだな、と思つた。それだけだつた。田中は特に気にせず仕事を続けた。

帰りの酒場で田中は羽鳥に始めて出合つた。普通のスーツに、普通の酒。特に高く着飾つたというわけでも、会社で重職についているというわけでもなさそつた。ごく普通のどこにでもいるようなサラリーマンだ。ただ一つ変わつていたのは、その日たまたま一人で飲みに来ていた田中に話しかけてきたことだつた。

話が合つた、と思つただけで、特別な印象をもつたわけでもないし、その日一日会つただけでもう一度と会つことはないだつとも思つていた。

だが、田中がその日見つけた親父の資料のことを話していくうちに、羽鳥はだんだんと態度を変えていった。

「じゃあ、ほんとに復讐してやりましょ、うう」

田中がまどろんで、今にも眠りに落ちてしまつてしまつて、

羽鳥は言った。

そのときどんな話をしていたのか、田中はよく覚えていない。親

父の会社が倒産したおかげで、俺は散々な人生を送らされてきただとか、そういうことを言つていたのかもしれない。田中は当然、羽鳥が相槌を打つためにそんな返事を返したのだと思った。

「ええ、まつたく。そうしてやりたいですよ」

羽鳥は何故だか分からぬが、笑つた。

「できますよ」

その言葉は、相打ちをしたわけでも、田中の戯言を流そうとしたわけでもなく、計略と確信をもつて響いていた。

現実味のない受け答えを聞いて、おれは少し目が覚めた。この人は何をいつてるんだろう？

「私に任してくれれば、できます」

「まあ、冗談はこれくらいにして・・・」

不安を覚えて、おれは話を切り上げようとした。

「私の仕事つていうのは、実は普通の会社勤めじゃないんです。まあ要するに、声を大きくしてはいけないような仕事でして」

グラスの酒を飲みほす羽鳥の顔には、得体の知れない笑みが浮かんでいた。こいつは、普通じゃない。早くここから出なければ、「なんなら証拠を見せてあげてもいいですよ」

「・・・証拠？」

「見たいですか？」

「まあ・・・」

羽鳥は今までの愛想笑いが嘘のようないい目線でカウンター席のバーーンのほうを見た。そして、コートの内側をめくつて見せた。

“それ”を見た瞬間、おれは思わず息が止めてしまった。眠気が一度に吹き飛び、体が氷のように冷たくなった。

「そういうのが、趣味なんですか？」

黒光りする拳銃から田を離さずに言つた。よくテレビの刑事ドラマで見るようなものとは違う、握り口が太く、反対に銃口部分の細い小さめの拳銃だった。銃身に無理やり押し込まれた形のリボルバーには、それだけ銃身と違う銃弾が金色に光り輝いていた。

モデルガンという意味で言つたつもりだった。羽鳥もまた、そんな思惑を察したうえで返事をしたのだろう。

「ええ。こういうのって手に入れるのが難しいと思われてるようですが、案外楽に入手できるんです」

言葉が出てこなかつた。拳銃は内ポケットの中に収まつてゐるはずなのに、銃口がこちらを向いているかのように錯覚した。

「いついうチャンスつて、なかなかありませんよ。どうです。一つ私に任せてしまません?」

「しゃ、社長を殺すつもりですか」

バーテンに聞こえるように少し声を上げていつたつもりだった。

羽鳥はおかしそうに笑つた。

「これですか? そんなことをしたら大事件になりますよ。」

「はは」

「私が提案するのは、もつと確実で、法律にのつとつて横須証券をつぶす手段です」

「どうこうことです?」

「言葉の通りですよ」羽鳥は声を潜めて言つた。「きちんと法につとめた手段で、正しく言うなら法の裁きによつて横須証券をつぶす方法です」

「とりあえず、それを・・・」

田中は内ポケットの中の拳銃を指差した。

「ああ、分かりました」羽鳥は拳銃を見せるのをやめた。

「今日はこの辺にしどきましょ。私なんかには、あなたの言おうとしていることは理解できなそつだ」

「こいつは本当に頭がおかしいのかもしれない。だとしたら適当にへつらつてごまかして逃げるのが一番だ。

「私は冗談であなたに話を持ちかけようとしているわけではありません。いたつてまじめで、もちろん気が触れているわけでもありますよ」

こういう人間の出てくる小説を読んだことがあつた。自分の気が狂つていてることに本人が気づかず、どんなことを言つても聞かない、それでいて自分を否定しようとする人間を逆に排除しようとする。おれは本の中の人物を幻覚に見てにでもいるのだろうか。

「細かいことや事の運びは私達で何とかします。あなたには、会社の内部から手を回して、幹部の動きを監視していく欲しい、ただそれだけです」

「断ります。そんなことをしたつて私にとつては迷惑なだけです」

田中は救いを求めるようにバーテンを見た。知つてか知らずかバーテンはグラスを磨いてこちらに微塵も注意を払おうとしなかつた。こいつをどうにかしてくれ、と大声で叫びたかった。

「利益ならありますよ」

「会社への復讐なんて、ほんとはどうだつていいんだ!」

「1億で手を打ちませんか」

「何を言つてゐるんだあんたは」

「1億です。あなたの年を考えたら、仮に会社がつぶれて職を失うとしても十分すぎる金額だと思いますよ。前金として300万円、翌日までにあなたの口座に振り込んでおきます。私達と手を組むかどうかは、それから決めてください」

「分かりました、ですから今日はいつたん帰らせてもらいます」

田中は席を立ち上がってカウンターに向かい、財布から1万円札を取り出してバー・テ恩に渡した。

「あなたはまだ私の言つことが信じられないようですね」

急いで店を出ようとすると、後ろから羽鳥が声をかけてきた。田中は後ろを振り向いた。羽鳥は口もとに小さく笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「そんなことはないですよ」

「構いません。明日になればはつきりすることですか」

田中は店を出た。そしてすぐにタクシーを拾つて家に帰つた、タクシーに乗つている間も、後からつけてきやしないかと何度も気になつて後部ドアを覗いたが、閑散とした夜道に怪しい車は見当たらなかつた。

翌日は、羽鳥のことなどまったく気にせずに過ごした。羽鳥という名前すら覚えていなかつたし、当然、口座に金が振り込まれているかなんて確かめようとも思わなかつた。

しかし、次の給料日には、田中は自分の口座に300万円が振り込まれていたことを知ることになつた。

2日後に羽鳥からの電話がかかってきた。

「見ましたか、300万円」

「どうやつて・・・おれの口座番号を?」

「あの夜にあなたが自分の口で教えてくれたんです」

「記憶になかつた、が、そうだったに違ひない」

「どうです? 話を聞いてくれる気になりましたか」

「一つだけ教えてくれ

「何ですか？」

「仮に俺がお前達の計画に乗るとして、いつまでに全額を払ってくれるんだ」

「計画を実行に移したとき、すなわちあなたが協力を開始してから3年内には、全額、月ごとに振り分けて入れておきます。計画が始まるのは、今から見積もつてだいたい1年後くらいでしょう。あなたの協力が必要になつたら、そのときに連絡します」

「こちらからも連絡先を教えてくれ

「申し訳ないが、それはできかねます。なにしろこいつちは汚れ仕事をするわけですから、こざとこうとくにあなたが裏切つたりしたら困ります」

「計画って言つのは、どういうものなんだ

「それも、今はまだ答えかねます

「そうか・・・」

「あと、住所などは極力変えないようこにお願いします

「分かつてる

「私達に協力してくれるところ」とことで、よろしいんですね

田中は何も答えなかつた。

「ではまた1年後に

電話が切れた。

それからは銀行預金が増えているといつこと、羽鳥から何らかの連絡が来るということもなかつた。不穏なことが行なわれているといつのに、その内容が分からぬことが田中を不安がらせたが、その不安も時が経つにつれて、薄れていつた。

300万円はすぐに全額を使い切つた。羽鳥がまともな連中にながつていなゐのなら、実力行使で奪い返しに来る可能性もなきにしもあらずと思つたからだつた。高級車を見られて友人にいぶかしがられもしたが、それくらいでは田中のしてゐることが露見するはずもない。今はまだ、問題はなかつた。

そして、田中が羽鳥と最初に会つた同じ田中、よつやく連絡が來た。

「誰にもしゃべつていませんね？」

開口一番に羽鳥はそう尋ねた。

「もちろん」

「ではいいでしょ。準備はもう万端です。あとは実行に移すだけです」

「何をすればいいんだ」

「まずは、青島専務にコントакトを取ります」

青島専務とは仕事上の付き合いで何度か会つたことがある。

「どうして専務を」

「一きなり幹部全体に干渉するとパーソクを起こしたり、変に結束されてしまふかです。だからまずは一人一人を脅迫し、バラバラに、こちらの掌中にいれます」

「さて。お前らがどうやって脅迫するつもりなのかは知らないけど、そつ簡単にいくか? 会社の経営に関することで易々と首を縊に振るとは思えないぞ」

「ですから、まずは下準備をします」

「どうじつことだ」

「さつき言つたように、私たちは全員いつせいに要求を突きつけるようなことはしません。まず、例えば、親族に危害を加えるとかいう執拗な嫌がらせを仕掛けて、手始めの脅迫をします。けれど、これがそれほどの功を労するとは思つてはいません。警察に通報されればおしまいですからね。ですから、はじめに本当に小さな要求だけをする。具体的には、決算の改ざんです」

「それがなんになる」

「同じ決算について、小額づつを改ざんさせるのです。一人では誤魔化せるが、6人ではまずいことになる、そういう金額です。脅迫の内容は個人的なものですから、互いに相談することもできない。本人達は自分がちょっと手を加えるだけで全て解決すると思つているからなおさらそんなことをしようとは思わない。そこだけはしつかり念を押しますが、もしかしたらということもある。だから、あなたにはその監視をしてもらおうと思つていてます」

「なるほど……分かった」

「盗聴器を仕掛けるとか、いろいろ細かいことは後で説明します。こつして積み重なつた決算書が、本当の脅迫のネタになるんです」
「冗談ではないんだ、といまさらながら思つた。本当に、横須賀証券をつぶす手伝いをすることになるのだ。

「それで、これが具体的にどうやってあんたらの利益になるんだ？」

「それは教えられません。大事な企業秘密ですから？」

「企業秘密、か。立派な物言いだ。

「あなたの仕事の話をしましょ。青島専務への干渉です。青島専務には数枚の手紙を渡して欲しいんです。前に会つたバーかどこかで落ち合つて、そのときに渡します。郵便なんかでは跡がついていけないので」

「脅迫を書いた手紙を渡すのか？そんなことをしたらそれこそ跡がつくじゃないか」

「ちょっととした演出のために必要なんです。それに、彼はきっと私の要求を呑んでくれるでしょうからね」

「なんでそんなことが言い切れる」

「大丈夫。信用してください。私の経験則です、

「経験則……？わけが分からなかつた。何をもつてそんなことがいえるんだ。それとも、この羽鳥という男が、今までも同じようなことを手がけてきたとでもいうのだろうか。

その日は場所を聞いただけで話は終わつた。

後日、田中は羽鳥から手紙入りの封筒を数枚もらい、それぞれの使い場所についての説明を受けた。

朝早く会社にきて1枚目の封筒をビルの前に貼り付けたときは、不安で仕事に集中できなかつた。その日は一度だけ青島専務の姿を見たが、特に変わつた様子もなかつた。

羽鳥から突然の電話がきたのは、その日の夜だつた。

「計画に支障が出ました。前にお話した段取りは忘れてください。全員をいっせいに脅迫し、要求を突きつけることにします。もしもこれが失敗したら、計画は断念するものと思つてください」「どうしたんだ。なにがあつた、いまさら変更なんて」

羽鳥は少し黙つて、それから舌打ちした。

「まあいいでしょ。教えてあげますよ。どうせ言つても言わなくとも同じことですからね。今まで黙つてたんですが、私達に協力してくれた横須賀証券の社員は、あなた以外にもう一人いるんですよ。そのもう一人が、仕事をしくじつたんです」

「もう一人？もう一人いるのか？どうして今まで黙つてたんだ」

「理由なんてどうだつていいでしょ。とにかく、おかげでいろいろと問題がでてきて。いいですか。明日までにあなたの自宅のポストに封筒を入れておきます。こちらを、次の手紙を持っていくはずだつた場所に置いてください。いいですね。間違つてもおかしなことをして誰かに気取られたりすることのないよつとしてください」

「住所を、言うのか？」

「しょうがないでしょうが。それとも今から受け取りに来てくれますか？」

もう夜の1時を過ぎていた。それでなくても体の疲労がたまっているのに、今から車を出す気力なんてなかつた。

「言つておきますけど、私達は必要とあらばいつだってあなたの住所なんて調べることができますよ。言わなくたつて時間の無駄になるだけです」

「分かつた」

しかたなく田中は住所を教えた。

「では明日の朝に。頼みましたよ」

「待つてくれ、代わりに一つ教えてくれ。もう一人つてのは誰なんだ」

「あなたに言う必要はありません」

「言えない理由もあるのか」

「そんなことはない」

「じゃあ教えてくれ」

羽鳥はまたもしばし黙つて考えて、おもむろに言つた。

「宣伝部の堂本弘雅という男です。しかし、コントакトを取るようなことはできる限り控えてください」

「そうか。ありがと」

「では」

田中はソファーに寄りかかつた。

堂本弘雅。知らない名前だ。羽鳥はできることなら堂本の名前を言つまいとしていた。一人で結束して組まれるのを避けるためか、二人が知り合い出ないほうが自然で怪しまれないと思つたのか、又はそれ以外の理由か・・・。だとしたら、危ないものが隠れているような気がした。

羽鳥は俺に計画の内容も羽鳥達のことにいついても一切語ろうとしなかつた。さつきの電話にしてもそうだった。あの男は一体なにを考えているのだろう。

なんにしても、危険には違いなかつた。羽鳥が何を考えているのか、突き止める必要がある。そのためにはまず堂本弘雅と連絡を取らなくてはならない。

堂本と連絡を取るのはそれほど難しいことではなかつた。人事課にいる友人に話を通して、堂本がどんな奴なのか、資料を見せてもらつた。

それを見ると堂本は田中よりも8歳年下で、そして田中の親父がそうであつたように、堂本の父親もまた横須賀証券によつて職を失つていたということが分かつた。会社は違つたけれども時期が同じだつた。その頃はちょうどバブル崩壊のあたりを受けて横須賀証券が系列会社をはき捨てるという経営転換に打つて出ていて、経営破綻した会社がいくつもあつたのだつた。これらはみな田中から教えられて知つたことだつた。

「その頃はまだ年もそれほどいつてなくてよく覚えてはいなんですか、両親が心中自殺をしたらしくて、俺だけが残されたんですね。その後は身寄りのものに預けられたんですけど、それもやつぱりよく覚えていないんです。気づいたら孤児院で暮していて……。いろんなことがありました。世の中、両親がいないと、融通の利かないことが多いですからね。田中さんもそうだつたんじゃないですか？」

「知つてゐるのか、俺のことを？」

「はい。羽鳥から聞いたんです」

「羽鳥が・・・そうか。もしかしてこの話に乗るときから羽鳥は俺のことを話していたのか」

「そうですけど、何か？」

「いや。なんでもないんだ」

ということは、羽鳥は俺と話をしてから横須賀証券を利用することを本気で計画したのだろうか。それまでは予定段階でしかなかつたのに? だとしたら、俺が絡んだせいで計画が始まつてしまつたのか?

堂本はそのせいでも巻き込まれたのか？

「正直はじめは冗談かと思つていました。けど聞いているうちに、だんだんと現実味が見えてきました。結局話に乗りました。どちらにしても一度あの人らに田をつけられたことには、参加しなかつたらただじや済まないでしうしね」

「それで本当に、良かったのか？無理やりでもいいから断ればよかつたじやないか」

「俺が自分で望んだことです。あの人たちの強引さにはちょっと嫌気がさしましたけど。大変でした3人で交代交代に・・・」

「3人？羽鳥以外にも誰かいるのか？」

「ええ。小宮山と大船つていう羽鳥の手助けをする男達です」

「話に聞いたことすらない。そんな奴らがいたなんて。

「それで、しくじつたってのは一体何なんだ？計画を変更しなきいけないとか羽鳥は言つてたけど」

「ああ、いや、すいません。小暮社長が警察に羽鳥達がしたことを通報してしまったので」

「そりながら、堂本は俺の知らされていないところで、別に行動していたということか。「けど、どうしてお前のせいになるんだ」

「小暮署長と電話口で交渉していたのは俺でしたから」

「羽鳥が電話をしてたんじゃないのか」

「はい。そういう風に指示をされていたので。田中さんのほうは違うんですけど」

「こつちは羽鳥が電話をしたんだ。俺は手紙を青島専務に分かるよう壁にはつつけたりしただけで、あとはすべて羽鳥がコントакトを取つていた

「妙ですね。俺は他に一人にも同じような電話をしろといわれてたんですけど」

「どうして青島専務だけを・・・」

羽鳥が俺と堂本に指示していたことで、食い違いがあつたのは青島専務への電話の件だけだつた。だとしたら、これが俺たち二人に

面識を取らせまいとした理由だとでもいうのだろうか。

田中はついに知ることはないが、そのとき堂本は羽鳥と青島専務との間にもともとの繋がりがあったあつたのではないかといふことに思い至つて、後の調べで一人が高校時代に面識があるといつことを突き止めていた。けれども田中は堂本の失踪まで、ほとんど堂本と話すこともなく、その事実は闇に葬られる形になつた。

それから数ヶ月が過ぎた。

「どうこうことだ」

田中は汗で滑る受話器をぐつと握りしめて電話口に向ひて立つて、羽鳥にすゝんでみせた。

「なにがです？」

「ふざけるな。堂本が無断で会社を休んでからもう一ヶ月も過ぎてるんだぞ」

10日間、本当に気の遠くなるような10日間だつた。そして今日、ようやく羽鳥からの連絡が来たのだった。「お前達がやつたんだな、堂本を」

電話口からは何の声も流れてこない。田中がいよいよ大声で怒鳴り立つとした時に、羽鳥は口を開いた。

「ええ、そうですよ」

田中は背筋がぞつとするのを感じた。口調が、笑つている。

「なんでだ！ どうしてあいつを」

「そんなに怒らなくたつてちゃんと説明しますよ。まあ、落ち着いて聞いてください。彼はね、われわれを裏切ろうとしたんです。警察に出頭して全てを暴露しようとしたんです。だから私達はそんなことが起こる前に彼を」

「嘘だ。そんなこと信じられるか。どうしてあいつがそんなことをするんだ」

「私にだつて分かんないんですよ。ほんと、何が不満だつたといふんでしょうかね。復讐も果たせて、金だつて手に入るというのに」
羽鳥は何か楽しいことでもしゃべるかのように言った。

「堂本はお前らの都合で消されたんだ。邪魔者になつたからだろ？
利用価値がなくなつたから、だから殺したんだろ？」

「田中さん。落ち着いて考えてください。私には、あなた達の協力
が必要不可欠なんですよ？ どうして好き好んでそんなことをしなき
やいけないんです。変な勘織りは止めてください。大体そんなこと
を言つたらですね・・・」

時間が止まつた。いや、実際には羽鳥は間を空けてなんかいない
のかもしない。それなのに、田中の頭のなかでは時間は止まつて
いた。

「あなたも殺されなきゃいけないんですよ。田中さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9576c/>

ライン

2010年10月26日02時45分発行